
フェルメリア雑記

コトノハ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

フェルメリア雑記

【Nコード】

N7241W

【作者名】

コトノハ

【あらすじ】

同一世界観での短編・中編集。主にフェルメリアという国が舞台です。

各話の年代、主人公、話の場所はバラバラですが、ある程度登場人物がそろっている話は章ごとにまとめる予定です。一応、話ごとに完結しているので、どこから読んでも問題ありません。

ちなみに、ジャンルもコメディ、シリアス、ほのぼの、ラブコメ等バラバラです。

いつかこの世界観で、長編を書きたいなーと考え中です。

設定集を追加したので、小説を読んでわからんと思った部分がある人はどうぞ。

ストックが切れたので、超不定期更新中。

*いくつか以前部誌に投稿した作品があります。また、物語の設定上、チート能力を持ったキャラクターが登場しますので、嫌いな方はご了承ください。あと設定集を載せておりますが、これはあくまでも作者の自己満足のためであり、作者に無断で使用することはやめてください。

Waiting anything (前書き)

以前部誌に投稿した作品です。

Waiting anything

とあるところに、塔があつた。

そこには、『竜』がいた。

鎖に縛められた、娘。

娘は、自らを竜と称していた。

濡羽色の長い髪。緑玉石の如き瞳。彼女の美貌は、人々が思い描く

竜の姿から、かけ離れたものだった。

だが、塔の周りに住む者達は、彼女が竜であると信じていた。

なぜなら、娘は年を取らず、様々な知識を持っていたからだ。

幾年を経て、その姿は変わることなく、その知恵は人々に恩恵を
もたらした。

それゆえ娘は、尊敬と畏怖を以て『竜』と呼ばれた。

あらゆる事柄を知る『竜』にも、知らないことがあつた。

それは、『自分』。

『竜』は、己の名を知らなかった。

それどころか、どうして塔にいて、鎖に繋がれているかも、分から
ないという。

もしかしたら、知っていたかもしれない。

しかし、その記憶は、己のほぼ全ての事柄と共に、娘から失われ
ていた。

『竜』は、どんなに遠くで起こった事も知ることができた。その
彼女も、過去に起きたことだけは、知ることができなかった。

そんな『竜』は、唯一つだけ、覚えていることがあつた。

待っていること。

誰を。何を。

それすら、分からず。

ただ、待つていることだけを、覚えていた。

ある時、誰かが彼女に、記憶を探しに行けばどうかと尋ねた。

しかし、『竜』の力を以てしても、その身体を束縛する鎖を断つことはできない。

だから、娘は待つことにした。

記憶にあるように、いつかやって来るだろう、誰か、あるいは、何かを。

竜退治（前書き）

以前部誌に投稿しました。

竜退治

その森の中には、『竜』が住む塔がある。

その主は、鎖に囚われし娘。

長い黒髪と緑の瞳とを持つ、『竜』という呼び名に似合わぬ美姫。けれどその美貌は、幾年を経ても変わらぬままで、その知恵はいかなる賢者をも凌ぐ。娘が知らぬことは、ただ『己』のみ。

それゆえ、人々は娘を『竜』と呼んだ。

ある時、『竜』の塔に向かう者がいた。

「人々を惑わす邪竜め、この私が成敗してくれるわ！」

その騎士は、意気揚々と森の中を分け入って行った。

けれどもその森は深く、方向音痴だった騎士は、迷子になってしまった……。

7

一週間後。

「おのれ、邪竜め！ 幻惑の結果とは小賢しい！」

ようやく森から出られた騎士は、喚いた。

それでも、正義の騎士は挫けなかった。

しばらくして、騎士は再び『竜』が住む森へやってきた。

騎士は、『方位磁石』という魔法の品を手に入れたので、今度は迷わずに進むことができた。

騎士の目の前に現れたのは、古びた塔。

騎士は、ためらうことなく中に入る。
そして、騎士が見たのは邪竜の化身^{けしん}。
鎖に戒め^{いまし}られた、娘。

「見つけたぞ、邪竜！！　ここで会ったが百年目
騎士の長々とした口上を、『竜』はきよとんとしたまま聞いてい
た。」

「このフェデリックが成敗してくれる！！」

「はい？」
未だに事情が飲み込めていない『竜』に向かって、騎士は己の剣^{つるぎ}
を振り上げた。

甲高い金属音^{かんたか}。

騎士は剣を呆然^{ぼうぜん}と見つめた。

彼の剣。騎士となつてから苦楽を共にし、幾度^{いくど}も彼の命を救つて
きた剣。騎士の半身とも呼べる剣。

それが、半ばから真つ二つに折れていた。
「ぬ、ぬおおおおおおおお！！」
頭が真つ白になった。

そして、騎士は叫んだ後、その場から走り去つていった。

塔の中には、全く事情が分からなかった『竜』が取り残された。

「結局、あの人は何をしに来たんだろう……？」

『竜』は首を捻^{ひね}る。

それから、折れた剣の片割れに手を触れた。

何だかさっぱり分らないが、なんとなく罪悪感がある。

「そういえば、鍛冶屋^{かじや}さんがいい鉄が欲しいって言つてたな」

折れたままにしておいては悪いので、鍛冶屋に頼んで、生まれ変
わらせてもらおう。

『竜』はそう考えて、一人頷^{うなづ}いた。

さらにしばらく後。

「いざ、尋常^{じょうじょう}に勝負^{しやうぶ}!!」

騎士は懲^こりずに『竜』のもとに来ていた。

前に折れた剣の代わりに、伝説の英雄が用いたという剣^{たすき}を携えて。

「……何をしに来たの？」

『竜』は、相変わらず事情を分かっていなかった。

疑問符を浮かべている『竜』に向かって、騎士は伝説の剣を振り上げた。

甲^{かんだか}高い金属音。

今回も結果は同じだった。

また騎士が走り去った後、首を捻っている『竜』が残された。

「……あの人は一体何をしに来たの……？」

それから、折れた剣の片割れに手を触れた。

そして、『竜』は少しだけ眉根^{まゆね}を寄せる。

「今度の剣は、あまりいいものじゃないや」

そこらの鉄屑^{てつくず}と大差ない。

その品質は、近くの村の鍛冶屋が普段扱っているものと、変わらないだろう。

伝説の剣の、伝説たる所以^{ゆえん}は、伝説の英雄に使われていたから。騎士の手にあるのなら、それはただの古臭い剣に過ぎなかった。

その後、騎士は幾度も『竜』が住む塔にやってきたが、ついに『竜』を倒すことが叶わなかったという。

傾国の娘（前書き）

以前部誌に投稿した作品です。
今回シリ阿斯気味。

傾国の娘

昔々、あるところに、姫君と騎士がいた。

姫君は歌の名手であった。そして、その歌声は、聴いた者を魅了みりようせずにはいられなかった。ただ、姫君は大変美しい声を持つていたが、人前で歌うことを好まなかった。しかし、騎士だけは、姫君の歌を聴くことを許されていた。

姫君の騎士は、彼女に忠実であった。その心は、ただ、姫君だけのものであった。

ある時、偶然、高名な魔法使いが姫君の歌を聴いた。

魔法使いは、姫君に心奪われた。

そして、魔法使いは姫君を欲するようになった。

けれど、姫君の心は騎士に向けられ、彼女が魔法使いを見る事はなかった。

姫君を諦める事が出来なかった魔法使いは、騎士を殺あやめた。

そして、姫君は魔法使いに攫さらわれ、とある塔に囚われたという。

だが結局、魔法使いは、最も欲しかったものを手に入れる事は叶わなかった。

もし、…輪廻りんねが、ある…としたら……。

彼はそう言い、微笑んだ。

…必ず、……会いに……行く、から。

手の中の温もりは、もはや、失われるのを待つのみ。
泣くしかない彼女へ、彼からの、最期の贈り物。

待っていてくれ

それは、祈りの様な約束。

限りなく永遠に等しい時を旅するモノへ、限りある時を生きる者は、その変わらざる心を贈った。

流れる涙で、目を覚ます。

夢を見た。

それは淡雪の如く、目を覚ました瞬間に、掌てのひらから溶けて消えた。喪失感。

胸にぽっかりと穴があいたような。

思い出したい。

思い出せない。

けれど、それでも。

それが何だったのかも、分からず、願い。

ただただ、涙だけが溢あふれて、零こぼれる。

いつしか、娘は歌を口ずさんでいた。

日が昇り

小鳥が囀さえずり

風が歌う

それでも

愛しいあなたは、戻らない

それは、亡き人を想う歌。

その歌を誰に教わったか、娘は覚えていなかった。

時に、女の皮を被った魔性がある。

其処そこに在るだけで、人心を惑わし、国をも滅ぼす。

其れそを、傾国の美女、と人は言う。

王がそこを訪れたのは、ほんの気まぐれであつた。

己が統べる国を離れ、隣国の慶事^{けいじ}を祝いに来た。そしてその折、『竜が住む塔がある』という話を聞き、興味をそそられたのだった。仮にも一国の王とはいえ、実際に竜を見る機会など持たなかったからだ。

その塔は、森の中に埋められるようにひっそりと佇んでいた。酷く古びた塔で、入るには勇気が要りそうなほどだった。

王が入るかどうかわからず、しばし迷っていると、塔の中から妙^{たえ}なる歌声が聞こえてきた。

日が昇り

小鳥が囀り

風が歌う

それでも

愛しいあなたは、戻らない

込められていたのは、慟哭^{ううきく}で、哀愁^{あいつしゅう}で、そして、贈る者への愛情で。

それは、聞いている者まで切なくなるような歌だった。

船乗りを破滅へと誘^{いざな}う、鳥乙女^{セイレーン}の歌声の如^{ごと}く。

その歌は、王の心を捕えてしまった。

そして、王は迷うことなく、塔に入ってしまった。

塔の一階の中央に、『竜』はいた。

正確に言えば、『竜』と呼ばれる娘。

黒絹の如き長い髪、最上の宝石の様な緑色の瞳。その姿は、『竜』と呼ばれるにはあまりにも美しく、たおやかで。

しかし、娘は無骨な鎖によって、囚われていた。

その鎖が、娘が『竜』であるという証。娘自身は勿論、誰にも断つことが出来ない代物だった。

無垢^{むく}なる囚人の様な娘は、戸惑ったように王を見ていた。

王は『竜』を見て、心惹かれた。

『竜』が知らないのは、己のことだけ。

そのことを聞いていた王は、歌声の主について『竜』に尋ねた。すると娘は、少し困ったように微笑み、自分が歌っていたと答えた。その微笑みは、まるで微風そよかせの様に優しく、穏やかで。

王は、胸の高鳴りを抑える事が出来なかった。

「一緒に私の国に来ないか」

王は思わずそう言った。

けれど娘は、すぐに首を横に振った。

「待っているから……」

娘が浮かべたのは、酷く複雑な笑み。誰かに向けた愛おしさと、悲哀と、諦観ていかんと。さまざまな感情が入り混じり、絡み合う。それは、王が嫉妬しっとを抱くような、とても綺麗な微笑みだった。

それでも、王は娘を諦めがたく、娘を捕らえる鎖を壊そうとした。しかし、非情な鎖を破壊することは叶わず。

結局、王は己の国に帰るしかなかった。

王は仕方なく国へ帰ったが、娘を諦める事はできなかった。

夜な夜な娘の夢を見、遠き者を想っては、その心を焦こがした。

いつしか、王は狂気にも等しい想いに取り付かれるようになった。

その感情の前では、どんな忠臣の言葉も、羽虫が飛び回る音同然であつた。

王は戦争によつて『竜』がいる国を奪い取り、娘がいる塔を隠すように城を建てた。このとき、塔の周りに住んでいた人々は皆殺しにされてしまった。

《

つつつつ》

それは断末魔の叫び。

『竜』には、全て聞こえていた。

村人達が、何の罪もない人々が、振り絞る末期の声。

今まで出会ってきた人々の顔が、脳裏をよぎる。

『竜』は、どんなに遠くにあるものでも見る事が出来たが、その時ばかりは、見るのが恐ろしかった。

どうして

……見えていたとしても、助ける事は出来ない。

この身を縛る鎖が、こんなにも恨めしかったことはない。

「……止めて……」

耳を塞いでも、聞かずにはいられない。

「止めて

つつつつ」

娘は絶叫した。

しかし、その願いは、誰にも届かず。

涙が、止まらなかった。

そして、娘は王に怒った。彼女は、無辜の者たちの血が流れたのを、許さなかった。王は『竜』の逆鱗に触れたのだった。

どんな愛の言葉を囁こうとも、どんな贈り物をしようとも、娘が王に振り向くことはなかった。

そんな娘に王は逆上したが、王には彼女を傷つけることも、辱める事もできず。

そして、決して叶うことのない恋に身を焼かれた王は、ほどなくして狂い死んだという。

それを知る者たちは、娘を《魔女》と呼び、厭った。

夢の終わりに（前書き）

以前部誌に投稿した作品。

夢の終わりに

貴方と過ごした時間。

それと同じくらい、貴方と出会えたことは、幸せでした。

どれほどの時間を、待つことに費やしたのだろう。

湿って冷たい影は、緩やかに密やかに、身体を侵食していく。
『竜』は、つれづれと想いを巡らした。

己のことすら知らず、何を待っているのかも、分からずに。

この身体を縛る鎖は、冷たいまま。

人との交わりが絶えて、幾歳か。

この闇の中に、私は孤独。

それでも、待ち続けるのは

思い出そうとする度に、すり抜けていくものを捕まえたくて、
『竜』は静かに、目を閉じた。

昔々、魔女がいた。

いと美しき歌声を持つ、傾国の娘。

その歌声で、王を惑^{まど}わし、一国をも滅^{ほろ}ぼした。
そして、最後には王を喰^くらった。

その魔女を倒したのは、愚^{おろ}かな王の、息子。

清く強い心を持った王子には、聖なる竜の加護があつた。

魔女を倒した王子に、竜は誓^{ちか}う。

偉大なる王子が新たに治める国に、祝福を与え、末代まで見守る、
と。

それが、この国の始まり。

王子を手助けた聖なる竜は、今も城の近くにある、古びた塔^{とう}
に住んでいるという。

守護竜を殺す。

それが、彼に与えられた役目。

終わらないものは、どこにもなく。

竜に守護されるといわれる、その国にも、終焉^{しゆうえん}が近づいていた。

彼は隣国の者だった。

その国と隣国との戦争。

新兵器の投入により圧倒的有利を得た隣国の勝利を、竜の加護^{はま}が阻^は
んでいたのだ。

王都を囲む、不可視の、且^かつ、何度破壊しようとも再生する障壁の
前に、隣国の軍は成す術もなかった。

王都が陥落^{かんらく}しない限り、その国の人々の抵抗が止むことはない。

また新兵器を使おうにも、それは一体しかなく、しかも広範囲の攻
撃では無差別すぎ、王都という宝箱に使うには威力がありすぎた。

そして、彼に白羽^{はいつ}の矢が立ったのだ。

新兵器の唯一の使い手たる、彼に。

それは、彼が選んだ範囲のもの全てを、滅ぼしつくすものだったのだ。

ふと、『竜』の意識はまどろみの海から引き揚げ^あられた。

光を見るのは、いつ以来だろうか。

ぼんやりと思った『竜』は、光の中に人影を見た。

王都の外れに等しい位置にあるその塔は、守護竜が住んでいるに
ては、ずいぶん寂^{さび}れていた。

奇妙なことに、塔の扉も窓も、嚴重^{げんじゅう}に封印^{ふういん}されている。

まるで、中のものを閉じ込めているように。

その光景に違和感を覚えたが、彼はそれを頭から振りはらった。自
分がやるべきことは、守護竜を殺すことだ。

そうすれば

たった一人の家族を思い浮かべ、彼は唇^{くちびる}を噛^かみしめる。

迷うことは、許されない。

彼は、本来塔の扉であるべき部分に手を当てる。

そして、歓喜の叫びとも断末魔^{だんまつま}の絶叫^{ぜっきょう}ともつかない、甲高^{かんだか}い音が響
く。

塔の腹は消失した。

もし、…輪廻^{りんね}が、ある…としたら……。

彼はそう言い、微笑んだ。

…必ず、……会いに……行く、から。

手の中の温もりは、もはや、失われるのを待つのみ。
泣くしかない彼女へ、彼からの、最期の贈り物。

待っていてくれ

それは、祈りの様な約束。

溢れてくるのは、何だろう。

この両目から、溢れるものは。

涙は、ひどく温かい。

それは、この想いと同じ温度だからか。

『竜』の中で、何かが弾けた。

「…遅いよ……」

無理やりにも微笑んだのは、貴方は笑顔の方が好きだと言ってくれたから。

「お帰りなさい」

そして、彼女は手を伸ばした。

塔の中には、『守護竜』なんて、いなかった。

いたのは、黒髪と碧玉の瞳が印象的な娘。

その瞳から流れる涙に、胸の最奥が痛むのは、何故だろう。

「…遅いよ……」

その言葉に、謝らなければいけないと思ったのは？

そして、どうして彼女の微笑に、懐かしい喜びを感じたのか。

「お帰りなさい」

彼女が伸ばした手に、彼の手が触れた。

竜が守護した国の滅亡の後、
数多あまたの命を奪うばいし咎人とがびとは、忌いまわしき
兵器とともに、姿を消した。

たとえ、どんな結末が待っていようとも、お前の手を取ったことを、
後悔したりはしない。

夢の終わりに（後書き）

「竜の御話」の章は、これで終わりです。

彼らがどうなったのかは、そのうち別の短編として書くかもしれませんが。

少年の旅立ち（前書き）

数年前に部誌に初めて投稿した作品です。未熟なところが丸出しですが、お楽しみいただけたら幸いです。

少年の旅立ち

祖母が孫の元に訪れた時、少年は岩場で昼寝をしていた。

そこは日当たりが良かったので、下が硬すぎることを除けば絶好のお昼寝スポットだった。

「アル。アルデイルト、起きんか」

祖母が声をかけても、孫は熟睡したままだった。

「仕方がない奴だ」

祖母はため息をつく。

そして、彼女はおもむろに近くにあつた岩を持ち上げると、孫に向かってぶん投げた。

何か柔らかいものが押しつぶされる音がする。

「ぐえっ」

「アル、お前はもう十七になったな」

孫を起こした祖母は、そう切り出した。

「ば、ば様、それがどうしたんだよ」

孫が、ビクビクと警戒心も露わに答えた。

せつかくの昼寝を、岩を落とされるといふとんでもない形で中断されたのだから、当たり前だ。

こんな祖母だが、孫への愛情がない訳ではない。むしろ、海より深いと言っている。そしてさらに言えば、彼女には誰かをいじめて喜ぶ趣味もない。

が、しかし、彼の祖母は誰に対しても厳しく、加減もおかしい。

そのため、孫の彼は、祖母にたびたびえらい目に遭わされてきたのである。

「かわいい子には旅をさせよ、という諺がある」

「え…、そ、それが何？」

孫はなんだか嫌な予感がしてきた。そんな彼をよそに、祖母は続ける。

「まあ、私もお前に旅をさせるのには不安がある。お前はどうにも人の話を真に受けやすいからな」

なんかヤバそう……。孫は真剣にこの場からの逃亡を考え始めた。が、いかんせん彼は祖母から逃げ切れたことがない。

「だから、適当な町に行つて、適当に稼いで、適当に暮せ。自分ひとりでな」

「無理」

孫は即答した。

「行け」

祖母も即答した。

「無理！　つていうか嫌だ！　何でいきなり…ぐふっ」

孫はわめいてすぐに吐血した。彼はひどい虚弱体質だった。

「お前は少し病弱だが、体は無駄に頑丈だからどうにかなるだろう。必要なものはもうここに揃^{そろ}えてあるから、案じぬともいいぞ」

そう言つて、祖母は孫に荷物を押し付けた。

「行くの確定！？　俺の意志完全無視か！！　嫌だー！！　道わかんないつて！　町まで何日かかるんだ！！　ぐふっ……。そ、それに危ない場所もたくさんあるんじゃない……」

祖母と孫は、ふもとに降りるのに一週間はかかるような山の中に住んでいた。

しかも、孫はふもとの村にさえ、ほとんど行ったことがない。

孫の必死の抗議に、祖母は自信たっぷりにはほ笑んだ。

「案ずるな。安全な近道を知つておる。来い」

そう言つて、祖母は嫌がる孫を引きずつて歩きだした。

「ここだ」

「……………」

祖母が言う『安全な近道』は『道』ではなかった……。

「川じゃんっ!!」

孫の魂のツツコミは、祖母に軽く受け流された。

「この川は王都に流れ込んでおる。流されていけば迷わずつくぞ」

「王都に着く前に、おれの命が尽^つきるって!! 激流だぞ! 滝だぞ!! ぐはっ。俺何した!?! ばば様怒らせる事!」

孫が指差した川では、大量の水が勢いよく流れていた。おまけに、彼が見える範囲に二つも滝があった。こんな川で流されたら、間違^{おぼ}いなく溺^{おぼ}れ死ぬ。

どこが安全なのか。これでは、安全な近道ではなく、あの世への近道だろうに……。

「ふっ。谷に落としても火口に落としても死ななかったのだから、この程度でお前が死ぬ訳がなかるう。アル! つべこべ言わずに、行かぬかあっ!」

最後の一喝とともに、祖母は孫をドカンと蹴り飛ばした。

盛大な水飛沫^{みずしぶき}と水音がした。

「ぎゃあああああ

……………」

川に流された孫の悲鳴が、あっという間に遠ざかっていく。

「あ、しもった」

祖母は頭をかき、舌打ちした。

「アルに王都に着いたら手紙を出せと言っつのを、忘れておったな」

そして、少年は旅立った。

少年の旅立ち（後書き）

アル君は、物理的耐久性は異常に高いですが、中身がよわよわでよく吐血をするという、矛盾気味の体質です。

Happy Birthday(前書き)

これも数年前に部誌に投稿した話です。

「少年の旅立ち」と一緒に、未熟感丸出しですが、ご了承ください。
ほのぼの? コメディー系

Happy Birthday

「よしっ！」

アルは、思わずガッツポーズをした。

「どっから見ても、バースデーケーキだろ」

アルは満足げに言った。

彼の目の前には、白いものが一つ鎮座していた。

それは、たつぷりと塗られた生クリームの上に、イチゴがのせられた、丸いケーキだった。

「後はこれに入れて」

アルは鼻唄交じりに箱を取り出した。

と、

アルがその気配に気づいた時には、もう遅かった。

「ケキ　っ！」

「味見や　っ！」

二つの影が、白き獲物に躍りかかる。

「あっ、食うなよ！それプレゼントなのに！」

アルの制止も空しく、ケーキはあっという間に、襲撃者たちの腹の中へ消えた。

「うまかったわ」

「アル、腕上げたね」

アルの気も知らずにケーキの感想を言うコンビに、怒る気力をも根こそぎ奪われ、

「げふっ」

アルは吐血し、倒れた。

その日の職場での雑談は、ふとしたことから、誕生日の話になっ

た。

「皆が集まれる日が、俺の誕生日みたいだよ」

アルは大真面目に言った。

「ハ？」

「え？」

店主と女給の少女が目を丸くした。

その時は、彼らが働いている食堂が忙しい時間帯を過ぎたところで、皆で遅い昼食をとっていた。

相手の反応に、アルは首をかしげた。

「マスターとティナの誕生日は、決まった日なのか？」

「自分が生まれた日ナンダカラ、決まっているノガ当たり前ナンダヨ！」

訛りが強い口調で、マスターがアルに突っ込んだ。

「へー、そうなのか」

アルが納得したように、相槌を打った。

道理で、他の皆は、自分の誕生日がいつあるのか分かる訳だ。

「トコロデ、皆が集まれる日ッテどうということナンダ？」

マスターが、アルに尋ねた。

アルの祖母は時間に関して相当ルーズだ（長生きしすぎて時間の感覚がおかしくなったため）。そんな訳で彼女は、その日が何月何日なのか、どのくらい時間が経過したのか、ということがわからないことがしばしばある。だからアルの誕生日も、覚えていても、その日がきたとわからない（実際は、覚えられなかった……）。

けれども彼女は、かわいい孫の誕生を祝う機会が無いのは嫌だったようだ。結局、自分の知り合いを巻き込み、彼らが集まれる日が、孫の誕生日ということにしてしまった（アルの祖母には、お祝いは大勢でやるものだという固定観念があった）。

そのため、アルは自分の誕生日がいつあるのかわからない。ちなみに、アルは十七歳だが、すでに何十回も誕生日がきている（宴会の口実にされているとも言っ）。

その話を聞いて、マスターは実に複雑そうな顔をした。

「いいノカ、それで……」

「んー、いつもめちゃくちゃになるけど、楽しいよ」

アルは、あくまでも真面目に答える。

「いいな」

それまでアルの話聞いていたティナが、ぽつんと言った。

「誕生日、一緒にお祝いしてくれる人がいて」

それは、ひどく淋しげな呟き、だった。

そういえば、とアルは思い出す。

ティナの誕生日は、来週だった。

アルにとつて、ティナは、川で流されているところを助けてもらった恩人である。アルは、恩は必ず返すものだ、と、祖母に躰けられていた。

それに、ティナに淋しい顔をされるのはなんだか嫌だった。

だからアルは、ティナにバースデーケーキを贈ろうと思っていた。何故か誕生日の度に、自分のバースデーケーキを作らされていたので、アルはケーキを作ることができた（普通、自分のバースデーケーキを自分で作ることはない、最近知った）。

ティナが喜ばいいなと、なけなしのお金をはたいて材料を買い、ゴミ捨て場から拾ってきたので作るのはまずかろうと、道具を新調した。

のは、良かったが。

「なんで、イファとメティーが食べるんだ！ティナのために作ったのにー！」

完成したバースデーケーキは、祖母の知り合いに食べられた。

がつくりと床に手をついたアルの肩を、金髪の若い女と、体長六〇cmの特大ハムスターがたたいた。

「また作ればいいさ」

「きつと、喜ばれるでー」

元凶は呑気なものである。

金髪の若い女がメイティア。特大ハムスターがイファルド。このコンビはアルの祖母の知り合いで、食べ物に目がない。彼らには、知人の食べ物を横取りするという、困った習性があった。

「もう一個作る金がない……。ティナのプレゼントが……」

アルは、深く落ち込んでいた。

「っていうか、ティナって誰？彼女？」

と、メイティアが訊けば、

「あんなにちっちゃかったのに……。アル、大きくなったんやな。オカン嬉しいわー」

と、いつの間にか、アフロのカツラと割烹着かつぽうぎを着用したイファルドが涙を拭く。

反省の色が全く見られない二人（？）に、アルがキレた。

「彼女じゃない！ケーキ返せー！！……げふっ」

吐血した。

アルはひどい虚弱体質のため、しょっちゅう吐血するのだ。

さすがのイファルドとメイティアも、アルを怒らせるのはまずいと思っただけらしい。

「あー、ゴメンゴメン」

「ちよつと、落ち着いてや」

コンビはアルから話を聞くと、何かを思いついたらしく、ぼんつ、と手を打った。

その日は、ティナの誕生日だった。

けれども、むしろ沈んだ気持ちで、彼女は仕事場へ向かっていた。年に、一度しかない日。

自分がいることを一緒に祝ってくれる人がいることは、当たり前だと思っていた。

遠くにいる、兄を想う。

兄は大事な仕事に就いている。だから、自分の誕生日と一緒に祝えない。それは、しょうがない。

けれど、寂しいと思うのは、間違いだろうか。

ティナはため息をつきながら、店の扉を開けた。

パンツ、という破裂音とともに、紙テープが飛んできた。

「っ?!」

「誕生日おめでとう」

ティナの目の前に、クラッカーを持ったアルが立っていた。アルは、何やら悪戯いたずらが成功した子供の様な顔をしていた。

「こつちこつち」

ティナは訳がわからず、アルに手を引かれるまま歩き出した。

「あれっ?仕事は?」

ティナは混乱しながら、アルに尋ねた。

「今日は休み。臨時休業だから」

「え、どうして?」

「ティナの誕生会するから」

思わずティナは立ち止った。

「……どうして……?」

アルはあっさり言った。

「マスターと決めたんだ。ティナがここにいること、皆で祝おうって。皆で祝うと、楽しいし」

家族以外の人間に、そんなことを言われるなんて、思いもしなかった。

「ああああ

!!!イファもメティーもなんでここに!!!!」

アルが叫んだ。

「何？その居ちゃいけないモノを見たような叫び」

「シツレイやな。ウチらもアルの彼女のお誕生日祝いに来たんだ〜！」

料理がのったテーブルの近くに先客がいた。何故か、フォークとナイフを両手に持っている、金髪の若い女と赤毛の特大ハムスターだった。どうやら、アルの知り合いらしい。

「彼女じゃないって！！それにどうせ料理が目当てで来たんだろ。どう見ても食べる気満々じゃないか……………」

「違うねん！御馳走のほかに、アルの彼女と仕事場が気になったんや！」

「好奇心二割で、食欲八割なんだよっ！」
胸を張って言うことでもあるまい。

「ぜ、絶対むちゃくちゃになる……………」

経験あり過ぎのアルが、頭を抱えた。ちなみにアルは、イファルドとメイティアを厄病神と認識している。

そんなアルを見て、ティナは吹き出してしまった。

イファルドとメイティアの提案は、確実に、自分達が御馳走を食べるためのものであった。

けれどアルは、まあいっかと思った。

ティナが、今までにないくらい楽しそうに笑うのを、見る事ができたので。

「…そういえば、イファとメティーは、そもそも何しに来たんだ？
今更ながら、アルがコンビに尋ねる。

「あー、アディーに伝言頼まれたの。何だったっけ？」

アディーとは、アルの祖母の愛称である。

「忘れたわー。きっと御馳走食べれば、思い出すんじゃない？」

「……………」

知り合いの頼みより、御馳走が大事らしい。

「…ばば様……、人選しつかりしようよ……………」

アルは心の中で、祖母に突っ込んだ。

後日、コンビは、アルの祖母にしめられたそう。

彼女曰く、

「何をしに行ったのだ。貴様等は」

酒を飲んでも吞まれるな、という話（前書き）

以前部誌に投稿した作品です。まだまだ要修行という感じですが、
お楽しみいただけたら幸いです。

酒を飲んでも吞まれるな、という話

「マスター、何毒薬仕入れてるんだよ！」

雑用の少年に突っ込まれて、店主は苦笑した。

「違ウ。コレは『Go To Heaven』ってイウ銘柄の酒ダ」

店主の口調には、異国の訛^{なま}りがある。

「……あの世に逝け」って名前の酒って、どうなんだ？」

少年が首をひねる。そもそも、食堂で毒薬を扱う訳がない。

川で流された後遺症かどうかは不明だが、この少年はやけにここが抜けていた。

「『楽園の味』って意味ダ。これを飲めバ、楽園に行つタ気分になれるってコトダヨ。まあ、飲み過ぎれば、死んだりスルけどナ」

「やつぱり、毒じゃないか」

少年が口を尖らせる。

店主は笑った。

「何だつて、過ぎれば体に毒なんダヨ。ソレは、飲む奴の責任ダナ。飲み過ぎナイ限り、酒八良いもンダゾ」

「ふーん」

少年は、適当な返事を返した。彼は酒を飲んだことがなかったのだ、その良さがいまいぢわからなかった。

「そう言えバ、アルもテイナも酒を飲ンダことがナカタカ？じゃあ、今夜仕事が終わつたら、二人に酒をおごる力。慣れるのは、早い方が良いしナ」

少年と彼らの同僚の少女の名前を出して、店主が提案した。彼らが住む国では、飲酒に年齢制限がなかった。

後に店主は、この提案を深く後悔することになる。

ワライタケでも食べたのか？と聞きたくなる程笑いまくっていたアルが、いきなり立ち上がった。

「……ッテ、店の酒を飲むナ！アルっ！」

アルが、店のカウンター裏にあった酒を、ラッパ飲みし始めたのだ。しかも、麦酒より値段が高いウォッカ。

「コノ馬鹿給料から酒代引くゾ！」

マスターがアルを取り押さえた時には既に遅く、酒瓶は空になっていた。

「あはははますたーにやまひやってひゅ〜」

呂律ろれつが回っていない。割とマズイ状態かもしれない……。

突然、店の扉が乱暴にこじ開けられ、覆面集団がなだれ込んできた。

「金出せやコラア！！」

覆面集団の一人が怒鳴った。どう見ても、強盗だ。

マスターは頭を抱えた。悪いことは重なるらしい。

「そう言えバ、最近強盗が多発しているッテ聞いてタナ……」

聞いていただけで、実際に自分が被害に遭うとは、夢にも思っていなかったマスターであった。

一応、マスターは腕っ節に自信がある。客に酒を提供しているうちに、いつの間にか喧嘩慣れしてしまったのだ。

しかし流石のマスターも、酔っ払い二人を抱えて強盗達と渡り合うのは、分が悪過ぎる。

「早くしろ！！」

強盗の一人が叫んで、マスター達に刃物を向けてきた。

マスターは腹をくくった。こうなったら、命あつての物種だ。そして、店のカウンターの方を見た。

「まだ飲む気力！コノドアホッ！！」

思わず突っ込んだ。

「あははははは、ひよつとだへはよ、マフハ。あははははは」
どさくさに紛れて、アルがまた酒を飲もうとしていた。今度持っているのは、『Go To Heaven』だった……。

「待テ待テ、アル！！『Go To Heaven』八高かつタ
ンダゾ！アル中になってイイカラ、違ウのを飲メ！！」

酔っ払いに、制止の言葉が届くはずもない。

アルは水でも飲むように、『Go To Heaven』を飲み始めた。

余談であるが、『Go To Heaven』は、度数の高さにおいて酒の中でもトップクラスの逸品である。その味の良さも手伝い、『Go To Heaven』によつて、本当に天国に逝つてしまう人もいたりする……。

アルの手から、酒瓶が滑り落ちた。

（一周しテまともにナッタ　！！）

マスターは驚愕した。

「何だ？お前等？」

強盗達を睥睨する者は、先程まで笑いまくっていた少年と同一人物だとは思えなかった。

笑いまくっていた時には顔が真っ赤だったのに、今は普段の顔色と変わらない。

『Go To Heaven』を飲む前と比べれば、まともに見えた。

が、しかし。

アルの緑色の瞳は爛々と輝き、妙な威圧感がある。

（……コノ迫力は一体何ナンダ……？）

素面では天然ボケが目立つため、アルのこの豹変ぶりに、マスターは呆氣にとられるばかりだった。

アルの迫力に怯んだのか、侵入者たちも当初の勢いをやや失っていた。

アルが、少しばかり目を細めた。

「用がないなら、とっと帰れ」

強盗達は、この言葉を侮辱と受け取ったらしい。マスターが止める間もなく、一人がアルに襲いかかった。

アルがいたことが、強盗達にとって最大の不運だったかもしれない。

「…これ、俺がやったのか？」

アルが呆然と呟いた。記憶には、全く残っていない。

アルの手には、請求書の束があった。内訳は、酒代と店の修理代である。

「ちゃんト払えヨ」

マスターが不機嫌そうに言う。

その後、アルは、強盗達を一人残らず返り討ちにした。のは良かったが。

全く手加減をしなかったため、強盗達と一緒に、店の中もめっちゃくちゃにしてしまったのだ。

当然、修理代は壊したアル持ちになる。

「……記憶にないんだけど……」

「オレの記憶二八あるゾ」

「………お金がないんだけど……」

「給料カラ引いといテやるカラ、働ケ」

「………」

ひどい。とアルは思った。

生まれて初めての二日酔いで、一週間寝込んだのに……。

恐ろしく高い防御力に対し、アルの中身がひどい虚弱体質であることを考えれば、あの大量のアルコールを摂取して、生きているだけでも奇跡に近い。

ある意味、自業自得ではある。

そうしてアルは、若くして借金を背負うことになり、もう決して酒を飲まないと、マスターに誓わされたのであった

地獄の釜の蓋が開く（前書き）

以前部誌に投稿した作品です。

地獄の釜の蓋が開く

「……もう、ダ、メ……」

がくり、と娘の頭が落ちる。

「……！ メテイー！ しっかりするんやっ……！」

「い、イファ……あと……よろ、……しく……」

「メテイー……？ メテイー……！！」

甲高い、子供のような声かんだかが、悲痛ひつづに叫ぶ。

その光景を、アルは、涙でかすむ目で見ていた。

この度、町内の飲食店が合同で「辛いもんラリー」なる企画を行うことになったそうだ。「辛いもんラリー」とは、各店がそれぞれ独自に提供するスペシャルメニュー（もちろん辛いやつ）を食べる度にスタンプが貰え、スタンプの数に応じて景品がもらえる、というイベントである。ちなみに、完走賞（つまり、参加した店のすべてのメニューを制覇した人への景品）は、な、なんと、町内のどの店舗でも使えるプレミアム商品券……だそうな。お店にも、参加者にも、ウハウハな企画らしい。

アルとティナは、しげしげと宣伝チラシを見ていた。

彼らが勤務する食堂、【銀鱗亭ぎんりんてい】も参加するようで、店の主であるマスターはオリジナルメニューの開発に余念がない。

「どんなメニューになるのかな」

給仕係であるティナは、無邪気に顔を輝かせていた。

マスターが作る料理は、どれもおいしいので、新メニューの味見は二人の密かな楽しみであったりする。

「うーん、でも、今回のメニューって、すごく嫌な予感がするんだけど……」

アルは、渋い顔で厨房の方を見る。……何やら不気味な音がするのは、果たして気のせいだろうか……。

「……まあ、マスターが【赤竜亭】の人に対抗意識を持っているのは、確かだよな」

先日の彼らのやり取りを思い出したのか、ティナは若干引きつった笑顔を浮かべた。

と、突然、二人に凄まじいまでの刺激臭が襲いかかった。

「っ！！」

「んがっ！！ わっ、なんだ！？これっ！！」

アルもティナも、咳き込む。喉や目や鼻の奥、皮膚よりも弱く敏感であるう粘膜の部分に、激痛が走った。

「フッフッフ」

マスターの、不気味すぎる笑い声が響き渡る。

マスターにイファとメティーがうつった。

その光景をかすむ目で見たアルの背に、戦慄が走った。

ところで、イファとメティーとは、六十センチの特大ハムスターと金髪娘という、変わった、且つ、はた迷惑なコンビのことである。

毒ガスの中でも動き回れそうな重装備のマスターは、刺激臭の発生源を持っていた。

いつも【銀鱗亭】で使われている、深皿に盛られたそれは、

世にも不吉な赤色をしていた。

「……マスター、それ、何？」

喉の痛みのせいで、質問はとぎれとぎれになった。

「イベント用ノメニューダ。名前八地獄ノ釜とイウ」

いっそ清々（すがすが）しいほどに、マスターが言い切る。

「げほっ。…食べ物、名前、じゃ、ないよね……」

咳をしながら、ティナが控えめに指摘した。

あの料理を通り越した存在のせいで、ティナは涙が止まらなくなっている。

「えー、そんなの、出すの？」

客が来なくなるよ、という、アルの言外げんがいの主張は、マスターに気づいてもらえなかった。

「フフン。【赤竜亭】ノメニューよりモ断然辛いゾ」

マスターは、妙な対抗意識とこういしに囚とらわれてしまっているらしい。もう、メニューの客受けなど、度外視どがいししている。

「……辛いのもここまできたら、凶器に近いね……」

ティナが、泣きながらメニューについての感想を漏らした。

「辛いものラリー」なんて大っ嫌いだ。

イベントが始まり、一週間。

アルの心の中の愚痴ぐちの頻度ひんどは、ウナギ登りであった。

もちろん元凶は、『地獄の釜』と名付けられた、スペシャルメニュー。

最早もはや、凶器どころか兵器になるのではないか、といわれる辛さである。

ただ運ぶだけでも大変負担になるらしく、ティナが寝込ねこんでしまった。

だから、アルがティナの仕事を兼任する羽目はめになってしまっている。正直、あれを運ぶぐらいなら、アルもいつそ寝込んでしまいたかった。それなのに、さつさと彼の刺激臭に適応してしまった自分の身体が恨めしい……。倒れたいのに、倒れられない。

アルは、憂鬱ゆううつな溜息ためいきをついていた。

下手をしなくても、辛さのあまり、食べる前から悶絶もんぜつしかねない料理なのに、注文する者が絶えない。物好きが多すぎだろ、とアルは胸の内ではやく。

実は、完走賞のプレミアム商品券はかなりの額であり、それを目当てに『地獄の釜』注文する者が多く出ていた。しかしながら、それを完食できた者は、未だにいない。

「やつほー！」

「アルー、久しぶりやーん」

能天気な、そして、よく知った声がした。見ると、金髪の娘が店に入ってきていた。彼女は、パタパタと前足を動かす、大きなハムスターを抱えていた。

「げ。イファとメティーじゃん」

アルは、条件反射的に嫌そうな声を出していた。今まで、このコンビによる数々の被害にあってきたが故である。ちなみに、金髪娘はメイティアといい、ハムスターの方がイファルドという。

「その反応はなんやねん！」

びしつとイファが突っ込むその横で、

「ラリーのスペシャルメニューお願い！！」

メティーは『地獄の釜』を頼んだ。

「……やめといた方がいいよ」

アルの顔が引きつる。

近くのテーブルでは、『地獄の釜』を一口食べた客が轟沈していた。また違うテーブルでは、驚異の激辛料理を前に、客が食べる前から打ち臥している。

「何ゆ てんねんっ！！ ここで辛いもんラリーコンプリートやねん！」

「この食べたら、商品券ゲットなんだよ！ タダ食いし放題だよっ……」

殊、食べ物に関するとなると、見境のなくなるこのコンビを止める術は、アルにはなかった。

「……知らないからな……」
アルは溜息交じりにいった。

皿の中の赤い液体から出る湯気は、嫌になるほど涙を誘う。

目と鼻の奥の痛みに耐えながら、アルはスペシャルメニューをメ
イティアとイファルドが座るテーブルに運んだ。

「うっわー、すごい色　、むはあっ!？」

メティーが、その刺激臭をうっかり深々（ふかぶか）と吸い込
でしまい、鼻を押さえた。

「き、強烈だね……」

すでに涙目になっている。

「ふっ、相手にとって不足なしや!!」

イファは勇ましくスプーンを突き上げた。

それからは、双方ともしばらく無言だった。

イファもメティーも、紅き地獄をせつせと口に入れていた。ただ
し、彼らの顔には苦悶の表情がありありと浮かんでいる。しかしな
がら、今まで二口目を食えることができた客がいなかったことを考
えれば、充分快挙である。

どちらも水をがぶ飲みしていたため、アルは、水差しを何度も変
える羽目になった。

沈黙は、突如破られた。

「……もう、ダ、メ……」

がくり、とメティーの頭が落ちる。

「!!! メティー! しっかりするんやっ!」

「い、イファ……あと……よろ、……しく……」

「メティー!? メティ　　!」

イファの悲痛な叫びが、店内に響き渡った。

「いや、そんな無理してまで食べなくてもいいだろっ!」

アルの突っ込みは、最早メティーの耳には届かない。

「くっそー、メティーの敵や!」

イファは、勢いよく、半分ほどに嵩を減らしたそれに向かってい
った。

そして、

「ふっ、ひよろいもんひゃ」

イファルドの皿は、空になった。

ちよろいもんや、と言おうとしたようだが、舌が馬鹿になって呂律が回らなかつたらしい。

「そんな無理しなくても……」

アルは、呆れ半分感心半分に溜息をつきつつ、イファの応募用紙にスタンプをついた。

イファは、ぐったりとテーブルにうつ伏せになっている。

「チッ、完食された力」

「完食できるの作ろうよ、マスター。ここ、食堂なんだし」
悔しそうなマスターに、アルは突っ込む。

と、火が燃えるような音と共に、焦げくさい臭いが広がった。

「へ？」

顔を向けると、何故かテーブルの半分と店の床の一部がなくなっていて、床の上に転がったイファルドが、口から炎を吹いていた。

「！！！」

アルは咄嗟に、イファルドの頭と顎を押さえつけた。

「な、なんでこんなことに?！」

アルは狼狽して叫ぶ。

ちなみに、こんなとき一番騒ぐはずのメティーは、未だに撃沈したままである。

「タブン、隠し味ノ火竜草だナ」

「マスター、食べるの入れようよ!!ここ、食堂なんだから!」

火竜草とは、超が何個もつくような辛さで知られる植物だ。そして、この草は不思議な効能があり、一定量を食すとしばらくの間口から火を吐くことができるようになるのである。その火炎は相当な威力で、火竜草の名の由来ともなっている。つまり火竜草は、いろんな意味で必殺アイテムといえる。

無論、食用などではない。

イファルドが食べた料理の中に、その効果が表れるくらいの火竜草が入っていたらしい。

マスター、どんだけ入れたんだよ……。

今まで『地獄の釜』を完食できた者がいなかったのは、当然と言える。

「？ イファ、熱くなつてない？」

ふと、アルは眉を寄せた。

気のせいではない。両腕で抱え込んだハムスターの温度は、確実に上がっていた。

溢れそうなものを押さえつけて、止めようとすれば、無理が生じる。

これは、火竜草の奇天烈な作用にしても、同じである。

「！ 熱いつ」

イファルドの熱は、耐えきれなくなりそうなほどに、上がっていた。

アルは思案する。

このままでは、火傷してしまう。かといって、店の中でイファルドを放したら、火事どころか、大惨事になること請け合いだ。

「川！」

アルは店の外に飛び出した。

【銀鱗亭】の近くには、大きな川がある。そこは、幅も深さもあるので、火竜草の効果を打ち消せる、水が足りなくなることとはあるまい。

走るうちに、熱は限界を超えた。

川までは、あと少し。アルは、抱えていたものを川に向かって放り投げた。

ところで、水というものは、その状態によって体積が変わってくる。具体的にいえば、同じ質量の水の体積を一とすると、水蒸

気の体積は千七百倍にも達する。

当たり前のことだが、これは条件によっては存外に危険をもたらす。

水蒸気爆発、という現象がある。火山などで、地下水が熱せられ水蒸気となったとき、それは急激に膨張して圧力を増し、遂には爆発を引き起こす。

その威力は、岩盤を容易く吹き飛ばすという。

その日、とある川で起こった謎の大爆発の轟音は、近隣の町や村まで届いたという。しかし、その割には爆発の被害は大層少なく、怪我人が一人と一匹出ただけだった。

失敗作の兵器の暴走、竜、もしくは精霊の悪戯、などなど、様々な憶測や噂が飛び交ったものの、真相は謎のままである。

余談であるが、【銀鱗亭】の『辛いもんラリー』限定スペシャルメニューは、謎の爆発後、すぐに変更となった。

地獄の釜の蓋が開く（後書き）

勉強中なので、何か感想を頂けるとありがたいです。

妖精を捕獲せよ！！ その1（前書き）

以前部誌に投稿した作品です

妖精を捕獲せよ！！ その1

「マスターは、たまに食用じゃないものを料理の材料に使うので、大変です。え」と……、あと、姉ちゃんから手紙がきたら、教えて下さい。っと、それではまた手紙を書きます、アルより」

祖母への手紙を書き終えたとき、アルは奇妙な気配を感じて顔を上げた。

「ん？」

窓を開けて外を見るが、辺りは夜の帳に覆われ、何も見えない。

「んんん？」

気のせいで済ませるには、ひどく懐かしく、引っ掛かりを覚え、アルは首を傾げた。

しばらくぶりに帰ってきたら、夫の目の下に見事な隈ができていた。

「……アシュ、一体何があった？」

「ああ、アナ、お帰り。いや、フェアリーが出てな……。なかなか笑えない悪戯をしてかしてくれて、あちこち大損害がでてる。……

おかげでこっちは不眠不休で働く羽目になっていたんだ」

「フェアリーだと？ あれは山に籠っている種族じゃなかったのか？」

彼女の言う通り、フェアリー 見た目は、翅を持つ、小さな人間である。基本的に、妖精と言ったら人はこれを思い浮かべるだろう という種族は、ひどく排他的だ。北の山脈の何処かに住んでいるというが、彼らが他の種族と交流しているという話はここ数百年聞いたことがない。もつとも、フェアリーが住むという北の山脈は、高位の魔物の巣窟であるから、交流したくてもできないだろう

が。また、フェアリーは排他的であると同時に、悪戯好きでもあるという。北の山脈に出入りする魔狩人^{まかりゆつと} 彼らは魔物を狩り、その皮や牙を売って生計を立てている は、フェアリーに会うことを何よりも恐れるとか。形は可愛らしきうと、洒落^{しゃれ}にならない悪戯を仕掛けてくるらしい。しかしながら、フェアリーが北の山脈を出て、他人に悪戯をするという例は珍しい。

「まあ、見てくれ」

夫は疲れたように笑い、彼女に書類を差し出した。

書類を見て彼女は眉^{まゆ}をひそめる。

可愛いところでは、バナナの皮で人を転ばせたり、いつの間にやら壁にどでかい落書きをしていたり。

ここまではまだ、いい。

ひどいところでは、船に風穴を開けて沈没させたり、馬車の車輪を外して事故を起こしたり。

死人が出ないのが、不思議なくらいだ。

悪戯、というレベルを、とうに超えてしまっている。

「……犯人は？」

「まだ捕まっていない。流石は絶望の山脈に住まう風の眷属^{けんぞく}、というところか。悪戯の度に目撃はされていても、探査の網には引つかかってくれなくて、な」

彼は深いため息をついた。

性質が悪いにも程^{ほど}がある。

彼女の方は、額を抑えて呻^{うめ}いた。

「酷い冗談だ……」

だが、何もせずにいられる段階はとうに過ぎている。

「仕方がない、私が出よう」

彼女は静かに言った。

「悪いな」

彼は少しばかり苦笑した。

「なに、いかに風の眷属であろうと、流石に『精霊の愛し子^{いとこ}』にま

ではちよつかいを出せないだろうよ」

彼女は婉然^{えんぜん}ともいえる笑みを浮かべた。

王都中を荒らしまわっているフェアリーには、何やら気の毒なことになりそうである。

「さて」

彼女の笑みが、それまでのものと変わる。それは、ひどく優しいな、慈母の如き微笑だった。

そしてそのまま夫の背後に回ると、彼の首にその腕を絡^{から}める。

「！！　ちよ、アナ　」

「お前もいい加減休め」

彼女は腕に力を込めた。

世界広しといえど、『妻』に絞め落とされる『夫』は、めったにいないだろう。

妖精を捕獲せよ！！ その1（後書き）

この話は、何話か続きます。

妖精を捕獲せよ！！ その2（前書き）

「妖精を捕獲せよ！！」の続きです。

妖精を捕獲せよ！！ その2

その日は、いつもと同じように始まるはずであった。

「なんじゃこりゃ う、げふっ」

アルの後半の台詞は、驚き過ぎて吐血した時のものである。

打撃やその他諸々（もろもろ）には、やたらと耐久性がある割には、体が異常なほど弱く、頻繁に吐血するという、謎の体質故のこ
とだ。

「ま、マスターの鬣がー！！」

アルは、この世の終わりのような顔で叫んだ。

彼の密かな野望が、打ち碎かれた瞬間であった。

「……何モ言うナ、アル……………」

アルが勤務する【銀鱗亭】を取り仕切る、マスターこと、ヴェーザス・ヴァノホルンは獣人と呼ばれる種族の血を引く。

彼のチャーミングポイントは、ズバリ、鬣である。

獅子を思わせる立派な鬣は、ふさふさとしていて、見た目でも、実際に非常に触り心地が良い。本人は嫌がっているが、子供にとっても人気がある。アルも、その鬣を一目見たときから、思う存分触ってみたいと常々思っていた（十七歳というアルの年齢では、流石のマスターもそう簡単に鬣を触らせてくれない）。

その憧れの鬣は、膠かなにかを塗りたくったのか？ と思うほど、見事なまでにがちがちに固まっていた。

「なんて勿体無いことを」

これは、紛れもないアルの本心である。

「俺がヤツタ訳じゃナイゾ」

マスターは、疲れたように突っ込んだ。

聞けば、朝起きたらすでにこんな状態になっていたらしい。

昨晚までは、マスターの鬣はふさふさのままであったので、ちょっとした怪奇現象である。

「なんでまたこんなことに？」

アルは首を捻^{ひね}った。

「知っテいたラ、モウとつく二直シテるゾ」

マスターはげんなりとして息を吐く。

こんな様では恥^はずかしくて、とてもではないが店を開けない。

「……あの、マスター」

妙な形状になってしまった頭を抱えたマスターに、控えめな声がかけられた。

「あ、ティナ、おはよう　　って、どうしたんだ？」

アルの疑問ももつともで、彼の同僚である少女は、何故か顔を隠すように肩掛けを頭に被っていた。

「……今日は、お店を休んでいいですか……？」

蚊の鳴くような声は、今にも泣きそうだった。

「へ？　なんでまた」

アルはまたもや首を捻る。

ティナもまた、昨晚までは何事もないように顔を晒^{さら}していたのだ。何処かに顔をぶつけたのかと、アルはティナの顔を覗^{のぞ}き込^こもうとしたが、ティナが嫌^{きら}がったので止めた。

「大丈夫か？　痛いところないか？」

心配になって、アルはそういつたが、ティナは首を振る。

「痛くないけど、……見せたくない」

うら若き乙女としては、非常に困った事態になっているらしい。

「何があつタンダ？」

マスターも心配そうである。彼は、ティナの兄夫婦と知り合いなので、尚更^{なおいっ}そうかもしれない。

ティナはしばらく躊躇^{ためら}っていたが、意を決したように口を開いた。「朝起きたら、顔に落書きがあつたの。いくら洗っても、とれなくて……」

恥ずかしいのか、とても小さな声だった。

マスターも、アルも目を丸くした。

「ナンだ、それハ」

それでは顔を見せられない訳である。

「……もし力しくなくテモ、お前ジャナイよナ、アル」
マスターが疑いの目をアルに向けた。

【銀鱗亭】に所属している面々の中で、何事もなかったのはアルだけである。

「なんでそうなるんだっ！」

アルは、ぶんぶんと首を振った。

俺はやってないっ！！ と、全身で主張している。

「それジャ、何力、心当たりハある力？」

それは、マスター自身も含めた、その場にいる者への質問だった。
アルは、ふと考え込んだ。

昨晚、祖母への手紙を書き終えたときに感じた気配。

王都へ来る前に、最も馴染なじんでいたものと似て非なる、しかし、

知らない訳ではないもの。

あれは、確か

「邪魔するぞ」

アルの思考を、凜りんとした声こゑが遮った。

妖精を捕獲せよ！！ その3

なぜ何もしていないのに、怒られなければならないのか……。

アルは、締め上げられながら、遠い目になっていた。

理不尽だ。

アルは、自分が巻き込まれ体質だと、（生まれてから一七年目に
して、ようやく）ちよっぴり悟りつつあった。

「お前のせいで、振り出しに戻ったぞ」

アルを締め上げている彼女は、地を這うような声で言った。

（ば、ば様が後ろに見える〜！）

アルはなぜか、彼女の後ろに自身の祖母（怒りモード）の姿を幻
視した。

「フェアリーの捕獲が遅れて、私の夫が倒れたら、どうしてくれる」
ちなみに、マスターとティナには般若の面が見えたという。

「……お義姉ちゃん、アル君は悪くない、よ」

ティナの言葉の語尾が一瞬途切れたのは、兄嫁である義理の姉に
睨まれたからだ。

「アナ、少し八落ち着いタラどうダ？」

マスターは、内心焦りまくりながら、知り合いを宥めた。

アナという女性は下手な男より遥かに腕が立つため、一度怒り狂
うと、ものすごいことになるのである。

幸か不幸か、今はまだ、ブチ切れた時の五割ほどの怒り具合であ
る。

「そついえば、振り出して何の？」

アナは事情を全く語ることなく、アルを締め上げていたのであ
った。

「フェアリー？」

ティナが目を丸くした。

「北ノ山脈二閉じこもっテイル種族じゃないノ力？」

マスターが首を傾げる。

その横で。

アルは、目を泳がせ、冷や汗を流していた。

非常に分かりやすく、心当たりがあることを示している。

「何を知っているんだ？」

アナはニツコリ笑いながら、アルの胸元を掴んで引き寄せた。

酷く美しいが、同時に凄まじく恐ろしい笑みだった。

生憎、アルはそれに抗えるほど人生経験を積んでいない。

「き、昨日の夜、フェアリーの気配がしてたんだ」

マスターとティナに悪戯をしてた時のかも、と続けた少年の告白に、アナは目を細めた。

フェアリーは風の精霊の寵を受け、その力を借りることができる種族だ。

それ故、通常の探査魔法ではその姿を捉えることはできない。

それができるのは、フェアリーという種族以上に風の精霊の力を借りることができる者、もしくは強く精霊の加護を受け、彼らが常に従えている精霊達のことを、より敏感に感じとれる者ぐらいだろう。

ちなみに、精霊の祝福の度合いは種族により大きく異なるが、何事にも例外というものがある。

『精霊の愛し子』。

過分なまでに精霊に愛された存在を、そう呼ぶ。

それは種族や血筋に関係なく生まれ、絶大なる精霊の守護と力を得る。

そして、その証は瞳に反映されるのだ。

精霊の多大な寵愛を得た者の瞳は、徒人に在りえぬ色彩を宿す。
緑柱石と翡翠を合わせたような緑玉の瞳と、空の色より透明で、

海の色より深い、不思議な色合いの碧眼が交差する。

元はと言えば、フェアリーよりも、アル（こいつ）に対する風の精霊の加護が強かったから、忌々（いまいま）しい羽虫を見失ったのだ。

「それでは、フェアリーの搜索を手伝ってもらおうか」

フェアリーを見つけ出さないと、殺す。

【銀鱗亭】の面々には、そう、聞こえた。

妖精を捕獲せよ！！ その3（後書き）

アル君にとって、恐怖の象徴は怒りモードのおばあちゃんです。

妖精を捕獲せよ！！ その4

さらりと揺れる銀髪の後ろに、アルは大人しく付いて行った。彼女は、特に夫のことになると、手段を選ばなくなるらしい。命が惜シかつタラ逆らうナ、とは、マスターの言である。

聞いたところによると、ティナの兄夫婦は王城で働いており、今回のフェアリー騒動で文官である兄の方が過労死寸前だそう。そのため、一刻も早く事態の收拾を付けるために、武官である嫁の方が、憎きフェアリーの搜索に乗り出したらしい。

いくら気絶させても懲りずに働こうとする馬鹿なんだ、と彼女自身は溜息をついていた。過労死で夫に先立たれるのは、馬鹿馬鹿しくて考えたくもないそうだ。

「なんで山から下りてくるかな」

アルは、今更言っても仕方がないことをばやく。

ところで今のアルは麦わら帽子を被った上に、虫取り網を手を持ち、虫籠を肩にかけている（どれもゴミ捨て場からの戦利品だ）。

どこの虫取り少年だ、と突っ込みたくなるような格好である。

とてもではないが、風の眷属の中でも、特に位の高い種族を捕まえようとしているとは思えない。

「とつとと見つけるぞ」

一方、アナの方はというと、軽装ながらも、胸当てや小手といった防具を身に付け、手には愛用の槍を持ってと、なかなか勇ましい出で立ちである。しかしながら、それは捕獲というより、何かを狩りに行く、という目的の方が、しっくりくるような格好だ。

ちなみに、アルをフェアリー探索にひっぱり出した、張本人はやや殺気立っていた。

アルが予想外に使えなかったことが、判明したからだ。

精霊というものは、この世界のありとあらゆるところに存在

している。

しかしながら、その精霊の力を借りるのは、誰にでもできるというわけではない。

そもそも、精霊の力を顕現させるには、精霊の量が重要になる。例えば、炎の精霊に、水中で火を起こしてもらおうとしても不可能である。炎の精霊の絶対数が極めて少ない水中では、火を起こすことができないだけの数の精霊を、集めることができないからだ。

それ故、精霊の力を借りようとするならば、まずそれが可能になるだけの精霊を集める必要がある。

精霊の加護、あるいは魔力。

それが、精霊を集める条件になる。

加護の例の最たるものが『精霊の愛し子』だが、それに準ずる存在を『加護持ち』といい、彼らが扱う力を『精霊術』と呼ぶ。

精霊の『加護持ち』といわれる存在には、これは同じ加護持ちにしか分らないが、常に他者より多くの精霊達が付き従っている。また、もし加護持ちが精霊達を呼べば、彼らは喜んで呼んだ者の元へ馳せ参じる。

一方、魔力の例では、『精霊魔法』が挙げられる。

精霊魔法は、精霊の力を借りることと同じであるが、精霊の集め方が精霊術とは異なる。精霊魔法は、使用者の魔力を用い、強制的に精霊達を集める。勿論、使用者の魔力が大きいほど、集められる精霊の数は多くなり、強力な精霊魔法を扱える。

精霊の集合が、能動的か、受動的か。

精霊術と、精霊魔法の、決定的な違いである。

アルの場合、精霊が集められない訳ではない。寧ろ、彼に付き従う風の精霊達が多すぎたが為に、その風の精霊を目印にフェアリーを探していたアナの邪魔になってしまった。

問題になったのは、精霊を集めることができれば自然にできるはずの、精霊への『お願い』だ。

いくら多く精霊を集めることができたとしても、『お願い』が大雑把では、精霊の力は顕現され難い。具体的な指示をもらった方が動きやすいのは、精霊も同じである。

アルはこの『お願い』が杜撰に過ぎた。

本人は頑張って、精霊に『お願い』を分かってもらおうとしているようだが、何故か、どうにもうまく伝わらないらしい。

風の精霊を用いて、アルにフェアリーを探させる、というアナの計画は、あえなく頓挫した。ちなみに、アナに加護を与えているのは水の精霊であるため、彼女はフェアリー以上に風の精霊を集めることはできないのだ。

残るは、精霊の気配を頼りに地道に探していくのみである。

それでも、一人より二人の方がまし、との考えから、アナはアルを連れ歩いていた。

「犯人を捕まえるときって、何かコツってあるの？」

何かを捕まえる、という経験がほとんどないアルは、ふと思いついて尋ねた。幼い頃は寝込むことが多かったため、アルには、それこそ虫取りの経験もないのである。

「まずは四肢を狙え。前足でも、後ろ足でも、機動力を削げば仕留めやすくなる」

「はい？」

仕留めやすくなる、とは物騒な。

「あと、効果的なのは頭部への打撃だな。私は力押しというの

は苦手だが、ああいうのは、上手くいけば大きくて綺麗な皮が手に入る」

「……なんのはなし？」

「どうすれば、獲物に逃げられないようにできるか、だが？」

真顔で返されて、アルは困った。

フェアリーを、獲物扱いしないほしい。

魔物を相手に生計を立てる魔狩人と、言っていることが大差ない。

「頭殴つたら、下手すりや死ぬって！」

「生きていれば、問題ないだろう？」

前提条件がそもそも違う。

「フェアリーは魔物と違うから！ あいつ等は、ちっちゃくて、あんまり頑丈じゃないんだ！」

アルの言い分にアナは眉を寄せた。

「まるで、フェアリーのことをよく知っているような口ぶりだな」
「？」

こういうときに、上手くはぐらかしたり、惚けたりすることができないのが、アルのアルたる所以ゆえんかもしれない。

露骨に目を泳がせたアルに、アナは迫る。

「北の山脈から碌ろくに出てこないような種族を、よく知っているな？」

「お、俺も住んでたんだから、おかしくないだろ！」

「なんだと？」

アナは驚きに目を見開く。

アナが聞いた（吐かせた）ところによると、アルは王都に来るまで、北の山脈にある谷に祖母と一緒に住んでいたらしい。

そして、その谷とフェアリーの集落は近い所にあった。

それ故、アルとフェアリー達が顔見知りになったのは、ごく自然な成り行きといえよう。

もつとも、アルが親しいといえるフェアリーは一人だけのようなったが。

「まさかとは思うが、今までの悪戯はお前の友達じゃないだろうな？」
「？」

「それはないから」

手を振りながらの即答である。

「ウインはすごく真面目なフェアリーなんだ。悪戯なんかしないし、王都に来るんだったら、真っ直ぐ俺のところに来るって」

「……真面目なフェアリーか……」

居たのか、そんなもの、というのがアナの率直な気持ちだ。

「前^{まへ}のときも、悪戯^{あくご}してきたのは他の奴で……、
ばば様^{ばばさま}がめち

やくちや怒^{いか}って大變^{だいへん}だったな」

後半^{こうはん}の台詞^{だいし}では、アルの目^めが虚^{うつろ}ろになっている。

当時^{さんじょう}の惨状^{さんじょう}を、如実^{にょじつ}に物語^{ものがたり}っていた。

妖精を捕獲せよ！！ その4（後書き）

ゴミ捨て場漁りが、アル君の趣味です。

妖精を捕獲せよ！！ その5

この感覚は、知ることができぬ者には、万の言葉を尽くそうと、理解させることはできないだろう。

精霊。

森羅万象に宿るモノ。

不可視にして、確かにそこにある存在。

限りなく同一に近くありながら、彼等には確実な差異がある。

自我が極めて希薄な、それでも、己と対等にあるモノ達。

言葉無き、耳に届かぬ囁きは、しかし、この魂を震わせる。

触れることができぬその身体は、けれど、この身に温もりを伝える。

何もない場所、されど、彼らはそこにもいて。

言葉を知らぬ自分では、精霊達が、ただ、そこに在るとしか言えないのだ。

ココ、ニ、イル

何かを言いかけ、アルは顔をあげた。

「いた！」

それは、アナにも分かった。

「マスターとティナの敵^{かたき}！！」

アルが虫取り網を振りかぶりつつ、虚空へ向かって突進していく。それを横目に、アナはパチンと指を鳴らした。

突如、彼女の周囲に大量の巨大な水球が出現する。

アナが、彼女の周りにいた水の精霊に、『お願い』した結果である。

そして、すい、と、アナは指揮でもするように指を振る。

途端、出現した水球達は、さながら滝の様な流れを作り、アナが

指示した怨敵の元へと殺到した。

「ちょ、まつ！ ぎゃ

！！」

アナの瞳は、精霊が作りだした瀑布から辛うじて逃れていく、小さな姿を捉えた。

アナは素早く距離を詰める。

槍を操る動きは、骨の髄まで染み付いたもの。

手にした槍の穂先が、小さな標的に届く、その直前。

「！！ ちっ」

アナの体が、吹き飛ばされた。

心臓を貫くはずだった槍の狙いを、咄嗟に変更しようとした隙を突かれたのだ。

恐らくは、精霊の力が顕現した風によるもの。

地面に叩きつけられる前に、水球が受け止めてくれたため、アナに怪我はない。

「どりゃ

！！」

アナが作りだした瀑布から何とか脱出できたアルの、裂帛の気合
いが辺りに響く。

「ひゃうっ！」

虫取り網に捕まったフェアリーは、何とも可愛らしい悲鳴をあげた。

「だ し て よ つ！！」

「駄目に決まってるだろ」

フェアリーの捕獲は無事に完了し、一連の騒動の犯人はアルの虫籠（水の精霊により補強済み）に放り込まれている。

「なんだって王都まで出てきたんだ？」

アルは不思議そうに言った。

常に精霊と共に在るフェアリーにとっては、高密度で精霊が存在している北の山脈の方が、王都より遥かに過ごし易い筈である。

「碧風の君の孫だって、王都にいるじゃんよー」

ぶーぶー、とフェアリーの少女は唇を尖らせる。

「俺は別にいいの！ 誰にも悪戯してないし！」

アルはむきになって言い返す。

「とつとと質問に答えろ」

アナの一声で、アルとフェアリーの少女の口喧嘩がピタリと止んだ。

アナの、不思議な青さを湛^{たた}えた瞳に、今は冷^{ひや}やかな光が宿っている。

「えーと、暇つぶし？」

暇つぶしで悪質な悪戯を繰り返されては、堪^{たま}ったものではない。

「ほほう、暇つぶしか」

アルは思わず一步下がった。

「だってだって、ずーっと悪戯できなかったんだよ。御山でやると碧風の君に怒られるんだもん」

虫籠の中のフェアリーは、冷や汗を流しながらも言い切った。
享樂的で、自己中心的。

フェアリーという種族の、ごく一般的な性質である。

アルは頭を抱え、アナは額を抑えた。

「フィリエル、君はそこで何をしているんです？」

その声は、空から降ってきた。

「ぞ、族長！」

「あり、ウイン？ ウインこそ、ここで何してるんだ？」

騒動の犯人は驚倒^{きんたう}し、アルは首を傾げた。

「碧風の君にお使いを頼まりました」

正確には、命令された、のだが。

そのフェアリーは、竜の眷属である、ミニ・ドラゴンに騎乗^{きじよう}していた。ミニ・ドラゴンとは、その名の通りミニサイズのドラゴンで、成竜になったとしても、体長は五〇？にも満たない。

ちなみに、成人したフェアリーの平均身長は一〇？ほどであるので、ミニ・ドラゴンに乗っても何ら問題はない。

お使い、の言葉通り、彼が乗っているミニ・ドラゴンは、何かを包んだ布を下げていた。

「族長、か。仮にも族長だったら、自分の配下ぐらいきちんと躡^{しつ}けてほしいものだな」

アナの皮肉に、酷く珍しい色合いの緑の瞳^{またた}が瞬く。その緑は、冬の若芽であり、命謳^{うた}う新緑であり、盛夏^{せいか}の緑でもあるが、そのどれでもない色彩であった。

ウインはフィリエルを見たが、目を逸^そらされた。

「……もしかしくなくても、僕の同族が皆さんにご迷惑をお掛けしました？」

「その馬鹿のおかげで、あちこち大赤字が出ているんだ」

アナの声には、氷の冷たさがあつた。

フェアリーの族長は、何やら辟易^{へきえき}したような顔をする。

フェアリーの中では希少ともいえる真面目な性格では、その気苦労も並みならぬものがあるのだろう。

「好きにしていますよ、それ」

「ぞくちよー！」

ウインの薄情ともいえる台詞に、フィリエルが情けない声をあげる。

このまま、この鬼女^{アナ}の手に渡るぐらいなら、族長の説教を食らう方が遥かにましなのだ。

「己のしたことゝ責は、自分自身で負うものです」

フェアリーの族長の言葉は、あくまで厳しい。

自分の意思で何をしようが、それは本人の勝手である。しかし、その結果生じたことについては、自分自身で責任を取らねばならない。

それが、ウインというフェアリーの信念であつた。

「だが、それだけでは足りないぞ」

アナの言葉に、ウインは頷く。

「承知しております」

フィリエルが引き起こした数々の悪戯の代償は、彼女を処罰する
だけでは、到底^{まかな}賄いきれるものではない。

「ウイン、大丈夫か？」

心配そうなアルに、ウインは微笑む。

「アル、先にお店の方に戻っていてくれませんか？ この用事が済
んだら、僕もすぐに行きますから」

「あり？ ウインって、【銀鱗亭】の場所知ってたっけ？」

首を捻るアルに、ウインは苦笑する。

「僕はこれでも、風の寵を受けた身ですよ」

知らなくても自分で探せる、と遠回しに言った。

妖精を捕獲せよ！！ その5（後書き）

妖精を捕獲しました。

妖精を捕獲せよ！！ その6

「碧風の君とは、そんなに恐ろしい奴なのか？」

それは、アルと別れ、王城に向かう道での一言であつた。

「あつたり前だよ！」

即答したのはフィリエルの方だつた。恐ろしく力が入つた断言である。

「……そんな言い方はないでしょう。御自分の掟に反することには、とことん容赦がない方であるのは事実ですけど……」

ウインは何やら複雑な表情をしている。

フェアリーの族長も、頭が上がらない存在であるのは間違いない。

「それにしても、『碧風』の君とは恐れ多い呼び名だな」

アナは何気なく続ける。

『碧風』というのは、この国では少々特別な意味を持つ。

遙か昔、つがいである皇帝竜達は、この国の初代国王に手を貸し、建国に多大なる貢献を果たした。

そのため、金と銀の皇帝竜を表す図案が国旗にデザインされているのだが、初代国王に協力した竜は、皇帝竜達だけではなかった。

竜公と呼ばれた、皇帝竜に次ぐ力を持った竜達。

『碧風』とは、その中の一頭の竜のことを指す言葉である。

『碧風の女帝』。

最古の竜にして、風を統べる存在。

初代国王の危機を幾度も救つた緑竜は、今も北の山脈の何処かに住まうという。

「彼の君は、その名に相応しい御方ですから」

ウインはふんわりと微笑む。どこことなく、そよかせ微風を思わせる笑みだつた。

「なるほどな」

アナは目を細めて、遠い日を思い返す。

魔狩人として、北の山脈を駆け回った若かりし頃、彼女は一頭の竜と遭遇したことがある。

気の遠くなる様な年月に晒された鱗は、白化し、本来あつた筈の碧の輝きを失っていた。

それでも、全てを圧倒する威厳と、一切の無駄を排した美しさは、少しも損なわれていなかったのを覚えている。

あの雑用係の少年と同じ、緑柱石と翡翠を合わせたような瞳の色も。

「そこまで言うなら、直に会ってみたくなるな」

「お気を付けて」

フェアリーの族長は、アナの左手に光る、銀竜 皇帝竜の片割れである竜帝 を模した指輪をちらりと見た。

その指輪は、彼女が使用していた槍に姿を変えていた代物だった。

「碧風の君は、人の身分で態度を変えるような御方ではいらつしやいませなので」

「是非もないだろう」

竜には、権力など関係ないのだから。

そこまでは言わずに、この国を支える片翼たる王妃は、艶やかな微笑を浮かべた。

同じ頃。

「あ、風蓮だ」

ウインが運んできた包には、細々とした物の他に、少々懐かしい味も入っていた。

風蓮というのは、アルが住んでいた谷の周辺に群生していた植物である。薄翠の硝子細工のようなこの花は、少しばかり変わっていて、空中に漂いながら存在している。そして、その蜜は飴のように丸く固まり、口に含むと涼やかな甘みがある。

谷にいた頃は、よくお八つ代わりにしていたものである。

王都では風蓮の蜜などどこにも売っていないくて、少しばかり淋しい思いをしていたところだった。

「うん、おいしい」

早速風蓮の蜜を口に入れ、アルは破顔する。

「早くマスターとティナに分けてあげよつと」

このときアルは、つい、谷でしていたように、蜜を取り出した風蓮を道端に放り捨ててしまった。

風蓮は、一度蜜を取り出しても、放っておけば自然とまた蜜が貯まっていくのである。

その後、ふよふよと漂う風蓮が、自分に付いて来ることに、歩き出したアルは気付かなかった。

アルは知らなかった。

風蓮が、風の精霊が一定以上存在する場所にのみ、生息する植物であることを。

王都でその条件を満たす場所は、北の山脈から風の精霊石 精霊が結晶化した石 を持つてこない限り、アルの周辺ぐらいであることを。

そして、放り捨てた筈の風蓮が、自分の頭の上を漂いだしたことも。

頭に花が咲く、というのを文字通り体現してしまったアルの姿は、何とも間抜けなものであった。

そのため、【銀鱗亭】に帰った途端、アルはマスターとティナに大笑いされたが、それはまた、別の話である。

妖精を捕獲せよ！！ その6（後書き）

これで「妖精を捕獲せよ！！」の話は終わりです。

お祖母ちゃんが竜という描写の通り、アル君は竜の血が流れていきます。

生粋の人間（人族）と生粋の竜との間に生まれた子です。

初戀（はつこい）の味（前書き）

以前部誌に投稿した作品です。
ほのぼの系？

初恋（はつこい）の味

初恋の味というものは、忘れることができないものらしい。

「初恋の味って、何味なんだ？」

真顔での問いかけに、ウインは耳を疑った。

「アル、熱でも出ました？」

「いや、なんでそうなるんだ」

渋い顔になったアルに、ウインは真顔で答える。

「君は、そういうものに明らかに無縁そうに見えていましたから」
ウインという人物は、真面目すぎるが故に、失礼なことを平然と
言うことがある。

「なんでだ？ 初恋の味って、あちこちで売ってるから、簡単に食べられるんだぞ」

何やら話が食い違っている気がする。

「……一体何の話ですか？」

困った顔になったウインに、アルは手に持っていたものを見せた。

「【桃陰屋^{ももかげ}】の揚げパン。初恋の味なんだってさ」

「……」

どうにも反応に困る。

「紅蓮^{こうれん}通りの屋台のドーナツも、ビルカのおっちゃんのとこのフルーツジュースも、初恋の味って宣伝してるけど、どれも味が違うんだよな」

それが不思議で、先程の初恋の味は何味か、という疑問に至ったらしい。

「そういうものは、人によって違うものなんですよ」

「そんなもんか」

アルは、相槌^{あいづち}を打ちつつ、揚げパンを口に運んだ。

「じゃ、ウインの初恋の味って、何味？」

あつさりした質問に、ウインは口に含んでいたお茶を吹きそうになった。

恨めしげにアルを見るも、当の本人はキョトンとしている。

山での生活が長く、他人と触れ合う機会が少なかったせいか、この少年は人間関係の機微にはやや疎く、さらに色恋沙汰の何たるかを全く解していない。

「他人の色事に関しては、積極的に話題にしない方がいいと思いますよ……」

「そうなのか？」

少年は、目を丸くして首を傾げた。

(……碧風の君、アルを崖から落としたり魔物の巣に放り込んだりする前に、教えることがあったでしょう……)

ウインは内心で嘆息し、アルの祖母に苦情を言った。

「アルの方は、どうなんですか？」

「まだわかんないな」

そう答える時点で、まだまだ子供である。

アルの同族一同は、アルに恋愛の『れ』の字も見当たらないことについて、詰まらないだの、からかいがいがないだのと嘆いていたが、その責任は彼らにもあるとウインは睨んでいる。

そもそも、嘆く当人達も恋愛についてはからっきしであるから、アルのことは言えないのだ。

「死ぬ前に、分かるかな」

ポツリ、と呟かれた言葉は、溜息のよう。

自分の体は、自分が一番理解している。

それでも、終わりが何時かなんて、分からないけれど。

「それは、君にしか分からないことですよ」

ウインは、少し悲しそうに笑った。

この少年は、いつ気付くのだろうか？

己^{おのれ}でもそうと知らないまま、彼^かの少女に向けている瞳に。
心の奥底、静かに揺^ゆらめく灯火^{ともしび}に。
今まで湧き上がることがなかった、密やかな熱い想いを。

ウインは、天上天下唯我独尊^{てんじょうてんげゆいがどくそん}集団に、盛大に文句を言っ^てやりた
くな^った。

アルがあの子に振られたら、ここまでアルをにぶにぶに育て
た、あなた方のせいです！！

第一回魔王決定抽選会（前書き）

以前部誌に投稿した作品です。

第一回魔王決定抽選会

第一回魔王決定抽選会開催！！

この度、第一回魔王決定抽選会を開催することになりました。

開催理由は、異界の勇者が魔王に会いに、フェルメリアに来てくれたからです。遠いトレオからわざわざ我が国に来てくれたのに、残念ながらフェルメリアには、お探しの魔王の肩書を持つ者はいません。そのため、いないのは仕方がないので、くじ引きで決めたいと思います！

魔王になりたい方は、一週間後の、イフリートの月の第一日、正午から王城前広場に集まってください。なお、抽選会に参加するには、事前の申し込みと参加費五百マナが必要なので、御了承ください。

く外れくじなし 豪華景品プレゼント！！く

ちなみに、参加者全員にはもちろん『魔王軍の証』を差し上げます。

『魔王軍の証』には守護結界の呪式が組み込まれているので、ucciかり魔物に遭遇しても、これさえあれば、大丈夫（ハハハ）。

そして、めでたく魔王に選ばれた方には、『魔王グッズ三点セット

（魔王の剣・魔王の鎧・魔王のマント *竜公『黒き闇の王』の鱗を原料とした、至高金属製^{オリハルコン}）』と、さらにさらに『魔王七つ道具』

として、好きな魔法具（もちろん一級品！）を七個プレゼント！

！また、この抽選会に参加された方々をメンバーとする、『魔王軍』の代表となつていただきます。（『魔王軍』の活動は、『魔王軍』

交流会、街中の清掃、魔物の討伐等幅広いものを予定しております。）

その上、今回の抽選会では、魔王補佐や魔王参謀も決めます。もちろん、魔王補佐と魔王参謀用の景品（魔法合金製の装備や、魔法具^{オリハル}など）もありますよ（ハハ）

腕に自信がある方、友達を増やしたい方、偉くなりたい方は、ぜひ

ぜひ参加してくださいね！

（ b ^ v ）

P・S：次の魔王決定抽選会開催時期は、俺の気分です。

フェルメリア国王

クライドロ・D・シアリオス・フェルメリス

「こんな感じでいいかな」

ウキウキと宣伝文を考えていた国王陛下に、

「遊んでないで仕事をして下さい、陛下」

有能な秘書は容赦なく突っ込んだ。

他国からは異端扱いされる、多種族国家・フェルメリア。そこは、何か違うところに力を入れるのが、お国柄である。そして、現フェルメリア国王クライドロは、まさにそんな人物であった。

あ、死んだ。

そう思ったところで、彼は目が覚めた。

目を開ければ、無機質な白が目に入る。彼は、額に手をやり、溜息をついた。ここ二、三日は本当に散々だった。

知らないうちにひき逃げされて、記憶が飛んだ上に入院する破目になるわ、意識を失ったときに訳の分からないとんでもない夢 何故かバリバリファンタジーな世界に勇者として召喚され（設定がベタベタだ）、魔王を倒さなければ元の世界に戻れないと脅され、無理やり旅に出され、魔物に襲われたり盗賊に襲われたりして、ようやくフェルメリアとかいう魔王がいる（と言われた）国に着いたものの、普通に出てくる魔物が何処かの秘境の主（ゲームで言えばラ

スボス）並みに強く（難易度高すぎ！何処のクソゲーだ！）、う
っかり全滅しそうになったところをフェルメリア人？（とりあえず
人型ではあった。角があり、鱗があり、毛皮もあったが）に助けら
れ、王城に連れて行ってもらったが、フェルメリアの王様（自分と
大して変わらなかった）に「魔王は今から決めるよ」と真顔で言わ
れ（フェルメリアの王＝魔王であると、自分を召喚した人間から聞
いたのだが……）、よりによってくじ引き（しかも、募集は一般か
ら……）で決めた魔王と戦うことになり、瞬殺（装備していた勇者
グッズは、全く役に立たなかった）され、フェルメリアの王様に慰
められ（じつは、くじに細工をして参加者の中で最も魔力の高い者
を選ぶようにしていたらしい。で、初代魔王は実は魔族の族長だ
ったそうな。……詐欺だ……）、元の世界に帰りたいと嘆いたら、
あっさり返してもらって、ハッピーエンド、になったのだろうか？

をみるわ、まあ、碌な事がなかった。特に夢が。あの夢は、嫌
にリアリティーがあふれていて、それなのに、自分が今まで作り上
げてきた常識ではありえなさ過ぎて、おかしくなりそうだったのだ。
長い夢から覚めた今でさえ、終わった筈の悪夢の残響がまだ繰り返
され、憂鬱になる。

吐き気を覚えて口元に手をやると、手首からシャランと澄んだ音が
した。

「まさか、な」

手首にあったのは、洒落た腕環だ。幾つもの玉を連ねた意匠で、な
おかつその一つ一つの玉には、人間技とは思えぬほど緻密で美しい
文様が彫り込まれている。それは、夢の中でフェルメリアの国王が
残念賞だと言って自分に与えた、『勇者の証』に酷似していた。と
いうか、そのままではないだろうか？そして、彼はそれが以前から
自分の持ち物であったかどうかを、思い出すことができなかった。
呆然とする元勇者の手首で、腕輪を形成する玉の数々は不思議な輝
きを放っていた。

後に歴史に名を残すフェルメリアの『魔王軍』。
その結成秘話は、笑い話として長く伝わることとなる。

届くことのない指先（前書き）

以前部誌に投稿した作品です。
悲恋系のお話。

届くことのない指先

「ありがとう、さようなら」

そう言つて、彼女は微笑んだ。透明な、朽ちる直前の華の美しさを湛えて。

「俺って色魔なのか？」

沈黙が、部屋の中を支配する。これほど答えにくい質問は、ないだろう。

久しぶりに会つた友人は、ずっと浮かない顔をしていた。少年の稚^ち氣^きと年経た者の老獪^{ろうかい}さを併せ持ち、常に飄々^{ひょうひょう}としている彼には珍しいことである。

「どうした、クライドロ」

アーサーが友人に尋ねると、物憂げな双眸^{そうめう}が彼を見返す。左には、夜空に似た黒曜石の輝きを、右には、緑柱石^{エメラルド}と翡翠^{ひすい}を合わせたような輝きを宿した、odd eyes。クライドロの色違いの瞳を気味悪く思う人間は多いが、アーサーは、純粹にそれを綺麗だと感じる。

「んー、俺にとっては大したことだけど、大したことなのかな？」

クライドロは、自分の、男としてはやや長めの黒髪を弄^{いじ}りながら、首を捻^{ひね}る。一国の主であるアーサーに対して、そのような態度をとつても問題とならないのは、彼らの付き合いが長いことと、なにによりクライドロがアーサーと同じ立場にあるためである。

「ちよつと知り合いと喧嘩^{けんか}したみたいなんだよな」

「みたいって何だ」

アーサーが呆れたように言うと、クライドロは困つたように眉を寄

せた。

「いや、俺が言ったことが、相手の気に障ったみたいなんだよな。それで、口を聞いてもらえなくなっただよ」

まいってんだよな、とクライド口は溜息をつく。ちなみに彼は酷い放浪癖があり、クライド口が王であることを知らずに、彼と交友関係を結んでいる人間は意外と多い。そして、クライド口に、王にあるまじき放浪癖があるにも関わらず、彼の国が傾かないのは、ひとえに優秀な部下達と、移動時間を大幅に短縮できる転移魔法のおかげである。

「何を言った？」

クライド口は、何と言ったものか、と言いたげに虚空を見上げる。そして捻^{ひね}りだした言葉は。

「俺って色魔なのか？」

アーサーは硬直した。

そして、数十秒にも及ぶ静寂の後。

「……色魔の方が、まだ可愛げがあるだろうな」

「俺は色魔より酷いのか？」

クライド口は訝^{いぶか}しげに、アーサーに問い掛ける。その反応に、アーサーは、片手で顔を覆った。

「徒^{ただ}の色魔は、娼婦紛いの間諜に偽の情報を掴^{つか}ませるばかりか、相手に機密を喋らすようなことはせん。それに、そんな人間が、閨^{ねや}に潜り込んできた暗殺者を、情報を抜き出して廃人にしたうえに、暗殺を謀った黒幕まで引きずりだす真似なぞでkindだろう？」

一時の欲情に駆られる程度なら、お前はここにいないだろう？ そう、アーサーは言外に含ませた。

「あ、それもそうか？」

納得したように手を打ったクライド口を、アーサーは疲れたような目で見つめた。

異端とされる国の王であるクライド口の女性遍歴は、様々な立場の人間達の思惑の為に壮絶の一言に尽きた。来る者拒まず、去る者追

わず。まさに色魔の様なクライドロの姿勢だが、懲りもせずに寄ってくる花達を利用して、情報操作や情報収集を行う手腕は見事というほかない。それができてしまうクライドロと、彼に喧嘩を売ってくる相手に、アーサーは同情を覚える。

「それで、女に浮気でもされたのか？」

「違うから。怒ってんの、男だし。子供だし」

アーサーに胡乱な目で見られ、クライドロは慌てた。

「なんでか恋愛話になって、今までの事話したら、色魔って呼ばれて、近付いてくれなくなっただ」

それはそうだろう。純情な子供なら、その手の話に拒否反応を起こしても仕方がない。けれど、一種の男の浪漫ともいえるクライドロの状況も、裏の事情を知るアーサーからしてみれば、それは人間の醜悪さの具現にしか見えない。

「何故言った？」

言わなくても、良かったことだろうに。

「嘘は駄目じゃないか」

幼子の様なクライドロの返事に、アーサーは苦笑を禁じ得なかった。敵に対しては恐ろしいほど酷薄なクライドロだが、身内と認識した者にはこの上なく誠実だ。今回は、その誠実さが仇となったらしい。クライドロのことだ、事情を説明せず事実だけ述べて、相手を誤解させてしまったのだろう。

「説明は、省略しない方がいいぞ」

「あ、うん」

心当たりがあったのか、クライドロは、アーサーの言葉に素直に頷いた。

「して、まだ伴侶を見つけれないのか？　せめて生きているうちに、お前の伴侶を一目見てみたいのだが」

冗談めかしたアーサーの言葉に、クライドロは微かに嗤った。

「いるわけないだろう。こんな化け物に」

それは、自嘲と諦観が入り混じったもの。その返答に、アーサーは

一瞬、息を詰めた。

「……もし、シファナ殿が生き延びていたら、今のお前は、変わっていたのかな？」

吐息のようなアーサーの囁きは、クライドロの耳にしっかりと届いていた。

「もしそうだったら、なんてことは、分らない。でも、シファナとだったら、ずっと、上手くやっていけたと思う」

そう言っ、クライドロは静かに目を伏せた。瞼の裏に映るのは、鮮やかな光をその瞳に宿していた少女の、消えてしまいそうな微笑だ。

「私を愛しなさい」

初対面にも関わらず、そう言い放ったシファナに、クライドロが出会ったのは、今から数十年ほど前だったか。その頃は、クライドロが先代の国王の伴侶から王権を引き継いでから大して経っておらず、アーサーと出会ったばかりであったと思う。

クライドロが治めるフェルメリアは、神に見捨てられたと言われられる程厳しい風土、そして、ほとんどの種族で禁忌とされた、異種族間での婚姻が公然と行われることから、他国から異端視されていた。しかしながら、そのフェルメリアの新たな王となったクライドロは、その異端の国の中にあつて、さらに異端であつた。

彼が、曾祖母から受け継いだ竜の血の力。そして、死ぬまで王都から動かないフェルメリアの王の因習を拒否し、王の代替品とされる伴侶を持たない、歴代の王達に反する行為。それらは、クライドロの周囲から、味方といえる者達を遠ざける原因にもなっていた。ただし、クライドロ自身は、それを気にしたことはなかったが。孤高の存在とされる竜の血の悪影響なのだろう。彼が守りたいと思う、ほんの少しの人達や、大切な人と交わした約束を、守ることができ

ればクライド口は十分だったのだ。

だから、腹に一物を抱えた人間達が彼を利用しようと自分に群がっても、クライド口に苦痛はなく、むしろ利用できるモノが近付いてきてくれて、ちょうどいいぐらいにしか思わなかった。　シファナのことも、初めは、そんな人間達と同じものだと思っていたのだった。

クライド口を、建国記念の式典の為に、招いた国でのことだった。

「私を愛しなさい」

出会って数秒足らずの発言に、クライド口は目を瞬かせた。このときが初対面の、その国の姫は、瞳に宿る鮮烈な光が、印象的だった。「なんでまた」

その言葉が逆鱗げきりんに触れたらしい。シファナとかいう少女は、真つ赤になつて捲まし立てた。

「私の何が不満よ、この蜥蜴男とかげおとこ！！　そりゃあ、姉様みたいじゃないけど、胸は人並みにあるわ！　それでも、この国でも美人の方なんだからね！！」

「それは別にいいし」

種族間の混血のために、フェルメリアには実に様々な容姿を持つものが多い。そのせいか、美人不美人の基準あいまいが曖昧で、フェルメリアの民は容姿に関して鈍感なものが多かった。

「別にいいって、何よ！！」

自分の言葉が、少女の怒りに火に油を注いだ理由が分からず、クライド口は首を傾げる。

「そもそも、何で俺？」

何故、クライド口という異端の国の王なのか。クライド口の素朴な疑問に、シファナは言葉に詰まった。

「……陛下は、奥方いないじゃない」

「それだったら、アーサーもそうだよ」

クライド口は、親しくなつたばかりの王子を想い浮かべる。彼の、

髪と同色の濃い目の茶色の瞳の色は、自分の不気味がられる色違いの双眸そつぼうと違い、そう珍しいものではない。アーサーの顔の造作が良いと言えるのか、正直クライド口には判別ができなかったが、通り掛かりに耳にした侍女達の噂話で、『凜々りりしい』とか『素敵』との評価を貰もらっていたから、そう悪いものでもあるまい。また、親子以上の年の差があるにも関わらず、アーサーの方がクライド口よりも年上に見えるし、人に言わせれば、威厳いげんも備えている。よって、結婚相手としては、自分よりもアーサーの方が優良物件ではないのか。そうクライド口は考えたのだが、シファナにとっては、そうでもなかったらしい。

「アーサー殿下じゃ、駄目なの」

地を這はうような声で、シファナは言う。尚も訳が分からず、クライド口は眉を寄せた。

「本当は、私だって人外は御断りよ！ だけど、しょうがないじゃない、貴方以外じゃ、嫌がらせにならないんだから！」

「嫌がらせて……」

あんまり過ぎるシファナの言い種くさに、クライド口の目は点になった。

これが、他の国の、他の王に向けてのものだったら、間違いなく戦争が起こるな、とクライド口は他人事のように考えた。

「父様は、私のことが嫌いな。いいえ、この国の、皆がそう。私の容姿が、気持ち悪いって理由で」

陽光の如き金の髪をなびかせて、シファナは言う。彼女の髪の色を引き立たせる褐色の肌は、南の大陸の血を引く彼女の母親と同じもの。白い肌を持つ者ばかりの彼女の国では、確かに異質であろう。しかしながら、褐色どころか、緑色だったり、鱗うろこや毛皮が付いていたりする肌を見てきたクライド口には、さっぱり理解できないこと

であつたが。

「さんざん私のことを嫌つて、無視して、馬鹿にしてきたくせに、私が適齢期になったら、結婚して姫の役割を果たせ、なんて言うてくるのよ」

ふざけないでよ、と彼女は吐き捨てた。

「でも、私には、誰かと結婚する以外に、できることがないの。何も、教えてもらえなかったもの」

綺麗な群青色の瞳に、昏い翳が浮かぶ。

「それでも、皆に言われるままに、会ったこともない相手に嫁ぐのは、まっぴら。それでね、どうせなら、皆が嫌がる相手を選んでやるうって思つたの」

それは、シファナができる、精いっぱい意趣返しだった。

彼女の国の人々が嫌がり、尚且つ、彼女が嫁ぐことを否定しない相手。そんな人物は、一人しかいなかった。異端なる王国、フェルメリア。その特異さより、他国から忌み嫌われながら、それでもその国が独立を保ち続けていられる要素の一つに、他国で珍重される、フェルメリア製の魔法具が挙げられる。他の国では手に入らない、良質かつ貴重な材料が豊富にあること、そして、フェルメリア特有の峻厳な風土が鍛えに鍛えた、魔法具の技術。それらの要因により、フェルメリアで製造された魔法具の性能は、他国のものと次元を異にする。また、庶民にまで、魔法具が行き渡っている国は、世界広しといえども、フェルメリアぐらいだ。如何に母国がフェルメリアを厭わしく思つていようと、喉から手が出るほど欲する優れた魔法具を手に入れられるなら、シファナとフェルメリアの王との婚姻を反対はしまい。そのような思惑から、シファナはクライドロに近付いたのである。

「一番初めに、俺に、君のことを愛しなさいって言つたのは、どうして？」

クライドロの声に、怒りはない。ただ、純粹な疑問だけがそこにあった。

「それは、私の我儘^{わがまま}」

シファナの顔に浮かんだ表情は、泣いているとも、笑っているともつかないもの。

「幸せに、なりたいから」

結婚する相手に、愛してほしい。

それまでの勝気な態度とは裏腹の、祈るような、言葉だった。

「そう」

クライドロは、出会ってから初めて、シファナという少女を、正面から見据えた。

「本当に、俺で良い？」

その言葉に驚いたように、シファナは、クライドロの目を見た。

それは好意というより、興味から来るものだった。それまで、クライドロを利用しようとした輩^{やから}は、その心をひた隠して、媚^{こび}を売ってくるものばかりだった。だから興味が湧いた。己の目的も、その心も、クライドロに曝^{ひら}け出してきた、シファナに。

「あたりまえよ」

そう言つて、シファナは、クライドロが差し出した手を握った。その瞳に宿る光と同じく、鮮やかな笑みを浮かべて。

後から思えば、クライドロは、もう少し考えて行動するべきだった。

竜と人との恋の後には、悲劇しか残らない。

それは一体、誰の言葉だったのか。

ごめんなさいと、彼女は泣いた。

産んでやれなくて、ごめんなさい、と。

「シファナのせいじゃないよ。俺の、せいだ」

クライドロの言葉に、シファナはただ、首を振る。

気紛れから始まった、夫婦ごっこ、戯^{たわむ}れは、シファナの身の内に、

新たな命を与えた。けれど、その命はシファナにとって、彼女を侵す猛毒と同意義であった。

異種族間の婚姻の禁忌は、妊娠・出産の危険性や、生まれた子が障害を抱える確率が跳ね上がることから生まれたものだ。実際、フェルメリアの流産・死産や、出産時の母親の死の確率は、その優れた生活や医療の水準とは裏腹に、未だ迷信が蔓延^{はびこ}る地域と大して変わらないのだ。特に、母親より父親の魔力の方が高いとき、母体が胎児の魔力に耐えられず、母子共々死亡することが多い。クライドロとシファナの場合は、まさにこれだった。クライドロは竜の血を引き、さらに、先祖返りの為に、その魔力は竜の中でも巨大な魔力を有する古竜と遜色^{そんしょく}なかった。一方、シファナは、魔力など欠片もなく、魔力に対する耐性も決して高くはなかった。だから、運命は、初めから定まっていたのだろうか。

クライドロは、生の営みの裏に潜む死を、甘く見るべきではなかった。悲劇を回避するための薬はあったけれども、それを服用しても、半竜の子を産んだ彼の祖母は死を覚悟したし、娘を産んで以降、子を産めぬ身体になってしまったのだから。

ごめん、と、何度も謝るクライドロに、いいの、と、シファナは弱々しく微笑んだ。医師に堕胎^{だたい}を進められてなお、胎^{はら}に宿った子を産もうと決めたのは、シファナ自身だ。悔むことがあるとしたら、小さな命を、この世に送り出せなかったこと。

クライドロは、握りしめた手から、徐々に温もりが消えていくのに気づいて、呻^{うめ}いた。何かしたくても、クライドロにその術^{すべ}はない。いくら、魔力があつたとしても、肝心な時にそれは役に立ってくれない。

シファナも、自分の体の事は、分かっていた。

「あのね、デীরリアス」

シファナは、信ずるに足る者以外には秘された、クライドロの竜としての真名を、唇に乗せた。

嗚呼^{ああ}、できることなら、この幸せな夢を、まだ見続けたかった。

「私の事を見てくれたのは、母様以外で、貴方が初めてだったんだよ」

シファナの想いに反して、体の感覚は、どんどん鈍っていく。

「ありがとう、さようなら」

事切れる間際、シファナはそう言っ、微笑んだ。それはとても綺麗だったけれど、常にその双眸に宿っていた光とは、正反対の、酷く儚^{はかな}げな微笑だった。

竜であつた、クライドロの曾祖母は、嘗^{かつ}て人間であつた恋人を亡くしたらしい。その恋人は、死の直前に曾祖母にこう言い残したという。もし輪廻^{りんね}があるのなら、必ず会いに行くから、待っていてくれ、と。それを信じた曾祖母は、待つて待つて、待ち続けて、そして、一人の人間と出会つた。その男は、後にクライドロの曾祖父となる、人間だった。

馬鹿馬鹿しい、御伽噺^{おとぎばなし}じみた、本当の話。

「アーサーは、生まれかわりつて信じてる？」

「どうした、いきなり」

クライドロは、恋を知らない。だから、狂おしいほどの想いで、恋人を待ち続けた曾祖母の気持ち、分からない。彼とシファナとの間に在つたのは、恋ではなく、強いて言えば家族に対する、温かな感情だったから。

シファナは、曾祖母にとつての曾祖父のように、クライドロにとつての唯一無二では、なかったけれど。

「本当に生まれかわりがあつたらさ、いつかまた、シファナに会えるかな」

もう、届くことのない指先を見て、そう祈るほどには、好きだったと、知っている。

竜のウタ（前書き）

突発的に思いついて書き上げた話です。

一応コメディーのつもり。

クーさんチートです。チート嫌いな方は、ご了承ください。

竜のウタ

現フェルメリア国王である、クライドロ・D・シアリオス・フェルメリスは、普段の行いに反して、なかなか能力が高い。

彼が祖母より受け継いだ、力ある真竜の血のおかげで、クライドロの運動性能はフェルメリア最高峰に近い。そして魔力に至っては、彼に比肩し得るのは、最高位の魔物である。一なるモノか、それに準ずる力を有する古竜ぐらいだろう。また、王に必要な政治手腕の方も、他国に『竜王』と恐れられ、一切の口出しを許さないところを見れば、言うまでも無い。

しかしながら、クライドロの容姿は平凡だし、名付けにおける感性はある意味徒人のその斜め上を行く。まあ、そんなことは、この世に完璧な人間など存在しないという好例なのかもしれない。それに並みの容姿だとしても、クライドロは存在感を出せるので、他国の重鎮達に見劣りすることがなく、別に顔の造りの平凡さのせいで損をしたことは無い。ただし、得をしたことも無いが。

その能力を遺憾無く発揮しさえすれば、間違いなく畏敬を集めることができるのであろうが、クライドロを見る臣下の目は、五割の呆れと、諦めと親しみが二割ずつ。あと、九分の信頼と一分の殺意である。その唯一にして最大の理由が、クライドロの酷過ぎる放浪癖である。一国の主であるにも拘らず、クライドロは王城で仕事をしていることが異様に少ない。勿論、果たすべき役目はきっちり果たしているのだが、丸投げできる仕事は完全に部下任せである。そのことを丸投げされる側がどう思っているのかは、『仕事しろ！』『呪』『殺』等と書かれた紙と一緒に木に磔になつていたり、政務官の部屋の片隅でスタボロになつていたりするクーさん人形（注・宰相命令により作製された）の数を見れば自ずと知れる。

やる気さえあれば、理想の王になるだろう、とよく言われるクライ

ドロであるが、彼には王になる以前からある噂があつた。

曰く、クライドロの歌は『すごい』らしい。

一体どうすごいのか、知る者はいない。クライドロが人前で歌ったことは皆無なので。唯一人真相を知っていそうなのは、クライドロの双子の妹であるのだが、彼女はとうに他国の男に嫁いでしまつて話を聞くことができない。

天上の歌声なのか、地獄の怨嗟になるのか、それとも違う『すごさ』があるのか。

よく分らないと、知りたくなってくるのが人情である。

ならば、本人に歌ってもらつて確かめればいいではないか。誰かがそんなことを口にしたのが、そもそもの発端だった。

「嫌だ」

クライドロの拒絶は簡潔であつた。

「そんなこといわしゅに、うたつてくらはいよ」

そう言つてクライドロに絡む文官は、大分呂律が回っていない。そうだそうだと騒ぎ立てる周りの者達も、随分と酔いが回っている。

ちなみに、毎月恒例・『フェルメリア王城お疲れ会』の無礼講の宴会の最中であるのだから、これは可笑しいことではない。他国の人間から見れば、警備などの面で大丈夫なのかと首を捻られそうだが、それは毎回参加する人数を予め決めておくといった対策をきちんと立てている。それに実力主義のフェルメリアでは、他国と違って家や血の柵がないので無礼講でも何ら問題がない。

「絶対歌わないからな！」

酔つ払い達の要求を、完全拒否する様子のクライドロ。

「早く歌ってくれよ、鬱陶しい」

クライドロにそう言ったのは、フェルメリアの元帥だ。

「ジャワードの裏切り者！」

「元から味方じゃねえ……」

ジャワードはクライドロに呆れた目を向けながら、持っていた杯に口を付けた。

「それは俺とジャワードの仲じゃないか」

「誤解を招く言い方は止める……！ ちょ、ハマラ、ちが、ぐうつ

」

「おゝい、ハマラ、ハマラ。ジャワードの首絞まってんぞ。そのま
まじゃ、ジャワード死ぬから」

クライドロは、ジャワードにへばり付きながら自分を威嚇している、
ジャワードの妻に声をかけた。このフェルメリアの元帥夫妻、夫が
生粋のヒト、妻が竜人で夫婦間に身体能力の差があり、さらには妻
が嫉妬深いため、しばしば夫の方が大変なことになる。

「ジャワードも大変だな」

クライドロは、まるつきり他人事で、自分の分の酒を飲み干した。

「?!」

くらりと、クライドロの視界が揺れた。それと同時に、身体の制御
が覚束なくなる。それは、クライドロが滅多に感じるこの無い酩
酩感に似ていた。

「おゝほっほっほ。引つ掛かりなさいましたわね、陛下！」

「ドロ、シー、何、した？」

「勿論、陛下に衣服盛りましたのよっ」

語尾にハートマークが付きそうな勢いで言いきったのは、フェルメ
リアの魔法技術省の長であるドロシーだ。祖先のホイビット譲りの
ちっさな体をそっくりかえらせて、よく高笑いを響かせている彼女
だが、知識、実力ともにその肩書に相応しい人物である。

「何、で？」

「私も陛下の歌が聴きたかったのですわ！ そのために、いくつか
陛下向けに調整した薬も用意したのですよ！ この私の名にかけ

て、効果は保証致しますわ！」

どんな薬を用意したのか、全く以て聞きたくない。種族的な性質から、己の自由を制限されることが我慢できないクライドロだったが、ここまで堂々と言われてしまうと、逆に怒る気も失せた。

「ちよつと、俺、王様、何だから、もつと、こつ、尊敬、とか……」

「おゝほつほつほ。そんなことは、尊敬されるに足る行動をしてから言っして下さいまし」

「……」

事実なので、クライドロは言い返せなかった。

「あゝ、もう、歌、えば、いいん、だろ、歌、えば」
最早クライドロはやけっぱちだった。

眠れ 眠れよ 子供達

歌声は、薬を盛られたとは思えないほど、はつきりと、滑らかに響いた。

「子守歌かよ！ でも歌うめえっ！」

観衆の突っ込みがあつたが、そもそも歌など歌わないクライドロがきちんと歌える歌は、大してない。

お前達の翼は 空を掴むには まだ弱く

この大地は お前達が歩くには まだ険しい

異変は、すぐに表れた。

眠れ 眠れよ 子供達

星達の守護を 揺り籠に

ぐらりと、ジャワードの身体が揺れ、卓の上に倒れ込んだ。

月の加護を 我が手に

健やかな 眠りを 子供達

クライドロの歌を聴いている者達が、次々と倒れていく。その顔に苦悶くもんの色は無く、皆、ただ眠っているだけのようだった。

明日の朝 空高く 飛んでいけるように

明日の朝 どこまでも 走り続けられるように

クライドロが歌い終わった時、その場にいて起きていた者は、クライドロとドロシーだけだった。

「おゝほっほっほっほっほ。すごいですわ、陛下！ 陛下の歌は、天然の呪歌じゅかになるのですわね。良い参考になりましたわ！」

ドロシーは興奮気味に、ものすごい勢いで紙に何かを書きつけていた。クライドロがちりと見たそれは、何かの呪式の様であった。ところで、呪歌と言うのは、魔術効果を有した歌の事である。そもそも、呪歌というものは、望んだ効果を発揮するために、歌詞、音程、旋律全てが計算され尽くされた代物なので、クライドロの様に、歌い手の技量でただの子守歌が呪歌に変身するなんてことは理論上在り得ない。ならば、何故そんなことが起こったかといえば、世界すら揺るがす声を持つ、真竜の血のせいだとクライドロは予想している。

「陛下、また今度は、違う歌を歌って下さいまし」

「却下！ 自分でも何が起こるか分かんないから、あんまり歌いたくないんだよ、俺はっ」

ドロシーにはそう言ったが、実際には歌詞からある程度効果を予測できる。幼少の頃、意味も分からぬまま歌った恋唄のせいで、老若男女誰かれ構わず魅了みりようしてしまったのと、今回の子守歌の件で大体把握した。ところで、恋唄の時にクライドロの歌に魅了された者に追いかけて回された心的外傷から、クライドロの中で歌が禁忌きんきになっ

たのであつた。

「あらう、残念ですわ」

そう言つたドロシーが眠りに落ちて倒れるのと、彼女が呪式を書きあげたのは同時だつた。どうやら、思い付いた呪式を書き留めるために、根性でクライド口の呪歌の作用に抗^{あらが}つていたらしい。恐ろしきは、ドロシーの魔法研究に対する熱意である。

「……気持ち悪つ」

ドロシーが盛つた薬のせいで体調が悪くなつたクライド口は、よろよろと夜風に当たるために外に出ていった。

丸い月が浮かぶ夜空は、いつもより明るい色をしていた。

熱を持った頬^{ほお}に、涼しい風が心地好い。

見上げた夜空に、懐かしい瞳を連想した。

だから、だろう。彼女が好んでいた歌が、口から零^{こぼ}れたのは。

この空の下 大地の上

あの海の果てにさえ あなたはいない

どうか どうか 叶うなら

せめて 夢の中で あなたに

それは、亡き人を渴望^{かつぼう}する歌だつた。

デューリアス

風に紛^{まぎ}れてしまう様な、幻聴^{げんちょう}。彼女が自分を呼ぶ声。

それは、優しくも残酷^{ざんこく}な、幻^{まぼろし}。潰^{つい}えた可能性の、残滓^{ざんし}だ。

それでも、確かに、彼女はいたのだ。

目を見張るクライド口の目の前、儚^{はかな}く冷たい光に照らされて。

「シファナ」

クライドロの喉のどがからからに乾く。鼻の奥が、ツンと痛んだ。
陽光を集めた様な金色の髪。群青色ぐんじょうしきの瞳には、鮮やかな光が宿る。
その腕かひなに懐くのは、かつて産まれ得なかった、命だ。
クライドロが伸ばした指先は、けれど、何も掴つかむことは無かった。
触れようとしたものは、虚空こくうに還り、何も無い手を、クライドロは
握り締める。

「……歌うんじゃ、なかった」
呟つぶやく声は、酷かすく擦れて。視界に映る月が、歪ゆがんで見えた。

「おゝほっほっほっほ。やられましたわ」

「あの野郎……」

相変わらず高笑いを響かせるドロシーの隣で、ジャワードがクライ
ドロの書置きを握り潰した。

「しばらくこのまま？」

哀しげに呟くハマラの顔には、念入りの落書きがしてあった。これ
は、ジャワードやドロシーだけでなく、クライドロの子守唄を聴い
て眠りこけた全員に共通したものである。一体何で書いたものか、
何度顔を洗っても、全く落ちない。

落書きの犯人であろう人物は、『花畑を見に行きます。探さないで
下さい』という書置きを残してどこかへ行ってしまう。しか
も、探査魔法でクライドロを探そうとすれば、くしゃみが止まらな
くなる呪いが返ってくる。地味な嫌がらせなだけに、余計に腹立た
しい。

結局、クライドロが帰って来たのは、魔法技術省の研究者が試行錯
誤の末、落書き落としを開発した後だった。

宝石よりなお輝かしき あなたの笑顔に 花束を

砂上の花よりなお麗しき あなたの笑顔に 花束を

クライドロの足元には、一面の花畑が広がっていた。紅、白、青、黄。様々な色の花々が、伸びやかに咲き誇っている。

クライドロがそっと触れたのは、白い石で作られた墓石だ。触れた指先には、つるりとした感触があった。クライドは、墓石に話しかけることはしなかった。墓石はあくまで、故人を偲ぶ縁であつたら。

クライドロは唐突に、花畑に仰向けに倒れ込んだ。その拍子に、散ってしまった花弁が、風に舞い上がる。見上げる空は青く、どこまでも澄んでいた。

クライドロは、大きく息を吸い込んだ。

もしも輪廻があるならば。

また会いたいと思うのは、常に置いて逝かれる者達の祈りだ。

祈るから。願うから。

天に。地に。世界に。

そして、君に、届けと。

竜の歌声が、花畑に響いていた。

約束（前書き）

以前部誌に投稿した作品です。

ビミョウにシリアス？

「届くことのない指先」を読んでいないと、ちょっと分かりにくいかもしれません。

約束

怒られた。何故、怒られたのかは分からないけれど。

「何言ってるの！」

そう言う少女は、群青色（じゆんせい）の瞳に鮮やかな光を浮かべていた。

「なんで怒るんだ？ 少なくとも、フェルメリアの王は、体の良い人柱なのはほんとだよ」

フェルメリアの王は、王都の結界を構成する重要な鍵だ。それ故、歴代の王たちは、王都から出ることは叶わなかった。頑張（がん）って王都の結界の陣を弄（いじ）ったから、クライドロは王となっても、王都の外へ自由に出歩けるけども。

「だったら、どうして王なんかやっているのよ」

「約束だったから」

彼の人と、フェルメリアを護っていくと、誓ったのだ。それは、もういない人との約束。彼の人の世界が、とうの昔に最愛の男を失ったときに壊れてしまっていたことは、彼の人が自ら命を絶つて、ようやく気付いた。彼の人は何処へでも行けるようにと、クライドロが引き継いだ王座は、彼の人を此岸（しがん）に引き留める、唯一のものだったのだ。クライドロが今亡き人のためにできることは、もはや、約束を守り抜くことしかない。

「馬鹿っ」

頭を叩（たた）かれた。

「シファナ、なんで怒ってるの……」

少女が怒る理由が分からず、クライドロは困惑するしかない。

「デীরリアスが馬鹿だからよ！」

呼ばれたその名は、クライドロの真名。限られた者以外には、秘されるもの。

「どうして、自分のために王で在り続けないの？」

シファナの真剣な表情に、クライドロは少し考え込んだ。

「シファナは、約束を守ることは他の人のためだって、思っているかもしれないけど、俺は自分のために約束を守ってるよ」

全部、自分のためだ。約束を守っていれさえすれば、彼女と繋がってられる。そもそも、守りたいと思わなければ、約束なんてしなかった。

「馬鹿……」

シファナが、泣き笑いの様な顔をしたのが、クライドロには不思議だった。

「……じゃあ、私と約束したら、守ってくれるの？」

「もちろん」

クライドロにとって、たとえ言葉だけであろうと、誓約は絶対のもの。

「デীরリアス」

少女が口にしたのは、クライドロにとって救いであり、鎖であった。

「それなら、私の理想の王になって」

後から思えば、シファナはクライドロを護ろうとしていたのだろう。その時のクライドロの頭には、彼の人との約束を守ることだけしかなくて、国の事も自分の事も、大切だとは思っていなかったから。他の誰でもなく、クライドロを選んでくれた少女は、彼のその危うさに気付いていたのだと思う。シファナは妾腹しやふくだったとはいえ王族で、恐らくは彼女の父王より、王座の重さを理解していた。その彼女だったから、クライドロの危うさが、何時かクライドロに致命的な何かをもたらすと分かったのだ。

彼の人とシファナに感じていた「大切」は、性質が違ふものだった。彼の人を感じていたのは、微かに甘くほろ苦いもので、シファナへの想いは、ただひたすらに温かい。

大切だった。このまま一緒にいるのが、当然だと思っほに。
哀しかった。少女がいなくなつてしまつたときに、彼女はクライド
口の唯一無二ではなかつたと、思ひ知らされたから。シファナの温
もりが、己が手から零れてしまつた喪失感は、確かにクライドロの
どこかを穿つた。それでも、彼女の後を追えないと思つてしまつた。
まだ、クライドロは、己の唯一無二たる絶対を見出していないと、
本能が囁いて。

シファナが向けてくれていたものと同等以上の想いを、彼女に
返せない自分が、情けなかつた。

彼の人に死んでもよい理由を与えたのは、クライドロだつた。そし
て、シファナの死の原因を作つたのも、クライドロだつた。

もう手の届かない場所に行つてしまつた少女と、産まれ得なか
つた小さな命を想う。

シファナのために、今のクライドロができることもまた、二人の間
の約束を守ることだけ。

約束（後書き）

クライドロがサボり魔なのは、約束が「まじめに仕事をする」ではないからです。

終わりを願う（前書き）

他の章との繋がりを書きたくて、書いてみた話。
脳天気なサボリ魔王にも、大変な時はあったのです。

終わりを願う

「産むのか？」

「もちろん」

迷わず即答して、彼女は膨らんだ己の腹を撫でた。痩せこけた女の体軀が、腹の大きさを強調するようだった。

「この命を引き換えにしても」

そう言っただけ彼女は美しく微笑んだ。その答えに、相手の青い双眸が揺れる。

「……幸せになれると、思うのか？」

力ある真竜の血を引く彼女は、巨大な魔力を有していた。しかし、その彼女の体さえ蝕む魔力を宿す怪物が、彼女の胎の中に存在していたのだ。強過ぎる力は、持つ者やその周囲に災禍を招く。無事に産まれ得たとして、その子はどう、生きていくのか。

「私は、信じたい。世の中は、汚いものもあるけれど、綺麗なものも沢山あるわ。この子達には、世界を、見てほしいの」だから、早く出ておいで。

まだ見ぬ我が子等に囁く声は、どこまでも優しくかった。

彼女が覚えている母の姿は、常にベッドの上にあった。

昔は店の給仕をしていたという母。けれど、彼女にはそんな母の姿が想像できなかった。

身体が弱く、よく吐血をする様な父は動き回っていられるのに、どうしてだろうと、一度だけ両親に問い掛けたことがあった。

母は、困ったように空色の目を瞬^{またた}かせて。

父は、哀しそうに緑色の目を伏せた。

だから、どうしてなんて、尋ねてはいけなかったのだ。

自分はいつか、死ぬだろう。

それは、彼にとって自明の理であった。誰もが日常の中で目を逸^そらす『死』の影は、いつだって彼に張り付いていたのだから。でも。

死ぬのが怖くなってしまった。

何故、と問われれば、空色の瞳が脳裏に浮かぶ。

死んでしまつたら、彼女の目に自分の姿が映ることは無くなる。

死んでしまつたら、彼女に触れることができなくなる。

死んでしまつたら、自分はいずれ、彼女にとって過去の人間になる。

死んで、しまつたら。

彼女の横で、当然のように自分ではない誰かが笑うのだ。

それは、それだけは、嫌だ。許容できない。

彼女には、笑ってほしい。幸せになってほしい。

そう、思うのに。

どうして、それは、自分の隣でなければいけないのだろう。

取り立てて優れているとも、劣っているとも言えない、リュートの音。静かな音色は、虚無^{きよむ}すら孕^{はら}まぬ程に透明だ。

異母姉^{あね}が奏でるそれを、彼は祖母の膝の上で聞いていた。彼の腕の中には、祖父の温もりがある。

父と同じ、夜の静寂^{せいじやく}を宿した異母姉^{あね}の双眸は、先程からずっとリュートの方へと注がれている。

潮騒しおさいの様な旋律せんりつが眠気を誘い、彼はなんとなしに、祖母に自分の身体を預けた。異母姉あねと同色の彼の黒髪を、祖母の白い手が撫なでた。ぼんやりと見上げた視界には、祖母の緑色の目と、白濁した緑の髪が見えていた。

彼の日常が崩くずれたのは、突然のこと。

高い鳴き声は、母のもの。絶望を宿した慟哭ごうく。最早、声ですらなくなつた、悲痛な咆哮ほうこう。

ボロボロになつた母の腕の中には、父だつたモノの残骸ざんがいがあつた。ただただ叫ぶことしかできない母の周りに散らばるのは、ほんの少し前まで人のカタチをしていた赤いモノ。

どうして、という疑問の答えは、熱に侵おかされた頭に浮かぶことは無い。

何もかもが夢の様に朧おぼろげで。唯一はつきりとしていたのは、自分を抱きしめる異母姉あねの温もりだけだつた。

不意に、咆哮ほうこうが止んだ。

自分達の方を見た母の目が、大きく見開かれる。

頭上でピカリと、何かが光つた。

母の悲鳴。

衝撃。

異母姉あねの呻うめき声。

一層強く香る、鉄錆てつさびの臭い。

全ては、ただ、遠く。

一際高い咆哮と共に、母の姿がぐにやりと歪ゆがんだのを、彼は他人事のように眺めていた。

きらきらと煌きらめく鱗うろこ。鳥のそれとは違う翼。鋭い牙。

ヒトではなくなった母の、それでも変わらぬ緑色の瞳からは、幾つ
も幾つもの、大粒の滴が零れ落ちていた。

目覚めは最悪だった。

「デイー、起きた？」

鉛の様に重い瞼を抉じ開けると、緑と空色の互い違いの双眸と目が
合った。

「フエリ」

双子の妹を呼ぶ声は、酷く擦れていた。

「俺は……」

「おばか」

妹の両手が、彼の頬を包み込む。

彼は今更ながら、自分が全裸の妹に膝枕をされていることに気が付
いた。

「……ごめん……」

彼の妹は、別に服を着ない趣味がある訳ではない。彼女が生のまま
の姿であるのは、彼の暴走を止めるために、もう一つの姿をとった
ためであろう。人の姿が仮初である彼に対し、妹の方はどちらの姿
も彼女の本性なのだ。それ故、人外の姿をとった時、如何なる理屈
か、彼は身に纏った衣服に影響が出ることが無い。しかし一方、妹
の方はといえば、もう一つの姿になると、それは人の姿より遥かに
大きいため、身に付けている衣服が例外なく破れて用を為さなくな
るのである。

己が母より彼等が受け継いだのは、力ある真竜の血脈。

彼と彼の妹に天を駆ける翼をもたらしした血は、しかし、人の系譜にも連なる双子にとつて、毒でもあった。

それは、血の皮肉。

彼は、弱々しく歪んだ笑みを浮かべた。

真竜はその血を以て、気の遠くなる様な年月において積み重なった膨大なる知識を我が子に継がせる。故に、真竜の知識は身体を流れる血潮に刻まれていると言つても過言ではない。

なれば、竜の血を飲めば、彼等の叡智えいちをヒトが手にすることが出来るのだろうか。

その答えは、否。

そもそも、真竜も竜の眷属も己の伴侶以外に自分の血を分けることなどしないが、万が一ヒトが竜の血を飲むことが出来たとして、叡智を手に入れるには至らない。

竜、特に真竜と呼ばれる存在の血は、ヒトにとって猛毒だ。それも、死を確約された。

如何に耐えられよう。いかへ

真竜より遙かに脆弱たるモノが、世界最高峰の魔力の断片に。

たかだか数十年、数百年しか生きられぬモノが、千の、万の、いや、幾億に至るだらう歳月としづきに凝縮された、情報量に。

真竜の血が彼を蝕むむしばのは、彼のヒトの部分が彼の真竜の部分に耐えられないからだつた。

夢を見る。

母の。祖父の。真竜の血の源たる、曾祖母の。さらに、その祖先まで。脈々と受け継がれてきた血潮に打ち込まれた、記憶の。

果てが無いようにも思える、過去を遡るさかのぼ、夢。

彼の、真竜としての精神が受け入れても、ヒトとしての心が拒絶する悪夢。

その夢から覚めた後は、決まって自分がいったい何者なのかあまいが曖昧になつて。いつか、彼の自我が嘗て存在していた誰かの記憶に溶け

て消えてしまう様な、恐怖を覚えた。

また、その夢は彼の血、ひいては彼の魔力の暴走によって起こるらしい。

年経るごとに魔力が増大していくのが真竜の特徴であり、彼もまたそうであった。けれども、真竜の視点から見ても、彼の魔力の伸びは異常の一言に尽きた。おかげで、彼は魔力を制御しきれず、しばしば暴走を引き起こす。そうなってしまうたら、彼の妹が竜化でもしない限り、被害なくそれを治めることは不可能だった。

「……ほんと、いつまでこんなだろうな……」

「……わからない」

ぽつりと呟かれた言葉に、彼の妹は首を振った。

「……いつか。いつか、一緒に飛べるようになるう」

上空を見上げた妹の双眸に映ったのは、幾重にも張られた結界越しの空。そして、遠い蒼天への憧憬^{しやうけい}。

大気中の魔素^{マナ}の濃度が濃い故郷の空を、先天的な魔素過敏症^{マナ}の彼女が飛べることは無いだろうけれど。

「飛べれば、いいな」

せめて、希望をのせた約束を。

その翼が空を掴む^{つか}ことを。

底無しの過去の夢と、地べたを這^はい続ける時の終わりを、ただ願った。

終わりを願う（後書き）

クーさんの双子の妹は、裸族ではないのであしからず。

ただ、それだけのこと　―（前書き）

フェルメリアの「神に見捨てられた地」としての側面の話なので、次回以降に残虐・流血描写出てきます。苦手な人はご注意ください。

ただ、それだけのこと――

ガラガラという馬車の音は、彼等にとって希望への足音だった。

新天地は、決して良い話ばかりが聞ける場所ではない。『神に見捨てられた』と言われる地。それでも、己の故郷が奉ずる神を見限った彼等には、こちらの呼び名の方が余程好ましかった。

『神に見捨てられた地』の所以を、彼等が絶望と共に噛み締めるのは、それ程遠い時ではなかったけれども。

ソレは飢えていた。

とてもとても飢えていた。

喰らっても喰らっても、ソレの奥底にへばり付く欲求は治まることを知らない。

もつともつともつと、と。

止まること無き渴望に任せて、ソレはさ迷い歩く。
そして見つけた、其れ。

ソレは歓喜した。

其れを持っていると、ソレは、もつとずっと喰らうことが出来たから。

それでも、足りない足りない足りない、と。

其れを持ったまま、ソレは、また動きだした。
もつと喰らえる方向へ。

ただ、それだけのこと 二

精霊。

それは、森羅万象に宿るモノ。世界を支える一欠片。不可視ながらも、ありとあらゆるところに居る隣人だ。

精霊を感じることが出来ない者の一部は、その存在を頑固に否定するが、精霊と感応する者には否定する理由が全く以て理解できなかつたりする。

精霊と親しむ『加護持ち』にとって、精霊は空気と同じようなものだ。見えず、触れられず、しかし、感じ、そこに在る。そんな存在を、どうして無いと断じれよう。

しかしながら、人間というのは己の目に見える、或いは自分の信じたいものを信じる動物である。精霊を否定する徒人と、精霊の加護を受け、その力を借りることも出来る『加護持ち』の間には、酷く分厚い壁が鎮座していた。

ガラガラという馬車の音。

彼等が乗っている乗合馬車が進むのは、国境付近の石畳の街道。大国の一つに数えられる故郷であっても、辺境と言ってもよい国境近くの道は、国の動脈部と同じように整備されていなかった。だからこれを初めて見た時は心底驚いた。さらに言えば、石畳の中に等間隔で魔石が埋め込まれているのも、故郷ではありえぬことである。

この国では当たり前前の魔物除けの結界らしいが、他国では希少な魔石が惜し気もなく使用されているのを見ると、国力の差というものを感じる。

世界の魔力とも言える魔素^{マナ}の結晶たる魔石は、魔法具の製作や、戦争に用いられる戦略魔法には必須のものである。そのため、魔石の所有量が、国の戦力に直結するのだ。彼等が今いる

国　フェルメリアは、大陸でもずば抜けた魔石の産出量を誇り、大陸屈指の強国として名を馳せていた。

「あー、あー、うー」

彼の妻の腕の中で、赤子がしきりに声を上げる。紅葉の様な小さな手が、何かを掴もうとするように動く。赤子は国境を越えてからずっと機嫌が良く、しばしば無邪気な笑顔を見せていた。

「ルドルフ、だったか？　その子、ご機嫌だな」

竜の眷属である地竜に跨る馬車の護衛役の男が、彼に声を掛けてきた。今はそれなりに温かく湿度がある時期なので、馬車の窓は大きく開け放たれ、外にいる護衛と会話が出来るようになっていたのである。エルフの血を引くらしく、先の尖った耳を有している男は、微笑ましげに赤子を見ていた。

「ああ、そうなんだ。きつとこの子は、精霊に歓迎でもされているんだろう」

そう言つて彼は苦微笑した。一方、護衛の男は大きく口を開けて笑った。

「そうだろうな。滅多にいない『愛し子』だ。精霊に歓迎されない方が可笑しいだろう」

そう言う護衛の男が赤子へと向ける眼差しは、慈愛と親愛に溢れており、それとは正反対の嫌悪と怖れの目を見てきた彼は、ただ苦笑するしかなかった。

彼と彼の妻がルドルフと名付けた赤子は、彼等の故郷たるローデオでは『悪魔の子』と呼ばれる存在だった。

ルドルフが悪魔に魅入られた証とされたのが、その翠の目。ルドルフの瞳の色は、深山の湖面の色にも、命に満ちた森の色にも見える上に、光の加減で時折晴天の空の色が混じる翠だった。フェルメリアでは精霊の多大なる寵愛を受けた『精霊の愛し子』の証とされる、独特の色彩を有した瞳は、ローデオでは忌み子の象徴であった。

そもそも、フェルメリアとローディオでは宗教観が大きく異なっている。フェルメリアは、『神に見捨てられた』が故に神に祈らず、世界を構成すると言われる精霊に助力を乞う。対して、ローディオは、大陸で広く信仰されている唯一神を奉じ、精霊を悪魔と同じ存在と見なしている。そのため、フェルメリアでは尊敬と憧憬を集める『精霊の愛し子』も、ローディオでは憎悪と侮蔑に晒される『悪魔の子』でしかなくなるのだった。

ローディオではその生を許されず、その殆どが生まれ無かったことにされる『悪魔の子』。彼と彼の妻が『悪魔の子』たるルドルフを助けようとしたのは、彼等が故郷で権勢を振るう『教会』に疑念を抱いていたからである。故郷では『教会』の異端諮問官であつた彼は、フェルメリアで言うところの精霊の『加護持ち』であつた。しかしながら、彼に与えられた精霊の加護は酷く弱く、精霊の力を借りるどころかその存在を感知するのがやっとであつたけれども。

彼はずっと疑問に思っていたのだ。

何故、精霊を感じるだけの自分は人間の範囲に収まっているのに、精霊の助力を得られる人間は『悪魔の子』とされ、ヒトとしての扱いを受けられないのか。

異端諮問官は、地上に蔓延る『悪魔の子』を討つために、神に遣わされた英雄とされている。その異端諮問官である己と『悪魔の子』が、根本では同じものだと思つたのは、一体何時だつたろうか。降り積もる疑念は、いつしか彼の根幹を成していた神への信仰への不信を生んだ。不信を抱えたまま続けるには、異端諮問官の責務はあまりにも血塗られていた。それでも、唯一神の教えを絶対としている故郷で生きていくためには、疑念も不信も彼の最大の理解者たる妻以外に吐露することが許されなかつた。

そして、長年に亘る危うい綱渡りのせいで、彼の精神に次第に限界が見え始める。そんな時だ。異端諮問官である彼と宮廷魔道士である彼の妻に、一つの任務が与えられたのは。それは、彼等がルドルフと名付けた赤子を秘密裏に処分することだつた。

もう、無理だ。

無知故に穢^{けが}れを知らぬ翠の瞳を見た時、彼はそう思った。

これ以上、自分を偽り続けることも。神という名の大義名分を盾に、罪なき命を奪うことも。もう、出来ない。

抵抗してくれば良かった。自分を殺そうとしてくれれば良かった。そうすれば、彼は何とか自分を誤魔化して、任務を遂行できたのに。真^まつ新^{あら}なままの無垢^{むく}な魂は、ただただ温もりを欲していただけだった。

彼が抱き締めた途端にぴたりと泣き止んだ、『悪魔の子』。忌むべき赤子の周りには、風の精霊の歓喜と、赤子を気遣う思念が渦巻いていた。

小さな身体は、驚くほど軽く。すぐに壊れてしまいそうな弱々しい存在を、屈強な男達や様々な権威を戴く者達が恐ろしげに見ていることが、酷^{こっけい}く滑稽^{こっけい}に思えた。

守らなければ。

湧き上がってきた、強烈な使命感。それは、同情ではなく、親愛の情でもなかったけれど。彼の腕の中に在る温かいモノは、災いとされ、実際に己を害そうとした騎士を葬^{ほうむ}り去った生き物とは、どうしても思えなかったから。

ふと妻を見ると、彼女は強い光を宿した目で、彼に頷^{うなづ}いた。

妻の行為に以心伝心という言葉を実感し、彼は、慌てて気を引き締めていなければ、場の空気を弁^{わきま}えずに笑いだしていただろう。

必ず、守る。

誓^{ちか}うべき神は、最^も早^{はや}い。この誓約を捧げるとするならば、最愛の女と、風の寵児^{ちようじ}たる赤子だ。

そうして彼等は故郷を捨てた。故郷と、何より自分達の為の、彼等が出来る最大限の偽装工作をして。

彼等を亡き者にせんとする、故郷からの追手を振り切つて。

漸く、『^{ようや}悪魔の子^{ルドルフ}』が生きること許される、^{フェルメリア}異端の王国に辿り着いたのだ。^{たど}

長かった、と彼は溜息を吐いた。

彼等は今、フェルメリアの王都へ向かう乗合馬車の中にいる。フェルメリアに入国した時点で追手の心配はほぼ無くなった。ローデイオ、ひいては『教会』にとって、フェルメリアはある意味禁断の地だからだ。が、万全を期すには国境近くの町よりも、フェルメリアの中心たる王都にいた方が良い。それに、常に魔物の脅威に曝され続けるフェルメリアで最も安全なのは、難攻不落の結界に守られた王都なのである。王都へ向かう途中で魔物の襲撃に遭う可能性もあるが、王都行きの乗合馬車に乗って死ぬのを心配するのは、街中で事故に遭って死ぬ心配をすることと同意義であるらしい。少なくとも、他国からの輸入品の運送にも用いられる王都への街道周辺は、定期的に軍による魔物の掃討が行われる。また、魔物が出たとしても、街道には魔物除けの結界が張つてあるし、それなりに腕の立つ護衛が乗合馬車を守っている。そうは言っても、北の山脈で高位の魔物を狩る魔狩人には劣るが、とは地竜に乗った護衛の言葉である。この分だと、何事も無く王都に着くだろうと、その護衛は続けた。

王都へ続く道。

彼は、その先に希望を見ていた。

ただ、それだけのこと 三（前書き）

クーさん登場！

ただ、それだけのこと 三

クライドロは仕事の手を休めて首を傾げた。

最近、精霊の様子がおかしいのである。

精霊というものには、極めて薄いが自我がある。故に、乳幼児並みに単純であっても、感情もまた有している。だが、基本的に感情の希薄な精霊が、数日以上の間同じ感情の発露はつろを続けていることは、はつきり言って異常事態なのだ。

こここのところ精霊達が懐いている感情は、歓喜。

特に喜びを表しているのは風の精霊だ。他の精霊は、どちらかといえば風の精霊の歓喜に当てられたといった方が正しい。

精霊が喜ぶ場面というのは実は意外に少ない。精霊の寵を受ける『加護持ち』が近くにいたとして、それでも機嫌が良くなる程度なのだ。クライドロが、これほどまでに精霊が歓喜に震える場面を見たのは、『王の愛し子』と呼ばれた女性の周辺ぐらいか。彼女の場合は絶大なる水の精霊の寵愛を受けていたため、彼女がそこにいるだけで水の精霊が狂気乱舞していたのだった。

「風の『王の愛し子』って、可能性が高いんだけどな。でも、『王の愛し子』がたかだか数年ぐらいでまた生まれるのも異常だしな」

クライドロは、黒と緑の互い違いの双眸を細め、独り言をこぼした。『加護持ち』の中でも特に精霊の寵を受け、多大なる守護と力を授けられる者を『精霊の愛し子』と呼ぶが、その中でもさらに一握りに属するのが『王の愛し子』だ。異界に在るという精霊王の加護を受けたとされる者達は、精霊の力を借りるだけでは飽き足らず、時に精霊の隷属れいぞくすら行い得る。『王の愛し子』は非常に稀まれな存在であり、数百年に一人出現すれば十分多いといえるのだ。

うんうん唸うなっていたクライドロは、唐突に身体を折り曲げ屈みこんだ。そんな彼の頭上を火球が通り過ぎる。チツと、誰かの舌打ちが

した。

「陛下、仕事してください」

「……今、舌打ちした？ 舌打ちしたよな？」

「陛下、仕事を……」

「うん、するからそんなに火の玉を出すのは止めような。また壁の修理するの面倒臭いから」

幽鬼の様な暗過ぎる空気を身に纏い、周りに数十もの火球を顕現させている部下を、クライドロは宥めた。制度上は一国の主である筈なのだが、部下からのクライドロの扱いはどうにも悪い。それはひとえに、隙あらば臣下に仕事を押し付けてあちこち放浪して回る、クライドロの普段の行いのためであるのだが。

「ちよつと精霊の様子がおかしいのが気になったただけなんだ」

「知りませんよ」

クライドロの言い訳を、部下は一蹴した。ちなみに、クライドロは精霊の加護を有しており彼等を感じ取ることが出来るが、部下は精霊の寵愛無き故にそれが出来ない。しかしながら、部下が絶対零度の眼差しをクライドロに向けるのは、クライドロを信用していないのもあるだろう。一応、臣下たちがクライドロに向ける目の十割のうち九分ぐらいは信頼であるが、信じて頼るのはクライドロの能力のみである。一方のクライドロのやる気の方は、全く信じられていない。

部下から冷たい目で見られたクライドロは、そのまま頭を掻きながら仕事に戻ろうとした。

ぞわりと。

空気が変わった。

精霊達に走った緊張。

そして。

声無き絶叫が辺りを震わせた。

クル

アレガ

タスケテ

マモツテ

アノコ

アブナイ

タスケテ

アノコ、ヲ、タスケテ

この時、五十数年の歳月を生きてきたクライドロが、初めて目にした精霊達の狂乱。その根底にある恐怖という感情を、精霊達が懐いている場面に遭遇^{そつぐう}することも、クライドロは初めてだった。クライドロの双眸が、どこか呑気なものから一転、切り裂く様な鋭さを帯びる。

扉も窓も閉め切られた室内で、クライドロを起点に風が巻き起こった。

『加護持ち』しか知りえぬ、精霊達の気配が色濃くなる。分からぬ者には、万の言葉を尽くそうが決して伝わらぬ感覚。

クライドロは、見えることの無い意思の手を四方八方に伸ばした。魂が、精霊達と共振を起こす。

どうか、とクライドロは彼の守護者たる風の精霊達に念じる。

どうか、力を貸してほしいと。

姿無き隣人達の力を借りるために必要なのは、ただ己の意思のみ。そして、クライドロが感じる世界が、果てが無いほどに広がった。

「
って、ちょっと。おいおいおいおい
」

風の精霊の力を以て探査を行ったクライドロの口から、呻^{うめ}き声が漏^もれる。

「　　精霊食^ぐい　いつ!？」

何事かとクライドロを見ていた部下は、その単語に目を剥^むいた。

ただ、それだけのこと 三（後書き）

クーさんに対する部下さんの扱いはこれが通常運行。
クーさん、信頼はありますが、信用も尊敬もありません。

ただ、それだけのこと 四（前書き）

文章下手くそですが、残酷描写がありますので苦手な方はご注意を。
作者的にグロテスクなものも出てきます。

ただ、それだけのこと 四

息子の様子がおかしい。^{ルドルフ}

赤子は、数時間ほど前からずっと、落ち着きなく瞳を動かし、不安げに声を上げていた。ルドルフの小さな手は、自分を抱きしめる妻の衣服を、^{すが} 締るように^{つか} 掴んでいる。

「ルドルフ、どうした？」

彼は、赤子を安心させるように額を撫でる。しかし、いつもなら彼が撫でると気持ちよさそうに目を細める赤子は、何かに^{おび} 脅えるように瞳を^ゆ 揺らめかせていた。

彼は妻と目を見合わせる。

凶手に追われていた時でさえ、ルドルフがこのような反応を示すことは無かったのである。彼等は自分達の息子を^{おび} 脅かす存在など、思い付かなかった。

彼と妻は懸命に赤子をあやしたが効果は無く、とうとうルドルフは泣き出してしまった。

それから。

ぞわりと。

空気が変わった。

精霊達に走った緊張。

そして。

声無き絶叫が辺りを震わせた。

彼が、精霊達の異変に困惑するのと同じ時。

ぐん、と彼等が乗っている馬車の速度が上がった。馬車の揺れが激しくなり、彼は咄嗟に^{とっさ} 赤子を抱いた妻を抱き締めた。

「何がっ?!」

彼の疑問に答える者はいない。

悪夢と絶望の使者が、耳障りな咆哮^{うごう}を上げた。

「精霊喰い　だああああああああっつつつつ！

！！！！」

悲鳴交じりの護衛の警告。それは最早、何の意味も成さぬものだった。

風が死んだ。大地が腐る。精霊達の気配が消えていく。

鼻腔^{びこう}に残された空気は、ただ、虚無の香りだけがする。

異様な速さで、大きくなる音。

何かを引きずり、大地を蹴り、こちらに近付いて来る。

彼は咄嗟^{とっさ}に馬車の後方を見たが、頑丈な板の壁に遮^{さへき}られ、外を窺^{うかが}う事は出来ない。窓の外では、護衛が必死の形相で後に向かって矢を射ていた。それでもその行為は、近付く不吉の足止めにもならない。

赤子の泣き声が、一際大きくなる。

硝子^{がらす}が割れる様な、儚^{はかな}い破砕音^{はさいおん}。

護衛が、騎乗していた地竜ごと薄桃色の触手に貫かれて、漸^{おそ}く彼は破砕音と街道の結界の崩壊を結び付けた。

彼が妻と赤子を抱いたまま窓の外に飛び出したのは、積み重ねられた経験と生存本能の為せる技であった。

一瞬の浮遊感。そして訪れた衝撃。

猛然と走っている馬車から飛び降りて、彼等に大した怪我が無かったのは、幸か不幸か、絶息した護衛と地竜が緩衝材になったため。しかしながら、彼等には無事だったことを喜ぶ暇は無かった。

木材が弾け飛ぶ、乾いた音。

肉を貫く、重く湿った音。

彼等が乗っていた馬車は、無数の触手を束ねた巨腕に薙^なぎ払われ、呆気なく大破した。

逃げなければ、と彼は思う。

それなのに、彼の身体は満足に動くことが出来なくなっていた。

大気を震わせた絶叫。

彼は、力が入らなくなった筈の身体の中から、得体の知れぬ熱が湧き上がるのを感じた。

しかし、彼には己の身体の変化に気を向ける余裕は無く。

身体が動く様になったのを良いことに、再び彼は息子に手を伸ばした。

生きとし生けるものは、世界の理に干渉する可能性を有する。

ヒトは、歪められた理を奇跡と言い、人為的に世界の理を歪め奇跡を生む術を魔法と呼ぶ。

一般的に、魔法の発動には相応の魔力量と、魔力を制御するための技術が必要と言われる。

だが、それは真理の上っ面ではない。

魔力は、ヒトの手を世界の法則へ届けるための道標。

魔力の制御は、道標をより効率的に作り出すための技術。

そして、森羅万象の理を改変するものは、ヒトの意思だ。よって。

魔力を以て行使するが、魔法に非ず。

魔法の発現の真なる鍵は、ヒトの精神なり。

強烈なヒトの想いは、時に奇跡を招き得る。

故に、彼の叫びは、確かに世界を歪ませたのだ。

つがいの双竜：『陽光の竜皇』（前書き）

以前投稿した作品です。

三話ぐらい続きます。

シリアス気味です。

つがいの双竜：『陽光の竜皇』

『そして竜皇と竜帝は決断した。その礎となる、初代王とその後継者達に、国が続く限りの守護を与えることを』

『フェルメリア国記』より

何時、運命を手にしたか、と問われれば、彼女と自分のための指輪を探そうと思いついた時だと答える。恐らく、偶然のように、この指輪を手取る前、目に留める前に、全ては決っていたのだ。

最後の書類を決裁し、アシュは体を伸ばす。

しばらく前から溜まりに溜まっていた書類は、ようやく全て捌き終えることができた。

印鑑代わりの指輪を指にはめ直し、アシュは席を立った。

「アシュ様」

玲瓏な声は、彼の秘書官のもの。

「これからは、体調にもお気を付け下さいますようお願いします」
淡々とした口調に、アシュは苦笑を洩らす。

常に冷静さを崩さない秘書官の態度と話の内容が、妙にかみ合っていない。秘書官が心配しているのは『彼自身』ではないと、アシュは知っている。

それでも、そもそも仕事が溜まったのは、彼が根を詰めすぎて寝込んだせいなので、反論しようにもできなかった。

「気を付ける」

そうアシュが言うと、秘書官は黙って頷いた。

夜の散歩は、アシュの数少ない息抜きの一つである。

彼の自由になるわずかな時間を利用して、星や夜風を楽しむのだ。しかしながら、いつも共に散歩をしている妻が不在では、その楽しみもやや減衰する。

今宵は満月。

女神が座すという銀の円盤の前では、夜空に散らされた星屑達も、その輝きが色あせてしまう。

ふと、天とは別の場所に、銀の輝きを見る。それは、月の光とは異なる、どこか硬質な色。

「よっ」

片手をあげてアシュに挨拶をしたのは、しばらくぶりに見る友人だった。

「久しぶりだな、ジルバ」

「そうでもないんじゃないか？」

互いに笑いあう。

それでもアシュは、笑っている友人の金属めいた色の瞳に、酷く暗い濁りを見た。

鞘に無理やり納められた凶刃の如き、不吉な翳。

何時からであつたろうか。無二の友ともいっべき存在が、そのような色を浮かべるようになったのは。

燻り続ける不安を覆い隠し、アシュは笑おうとする。

「何か飲もう。いい酒があるから」

「おう」

ただ、互いに笑っていられば、それでいいと祈りながら。

初めて出会ったのがいつであつたか、それはとうに曖昧になつてしまっている。何故だかふとした拍子に再会することが続き、何時の間にもやら、ジルバの方からアシュに会いに来るようになっていた。彼らが会うときは大概、いつもそこら辺をふらついている、ジルバ

の旅の話を肴さかなに酒を酌くみ交わしている。その危険性故に、なかなか旅というものを経験することができなかったアシュは、ジルバの話を聞きながら、遠い異国のことを夢想してみたものである。

それは、アシュがどこにも行けなくなつた今でも、変わることはない。

どこか物憂もののうげに、ジルバは手にした杯はいの中の液体を揺らす。光を弾いて輝くそれは、命を表す赤に似ている。

他愛もない談笑の中にふと落ちた沈黙は、けれど不快なものではない。静寂すらも楽しみながら、密やかな酒宴しゅえんは続けられる。

「　そういやあ、アナはどこに行っているんだ？」

ジルバの問いに、アシュは答える。

「東の森の方。　魔獣が暴れているらしいから、その討伐うしはくに」

アシュが担うのは文であるが、彼の妻が担うのは武。それ故、この国の最大の脅威きょうゐといえる魔物の排除も、彼女が責任を持つことになっている。

「わー、ご愁傷しゅうしょうさま」

勿論もちろん、魔物の方が。

「なんだか、アナにはいつも迷惑かけてばかりだな」

「またか。　なーに凹へこんでんだ」

苦笑を洩もらすアシュに、ジルバは呆れた目を向ける。

彼の友人は、自分のことを過小評価しがちであるのが、玉たまに瑕きずだ。言いたい奴には、好き勝手言わせておけばいい。ジルバは、アシュがアシュであるから、力を貸すというのに。

彼の王だけが無自覚だ。

その片翼が、彼なしでは存在できないことを。

その手にある、銀竜ぎんりゅうに繋がった鎖を。　己の狂気を止められるのは、双子の片割れでも、愛した女でもなく、唯一、この友たる王だ

けであることを、ジルバは知っている。

真綿でできた檻おりの様だ、と嘗かつて、この王の伴侶はんりよは言った。

出るのは酷く簡単だ。しかし、心地が良くて、いつまでも囚^{とら}われて居たくなる。自由になるのが、惜しくなる。

「いや、当然だと思っただら、その途端、あっさり失いそうな気がしてな」

アシュは淡く笑った。

妻も、友人も、昔と変わらず隣にいてくれることが、何よりの僥倖^{じやうひん}で。気を抜いたら、それに寄り掛かってしまったら、すぐにどちらもないなくなってしましそうな気分になるのだ。

杯を持つ左手に、竜を模した金色の指輪が光る。書類の決裁のとき、印鑑代わりに使っていたものだ。

「ばーか」

ジルバの口調は、温かい。

どうして、友でなければいけなかったのか。

今でもまだ、ジルバはそう思うことがある。

彼らの故郷でもある、フェルメリアという国。

そこは、【神に見捨てられた地】と呼ばれる。

他国より変化に富んだ、豊かだが、あまりに厳しい大地。そこは自然が容赦なく牙^{きは}をむき、強力な魔物が跋扈^{はつご}する土地である。また、その環境の苛酷^{かこく}さにより、フェルメリアでは種族間での交配が当たり前の様に行われ、【混血の国】とも呼ばれるようになっていく。

フェルメリアがフェルメリアになる前、この地に住まう者達に、安息のときはなかった。魔物の脅威に怯えながら、人々は手を取り合って生きていた。ヒトの国から迫害されてきた者が多かったから、彼等には、フェルメリア以外、行くあても帰る場所もなかったのだ。そして、現れたのがフェルメリアの初代国王。彼は、国旗の紋章の題材ともなっている、皇帝竜。皇帝竜は、金と銀のつがいの竜だった。その力を借りながら、人々に仇をなす魔物の討伐を行い、フェルメリアを建国したのである。

そして、彼の行った今にも続く偉業の一つが、王都の建設。王が在る限り、決して魔物を侵入させることのない難攻不落の都。たとえば所だけであれど、何の憂いもなく日々を過ごせる場所があることは、過酷なフェルメリアに生きる民にとって悲願ともいうべきものだった。

そして、初代王の後、王都の守りは彼の後継者へと継がれていく。ここで付け加える点は、歴代のフェルメリアの王は、全て初代王の血を引くとされているが、この王位が必ずしも王の子に引き継がれることはないということだ。

それは、フェルメリア特有の、王の選定方法が原因になっている。フェルメリアでの、王になるための資格は二つ。それは、初代王の血を引くことと、【双竜の指輪】という王の証の所有者であることだ。【双竜の指輪】とは、皇帝竜の牙と鱗から作られた指輪で、王の選定に深くかわる魔法具である。【双竜の指輪】は二つで一つ。ちよūd、つがいであった竜皇と竜帝のように。これは、王とその伴侶に、代々受け継がれてきた物であった。そして、王を選定するのが、この【双竜の指輪】。王で在らざる者には、決してはめることができない指輪だ。実質、【双竜の指輪】を手にすることができれば、王になるに等しい。けれど、この指輪に選ばれたから王になれるのではなく、王たる故に選ばれるのである。

さて、フェルメリアの王とその伴侶には、ほとんど公になることのない、しかし重要で、あまりに重い役目が存在する。

それが、王都を守護し続ける、結界の人柱。王都周辺に張られた結界は、建設された当初から魔物の脅威を阻み続けている。そしてそれは、王の存在を糧として組まれたものであった。

神に見捨てられた地で、それでも人々の平穏を保つには、それ相応の対価が要求された。

王は、王都の守護神であると同時に、王都に展開された結界の、最も重要な部品でもあるのだ。それ故に、王は、王となったときから、

王都から一步たりとも出ることが叶わなくなる。王都を離れると、結界の柱がなくなるからというのが、理由の一つ。そして、王は、王都以外で生きられなくなるからという理由が存在した。王座を継承するその時に、王は結界を支える呪式に自動的に組みこまれるのだ。その呪式は、それに組み込まれた者がそれから逃れようとする、その者が自壊していくという、呪詛じゆその如き副作用を持っていた。ちなみに、ここでの逃れるという行為は、王都から出ることを意味する。実際に、玉座を放棄しようとしたある王が王都を離れた際、結局、彼は一日も経たずに死に至ったという。その遺体は、完膚かんぷなきまで破壊しつくされ、見るも無残な有様ありさまであつたということだ。また、死を以てその任から逃れようとすれば、結界の人柱の役目は、次の王が決まるまでの間は王の伴侶に移る。だから、歴代の王達は、逃げることも許されなかつたのだ。一体誰が望もうか、愛する者が、自分の代わりに犠牲ぎせいになることを。歴代のフェルメリアの王にとって王都とは、実は巨大な牢獄ろうごくにも等しい場所であつた。

しかし、そのことを知るものは酷く少ない。民は知らない。知らされていない。それは、王とその伴侶が知っていれば十分なことだから。

王の犠牲と孤独の上に、希有けうなこの国は成り立っている。

アシュが、全く意図しないながらも、【双竜の指輪】を手に入れたと知ったとき、ジルバは運命の皮肉わらに嗤わらった。

己おのれの父母が一端を担う呪いを、よりもよって、親友が継ぐことになつたから。

何を思つて、両親が初代国王に手を貸したのかは、ジルバは知らない。その時、彼は双子の片割れと共に、生まれて間もない雛ひなだつたから。皇帝竜は、王都建設の折おりに王と共に結界の礎いしづえとなり、今はもつけない。全てを見てきた竜公達じやうこうだ　初代国王に手を貸した竜は、皇帝竜だけではなかつた　は、沈黙を保つたままだ。

ジルバには、親友を解放することは叶わなかった。

何より、それをアシュは選んでしまったので。

親友の重責を減らすことは叶わないけれど、それでも何かがしたくて、ジルバはアシュの元を訪れる。自分の本性を知ってもなお、竜としてのジルバの力を借りようとしないう、アシュの姿が嬉しく、歯痒い。何でもできる力を持ちながら、何もすることを許されないのは、酷く辛いと初めて知った。

ジルバは、杯の中の酒を舐めた。

彼には嗜好品という物の良さは分らない。けれど、友と一緒にそれを楽しむことは、素直に面白いと思えたし、好きだった。

アシュの方を見ると、さも旨そうに杯の中のもの飲んでる。公では決して見せないだろう姿に、何となく笑えた。

「？ 何笑ってるんだ？」

怪訝な顔をする友人に、ジルバは笑い返す。

「いや、お前がアナに告白するしないで大騒ぎしてたのを思い出したら、笑えてきてな」

「忘れてくれ……」

かつて、現在の妻であるアナに一目惚れしたアシュは、ジルバに泣きついたことがあるのだ。アナを想うあまりに、アシュは頓珍漢な事をしでかし、ジルバを呆れさせたり、大笑いさせたりしたものだ。ひとえに、彼にそれ以前の恋愛経験が皆無だった故の失態である。

「そう言えば、東方の国で面白いもん見たんだよな」

「どんなやつだ？」

「どこだっけな、確か海沿いの」

他愛もない会話を肴に、二人だけの宴は続く。

銀の月が世界を見降ろす中、夜は静かに更けていった。

つがいの双竜：『月陰の竜帝』（前書き）

奥さん視点です。

つがいの双竜：『月陰の竜帝』

彼が、それでも彼女に手を伸ばしてくれたとき、今まで奇妙に色褪せていた世界が、急に鮮やかに見えた。彼女は忘れない。その時の彼の瞳の色を。自分の青とは決定的に異なった、全てを包み込むような、穏やかな空の蒼を。

空は、どこまでも高く澄んでいた。残酷なまでに晴れ渡った空は、いつそ何かの皮肉かと思えてしまう。

『ひま』

「ティーア、もう少し我慢してくれ」

空を仰いでも、現実是不変ならない。アナは溜息をついた。

「馬鹿か」

「馬鹿っていうより、大馬鹿だね」

茶々を入れるティーアに、アナは一睨みをくれってやったが、ティーアは笑うだけでビクともしない。

王の伴侶であるアナは、魔物の討伐のためにフェルメリア東部の町に赴いていた。ティーアはというと、彼女は王の親友の双子の片割れ 要するにただの知り合い であるが、単にアナが来たと聞いて遊びに來ただけである。彼女は国に庇護される必要がなく、国に対する義務もまたない存在だからか、何ともお気楽だ。魔物討伐に関する全権を負うアナからすれば、腹立たしい反面、少し羨ましくもある。元は一般庶民であったアナにとって、その手にある権力は、ただ煩わしいばかりなのだ。

この国、フェルメリアでは、他国では見られない奇妙な制度が存在する。それは、王とその伴侶に等しく権力が分けられるという

ことだ。他国の常識に則^{のっと}って考えれば、これでは、当然ながら王と伴侶の間で権力闘争が起きかねないだろう。しかしながら、王が王都から一步も出られないという、特殊な事情があるフェルメリアでは、こちらの方が都合の良いことの方が多い。

例えば、今のように地方の軍では手に負えない魔物が出現した時がそうだ。魔物の討伐のための指揮、魔物被害からの復興支援、その他諸々^{もろもろ}。いちいち王都から指示を出すよりも、その場に最高責任者がいた方が、遙^{はる}かに効率が良いということがある。

アナ達がいる町の近くには、高位の魔物の巢窟^{そうくつ}である魔の森が存在していた。

しかしながら、今回アナが討伐するべきであるのは魔の森の魔物ではない。どこぞの馬鹿な魔道士が作り出した、合成獣^{キメラ}である。

ただの合成獣だったら、あるいはそれ単品であつたら、アナは近衛^{このえ}隊を引き連れて辺境などに来る必要はなかった。それが何とも厄介なことに、その合成獣は魔物を呼び、それを使役^{しえき}するのだ。無論^{むろん}、

低位から中位の魔物をつなぎ合わせた合成獣では、最上位と目される魔物を操^さることはできないようだ。だが、近衛隊と比べるとどうしても錬度^{れんと}が足りない地方の軍にとっては、合成獣に使役される大量の魔物は手に余る。いや、何とかしようと思えばできるかもしれないが、その対価が軍の全滅では全く以て割にあわないだろう。

ちなみに、はた迷惑な合成獣を作りだした当人は、被創造者が呼び出した魔物に食われたらしい。結局、一体何がしたかったのかは、不明である。残ったのは、迷惑この上ない異形^{いせい}だけだ。

幸いにも今はまだ町に被害は出ていないが、斥候^{しせう}の報告では、合成獣御一行はこちらの方へと向かってきているらしい。あまり、猶予^{ゆうよ}はない。

「起きたものは仕方がないんだがな」

アナは、左手の指輪を見ながら呟^{つぶや}いた。それは、竜を模^もした銀色の指輪だった。彼女にとって、その責の象徴というべきもの。

そして、アナは顔をあげる。空よりも透明で、海よりも深い、不思議

議な青さを湛^{たた}えたその眼に、強い光を宿して。

「さて、新兵達の訓練といこうか」

不敵^{ふてき}な笑みは、彼女によく似合っていた。

「アナって、人使い荒いつて言われない？」

「さあ。ここにいてもらうだけで、そう言われるのは心外だな」

アナとティアーアは、町の外れの丘に来ていた。そこからは、魔の森と魔物の大群が見渡^{みわた}せた。

ティアーアは不満げに尾で地を叩く。固^{はす}い筈の地面は、ティアーアが行為であつさり抉^{えく}れた。ティアーアは、本来の姿に戻っているの、気を付けなければすぐに物を壊してしまう。だから、それが嫌でもあるので、普段彼女は人型になっている。

見上げるような巨体^{きょたい}。黄金^{おうごん}に輝^ひく鱗^{うろこ}。硬質^{こうしつ}な金の色彩を宿す瞳は、瞳孔が縦に割れている。鋭^{とが}く尖^{とが}った牙と爪^{つめ}。それは、その姿の印象にも当てはまる。鳥類とは異なる背の翼は、天^{てん}を駆^かける力強さを有している。

すなわち、竜。

ティアーアは、最強の魔獣と呼ばれる種族に属していた。

ところで、魔物と魔獣は別物だ。とはいっても、あくまで人の観点からではあるが。積極的に人を害するものを魔物、そうでないものを魔獣と呼ぶ。

ティアーアは、その中でも特に力を持つ、真竜だった。竜には、眷属が多く存在しており、その眷属をさして竜と呼ぶことも多い。よって、本来の意味での竜と竜の眷属とを区別するために、真竜という言葉が使われている。

それ故、今回ティアーアは、アナから魔物除けの役割を仰せつかっているのである。竜が近くにいるとなると、流石^{さすが}に魔物も町には寄つてこないだろう。なぜなら、魔物にも生物の本能というものがあり、そうそう自分より格上の存在に挑むということはないからだ。

『ま、これぐらいならいいんだけどね。　アシユにはすつごい借りがあるし』

ティーアは器用にも、竜態のまま肩をすくめた。アシユとは、この国の王、アナの夫のことである。

正直なところ、不思議でもある。双子の片割れの狂気を、大して力のない人間が止めることができるのが。それとも、それが妥当であるのか。人間の娘を愛するあまり、狂いかけている竜を、同じ人間が止めるのは。これに関しては、ティーアは片割れに対して何もできない。ティーアよりも長い年月を生き、多くの知識を蓄えてきた筈の、他の竜達にもできることはなかった。何かできるのは、アシユだけだ。

ティーアはお人好しではないので、積極的に人に手を貸したいと思ったことはない。けれど、この借りに免じて、今代の王とその伴侶だけは、何かあつたら手助けしてもいいと思っている。

ティーアがアナに目を転じると、王の伴侶は、遠くで行われる戦闘を静かな目で眺めていた。近衛隊と魔物たちの戦闘は、近衛隊の有利に進んでいる。このままいけば、遠からず合成獣を討ち取ることができるだろう。

と、周囲から離れたところで佇んでいるアナとティーアの元に、駆け寄る者がいた。

「アナ様、町の守りが整いました」

「遅い」

申し訳ございません、と頭を下げる近衛隊の隊員を、ティーアは物珍しげに見る。

『わー、珍しい。　毒の加護持ち？』

「大して使えないけどな」

はしゃいだ声を出すティーアを、アナが切つて捨てた。

加護持ちとは、この世の森羅万象に宿ると言われる精霊の寵愛を受け、その力を借りることができる者のことである。アナもまた、水の精霊の加護を受けている。火、水、土、風、光、闇の精霊は、世

界を構成する主要な存在であるため、それらの加護持ちの割合は多くなるが、そうではない精霊の加護持ちは、一般的に少ない傾向にある。

「ルウと申します。光の君」

そう言っていると、その近衛は艶やかに笑んだ。見る者を惹き寄せずにはいられない、蠱惑を孕んだ微笑。それはあたかも美しい毒花のようだ。その先にある破滅を予感させて尚、手を伸ばさずにはいられない。

「……男の癖に、無駄に色気を出すな」
アナが呆れたように言った。

そう、ルウは男だった。しかし、毒の精霊の加護の影響が、容姿端麗の上に妙に色つばいたため、老若男女問わず他者を惑わしてしまう。もし彼が女だったら、余裕で国を墮落させただろうと言われる程である。だからアナやティーアのように、彼を見て尚平然としてられる者は希少だ。ちなみに、町の守りの完了が遅れた理由の九割方は、彼のせいである（多くの者がルウに見惚れていた）。また、加護持ちである故に、ルウの戦闘能力は、近衛隊の中でもそれなりに高い。しかし、その属性が毒ということで、いろいろな意味で周囲に及ぼす影響が大き過ぎ、なかなか扱いづらい人材であった。

アナの言葉に落ち込んだのか、ルウはその紫の瞳に憂いを滲ませる。速やかなる永久の眠りに誘う妖花の様に毒々しくも、夜明け前の空の様に清々しくも見える、紫。それに密やかな翳が落ちる様は、人の心を酷く掻き乱す。

『うーん、ちょっとこれはうざいかも。ほんとに無駄なくらい色つばいわね』

ティーアは妙な事に感心している。ルウの陰を含んだ魅力も、最強の魔獣の前には効果がないらしい。

《姉御、まずいよ！なんか魔物がそっちの方に行っちゃった！》

突然、焦りを多分に含んだ声が響いた。魔物との戦闘に同行させた

連絡係が、風にその声を乗せたらしい。

「なんだと!？」

驚いたアナが見ると、確かに、近衛隊と戦闘を行っていた筈の魔物の大群が、真っ直ぐに町の方へと迫ってくる。

「一体何故でしょうか？」

困惑するルウの姿は、あくまでも色気がある。

『犯人はお前だ!!!』

ビシッとティーアがルウを指差した。

彼らがいたのは風上。ルウから漂う香りが、魔物達まで届く場所だった。そこに最大級の天敵がいようと、抗うことのできぬ魅惑の芳香に引き寄せられて、魔物達は群がる。……ルウが有する魅了の魔力は、魔物にも有効であつたらしい。

「連れてくるんじゃないかつた……」

疲れたように、アナは呟いた。

「責任を以て、殲滅致します」

「止める、ど阿呆!!」

きりりと顔を引き締めたルウに、アナは怒鳴る。

ルウに加護を与えたのは、毒の精霊。彼は、そこに在る生命を侵し、大地を腐らし、空気までも汚すことができる。町のすぐ近くを、不毛の地どころか、踏み入れた者の命すら奪う魔境にされては堪ったものではない。

『あたしに頼まないでね。町を巻き込まない自信がないから』

「当たり前だ……」

ティーアは巨大な力を持つが、細かな操作は苦手だ。倒すべき魔物達はおるか、守るべき町まで消し飛ばしてしまったら、本末転倒である。

「私がやる」

有無を言わせぬ声。それは、王たる者の言葉。

アナは前に歩を進めた。銀系の如きその髪が、風を受けて翻る。

アナは一瞬、瞼を伏せた。胸中に湧き上がった迷いも感傷も、全て

捨て去る。必要とするのは、覚悟のみ。

そして。

歌声が、その場を支配した。

決して上手いとは言えないが、ただただ透明な歌。アナの魂に刻まれた、言葉無き讃歌。それは、世界に沁みわたり、姿なき者達の心を震わす。

異変は、すぐに表れた。

魔物達の姿が、削れていく。少しずつ、塵と化していく。あたかも、それらが初めから、砂で作られていたかのように。嘗て魔物の一部であったものは、風に紛れ、何処かへ去っていく。

「『王の愛し子』……」

ルウの赤い唇から零れ落ちた言葉には、紛れもない畏怖が込められていた。

精霊の加護を持ち、その力を借りられる者のことを、加護持ちとい、その中でも、特に精霊に愛された者を、『精霊の愛し子』と呼ぶ。『精霊の愛し子』は、精霊から多大なる守護と力を授けられるルウやアナがこれにあたり、その証はその稀有な瞳の色に表れている。

その中でも、アナは特異な存在だった。通常、『精霊の愛し子』といえど、生きとし生けるものに宿る精霊には、干渉することができない。生き物に宿る精霊は、その魂と密接に繋がっているために、引き離すことは不可能に近い。しかし、アナにはそれができた。それは最早、精霊の助力を得るという問題ではなく、精霊を隷属させているにも等しい。

魔物達が塵と化していくのは、アナが魔物達の身体から水の精霊を奪っているからだ。其の魔が歌に抗することができるものは、ごく一握り。残念ながら、稀な特例は、魔物の達の中に存在していない。人の身に余りに過ぎた、精霊の寵愛。故に、アナは『精霊の愛し子』ではなく、こう呼ばれることがある。

『王の愛し子』と。

異界に存在するという精霊達の王から、直に祝福を受けし者。

また口さがない者達は、彼女をこう呼ぶ。

『神の忌み子』と。

アナの尖った耳と小麦色の肌は、光と闇、相反する性を持つ妖精族同士の狭間に在る者の証。すでに混血の者が大半であるフェルメリアには珍しく、彼女は、生粋のエルフト、生粋のダークエルフトの間に生まれた。エルフトに加護を与える光の神にも、ダークエルフトに加護を与える闇の神にも見捨てられたから、彼女を憐れんだ水の精霊の王が寵を与えたのだと、愚か者達は言う。けれど、真実は誰も知らないのだ。

そして、過ぎたる祝福は呪詛と変わりがない。大き過ぎる力は、アナに孤独を招いた。

初めて、何の打算もなく恐れもなく、差し出された手は、後に生涯の伴侶となる男のものだった。その手を取ったその時から、彼が、彼女の、世界の全て。男が王に選ばれてしまった時、彼は彼女の手を離そうとした。その重責を、彼女まで背負う必要はないからと。それでも、彼女はその手を離さなかった。自由は、必要ない。国なんて、いらぬ。彼が、欲しかった。彼がいぬ世界など、彼女には、何の意味も成さないから。

愛する男が負うものを、ほんの少しでも減らせるなら、どんな力であっても、いくらでも振るおう。彼を害そうとするものがいるならば、全て屠ってしまうおう。彼がいなくなることが、何よりも、恐ろしい。誰に忌み嫌われようと、構わない。彼に、愛されていられるならば。

恐ろしくも、無垢なる響きを持つ歌が終わった時、魔物の大群は姿を消していた。あとには、近衛隊の面々が、立ち尽くすのみ。皮肉に思えるほど青く澄んだ空は、アナに夫の瞳の色を連想させた。アシュに会いたい、と無性に思った。

つがいの双竜：『月陰の竜帝』（後書き）

ルウさんは傾国級の超絶美形なので、美醜に疎いフェルメリアの民に対しても破壊力抜群の顔をしています。

つがいの双竜…『つがいの双竜』（前書き）

『つがいの双竜』はこれで終わりです。

つがいの双竜：『つがいの双竜』

そこは、フェルメリアの王都の中心、それを守護する結界の、もう一つの要。皇帝竜と、歴代の王達が眠る場所。そこには、王とその伴侶以外、立ち入ることは、許されない。

ゆるゆると日が沈んでいく、黄昏時^{たそがれどき}。その光は、あらゆる場所を紅^{あか}く染める。

「

っ！！」

愛する者と呼ぶ筈だった声は、なにも意味を成さない絶叫となった。夕焼け色に染まった床を、飛び散った液体がさらに赤く染める。

願ったことは一つだけ。遠い日の約束の履行^{りゅうこう}。また、二人で見に行こうと。年に一度だけ、野原に現れる大海を。その後すぐに王の選定が行われ幻^{まほう}となってしまうた、他愛もない願い。

抱きしめた時にはもう、最愛の人は事切れていた。

なぜ^{なぜ}何故。

王は、死んでも王都から出られない。

何故。

時折、叶う筈のない約束を口にして、王は寂しげ^{さび}に微笑んだ。

何故。

また、見せたかった。永久^{とわ}を誓い合った光景を。

何故。

例え、王都に住む民全てが、引き換えだったとしても構わなかった。

何故。

もう、充分守り続けたじゃないか。

何故。

これ以上、人柱でいてほしくなかった。

何故。

そもそも、彼女が王でなければならなかったのか。

何故何故何故なぜなぜなぜナゼナゼナゼナゼ

。

ずぶり、と身体が沈むのを感じた。自分も、愛する人も、沈んでいく。結界を破壊しようとした対価は、愛した者の喪失そうしつでもなお足りぬ。死んでも、王都からは逃れられない。

男の中で、何かが切れた。

「消えてしまえ！！こんな国など！！全て、滅んでしまえ

！！」

男が消え去るまで、血の如く紅い空間に、呪詛が響き渡っていた。

それでも、守りたいものが、あつたんじやないか？

「アシュ！！」

妻の声で、覚醒かくせいした。

自分に抱きついて来る彼女の細さを、その腕で感じる。相変わらず不思議な青さを湛えているその双眸そうぼうが、不安げに揺れている。彼女を心配させてしまったことに、酷く罪悪感を覚えた。

「大丈夫。王都の記憶に共鳴しただけだから」

安心させようと無理に微笑を浮かべ、まだほんの僅わずか、あどけなさを残す頬ほおを撫なでる。常に彼女がそうであるとする姿とは裏腹の、か細い身体を強く抱きしめた。

【神に見捨てられた地】と称される国、フェルメリア。ともすれば地獄じごくにも等しい環境の中、長年の淘汰とうたの果てに、いつしか異能いのつと呼ばれる力を有する者が生まれるようになった。神無き土地で、

それでも生きようとしたからなのか。異能とは、魔法と似て非なるもの。異能は能力だが、魔法は技術だ。異能者は生まれ持った固有の力しか用いることはできないが、時に高位の魔物すら圧倒する。しかし、祝福も呪詛も、ある意味では表裏一体だ。異能の中には、人を守護するものもあれば、人を蝕むしばみかねないものも存在した。

アシュが持つのは、記憶を覗のぞく力。人の記憶。町の記憶。大地の記

憶。この世に在るものは、存在した時間の数だけその記憶を持つ。喜劇も、悲劇も。幸福も、絶望も。世界の記憶は、あらゆるものを内包する。それを、知ることができるのだ。また、より強烈な記憶になるほど、アシュには、より見やすくなる。ほんの少しであつても、森羅万象の記憶を垣間かいま見ることができるのは、果たして幸いなのか。力に助けられ、力に苦しんできたから、アシュは余計に分からない。

先程見たのは、今なお王都に残るもの。先代の国王夫妻が儂はかなくなつたときの記憶。忘れ去られることを拒んだ、強すぎる想い。

伴侶が人柱であり続けなければいけないことを憂いた男は、愛する人を解放するために、王都の結界を壊そうとした。だが、結界の損害は王の呪詛を通じて彼女に跳ね返り、結果、男は間接的であれど、守りたかつた人を殺す事になった。

ただ愚直ぐちよくに、約束を果たそうとした男の、喜劇にも似た悲劇。救おうとした者とされた者、結局はどちらも救われなかった、滑稽こっけいな御話。

一番初めに、守りたいものは何だつたのか。忘れたことすら、忘れられた願いは。

誰にとつても救いのない終わりを回避するために、あつたろう鍵に、アシュは思いをはせる。

嘗ての王が持たなかつたもの。今の王が持っているもの。

思つたことは酷く単純だ。自分が知る人々が、また来る明日を信じられればいい、安らかな眠りを約束されていればいいと。そんな利己的な願いが、フェルメリアの民の全ての幸いになれば素敵だと、アシュは王になることの覚悟を決めた。

思い浮かぶのは、一人の少女の面影。自分と同じ色を宿した眼差し。ただ一人の妹と、会うことが絶えて久しい。遙かな時を超えて受け継いだその血を、妹の重荷にする必要はないと、アシュは、王となつてからは極力彼女との交流を断っていた。なぜなら、フェルメリアのことをよく理解していない他国は、王の妹であるという事実だ

けで、実際にはなんの力もない少女にある筈のない利用価値を見出しかねないのだ。信頼できる者に託しているから、妹の身の安全はある程度保障されていると言って良いものの、それでも危険は少ないに越したことはない。

淋しい思いをさせる代わりに、せめて妹には平穏な生活を。アシユには、もう当たり前の幸せなど願える筈もないから、血を分けた妹にその祈りを託す。

守らなければいけないから守るのではなく、守りたいから守れることに感謝する。自分の行うことを義務にしまったら、きつと、先代と同じ道を歩んでしまっただろうから。

「……アシユ、勝手にどこかに行くなよ」

「行かないよ」

まだ不安を隠せないらしいアナの声に、笑って答える。彼女の髪を梳くと、淡い銀色のそれは、あっさりと手から零れ落ちていく。

互いに交わす口付けは、祈りの様。

離れてしまわないようにと、強く抱きしめた。

再びのまどろみに落ちようとした刹那、ふと見た窓の向こうには、黎明の空が広がっていた。

つがいの双竜：『つがいの双竜』（後書き）

「アルくんのおはなし」の章の「妖精を捕獲せよ!!」を読むと、あ〜ってなると思います。

炎竜姫と傭兵の攻防 その1（前書き）

以前部誌に投稿した作品です。
ラブコメ系の話。

炎竜姫と傭兵の攻防 その1

「結婚することにしたから、戸籍作って」

「元のところに戻してこいよ」

橙色の髪とうじきの女と黒髪くろかみの青年との間で交わされる、どこかちぐはぐな会話。

「他に言うことはないのかっ!」

縄でぐるぐる巻きにされたうえに、隣の女にがっちりと抱きしめられている男は、そう叫んだ。

軋きしんだ音を立てて、彼の横を馬車きしが通り過ぎる。ジャワードは、馬車に積まれている檻おりの奥の瞳と目があつた。鎖に繋がれた子供の、虚うつろろな双眸そくほう。それは、彼の胸の底に漣さざなみを立てた。ただの虚うつろと化した眼まなこから、ジャワードは目を逸らす。何も感じてはいけない。何かを感じたら、仕事にならなくなるどころか、己の身を危険に晒さらしかねないから。

一陣の風が吹き、ジャワードの頭に巻いた布を揺らした。巻かれた布は、彼の髪を隠すための物。砂漠の民の血を示すジャワードの黒い髪も、褐色の肌も、彼が今いる場所では異質でしかなかった。

ジャワードは、商品達を運んでいく馬車を黙って見つめる。

そこでは、秘密裏に人身売買が行われようとしていた。傭兵であるジャワードは、その会場の警護のために雇われていたのだった。こんな仕事よりも、遥かに安全で、儲かる仕事は確かにある。けれども、異国の民の血を引くジャワードには、排他的なこの国で合法的な仕事に就くことは、土台無理な話であった。

運ばれていく商品達は、人であり、ヒトでなかった。尖った耳、肌を覆う毛皮、鋭く発達した爪　ヒトに似た形をとりながらも、

彼等にはそれらの様な確実な差異が存在していた。世界に蔓延^{はつ}るヒト 人族より、数が少ない異種族達である。

現在、どの国であっても、奴隷^{どれい}制度は廃止され、人身売買は禁止されている。それでも、ジャワードが今いる場が存在しているのは、一部の人間の傲慢^{ごうまん}のためだ。即ち、ヒトではない異種族を、人間と同じく扱う必要はない、という。また、ある種の権力者にとって、異種族を愛玩^{あいがん}することは、ステータスの一つになっているのである。大概、需要がある限り、供給の場が消滅することは、無い。ジャワードが無意識に吐き出した溜息^{なげ息}を掻^かき消す様に、競売の始まりを告げる鐘が鳴り響いた。

炎竜姫と傭兵の攻防 その2（前書き）

この話はビミョウに男女の立場逆じゃね？という場面があります。

炎竜姫と傭兵の攻防 その2

競売の目玉商品は、酷く美しかった。

背を覆う、黄昏たそがれの光に似た色の髪。赤褐色の肌は、ジャワードに、夕日に染まる故郷の乾いた大地を思い出させた。滑らかな肌を所々覆っているのは、紅玉に似た鱗。均整のとれた身体は、豊かな曲線を描いていた。そしてなにより、その紅蓮の双眸そくほうは、鎖に戒められようと屈せぬ孤高の威を宿して、辺りを睥睨へいげいしているのであった。この異種族の女は他の商品と違い、絶望に俯うつむくのもなく、悲嘆に泣き喚くのもなく、ただ前を見据えて立っていた。

ジャワードはこのとき、会場の片隅で警護をしていた。そして、異種族の女の様子を見ることもなしに見ていた。ジャワードと女を隔てる距離は、それなりに開いている。しかし、視線に気付いたのだろうか。女が、ジャワードの方に顔を向けたのだ。

女と目が合った、気がした。

ジャワードは、虚を突かれた。それは、会場の中にいる他の人間達にしても同じこと。

女は、笑った。奴隷という、暗い未来しかない筈はずの立場で。無二の僥倖じやうじやうに巡り合えたと、言わんばかりに。美しく、幸せそうに。

引き千切られた、金属の音。

会場の人達達の、驚愕と怯えの声。

それらを認識する暇もなく、ジャワードは、衝撃に押し倒された。

混乱するジャワードの目に映ったのは、何処どこか焰ほむを連想させる、黄昏色。

「見つけた」

耳元に掛ったのは、女の歓喜の声とその吐息。触れてきた感触は、恐ろしいほど柔らかかった。

口の中に広がる、血の味。それは、唐突で、強引な口付けの味でもあった。初めて会った筈の異種族の女の行動に、ジャワードは瞠目どうもく

した。

唇に、痛みが走る。ジャワードは、女に唇の皮を軽く噛み切られたのだ。ジャワードの唇に滲んだ血を、女は丁寧に舐めとった。

ジャワードにとって、理解できない一連の女の行動。しかし、女にとっては、なによりも重要な行為であった。

ジャワードは、抱きついてきた女を振り払うことはできなかった。

それは、驚きのあまり体が動かないというものではなく、単純な種族間での差異によるもの。異種族の中には、人間より優れた身体能力を有する者達がいる。この女はまさしくそのような者達に当たり、今までさしたる問題もなく商品達を拘束し続けた鎖を容易く引き千切った彼女の腕力は、ジャワードより遥かに強かったのである。

「！ 離せっ！」

ジャワードが女の腕の中でもがいたのは、他の警備員が女に斬りかかってきたのを見たからだだった。このままでは、ジャワードも巻き添えになりかねない。

ジャワードの首筋に幸せそうに顔を埋めていた女は、不快気に眉を寄せた。

警備員の剣が、二人に向かって振り落とされた瞬間、ジャワードの視界が紅く染まる。

絶叫。

それは、警備員のもの。彼は握っていた剣ごと、女に腕を斬り落とされたのだ。

のたうちまわる警備員を、女は冷やかに見ていた。無手だった筈の彼女の手には、警備員の腕を切り落とした剣が握られていた。その剣は、女に合わせたかのように紅かった。まるで、炎を封じ込めたかのような深紅の刀身。その長さも剣の型も、ジャワードが佩いている様なこの国の一般的な長剣と大差ない。ただ、その刀身に施された複雑かつ繊細な装飾のせいだろうか、何処か華奢な印象を抱かせる剣だった。ジャワードは、女の手の甲に剣の装飾の一部とそっくり同じ紋章が刻まれていることに気付いた。

周囲のざわめきなど知らぬ様に、女は平然として、唇に指を当てた。高く長い、指笛の音。

それが合図だったのだろう。応えるように、辺りに低い咆哮が轟いた。ジャワードがよく聞く獣のものは、明らかに違う鳴き声。鳥類には在りえぬ、力強い羽音が聞こえた。

舞い降りた巨体。その重みのせい、着地の際には地面に衝撃が走った。赤茶けた煉瓦色の鱗。蝙蝠に似た翼。逞しい身体。口元からは、灼熱の吐息が零れる。ファイヤードレイク。この世界の生態系の頂点を占める、竜の眷属の一種である。世間一般で竜と認識されている真竜より力が劣る亜竜であるが、それでも下手な魔物よりはよっぽど手強い存在だ。そして、基本的に誇り高い亜竜を手名付けることは、困難を極める。何故なら、彼等は己より力ある者にしか従うことはないからだ。

まるで当然の様にファイヤードレイクを従えている女に、ジャワードは驚いた。

「は？」

突如視界が高くなり、ジャワードは間の抜けた声を漏らした。女が、ジャワードを担ぎあげたのである。ジャワードは、女に担がれるのは男としてどうなのだろうかと思ったが、今はそれどころではない。

「ちょ、まっ！　こら、離せっ！！」

ジャワードは暴れるも、哀しいかな、彼を担いだ女には全く効果が無かった。そして女は、ジャワードを担いだまま、呼び出したファイヤードレイクの背に乗り込む。

「ヴアルド」

女の短い呼び掛けに、ファイヤードレイクは咆哮を以て応えた。その翼が大きく広がり、空を掴む。

その場にいた者達は、呆気にとられて飛び去る亜竜の影を見送った。その後、さらなる混乱がそこで巻き起こったのは、また別の話であ

炎竜姫と傭兵の攻防 その3（前書き）

この話では、人の常識における男女の立場が思いっきり逆転している描写があります。

炎竜姫と傭兵の攻防 その3

「おいっ！ 止めろよっ！！」

「いや」

「だから止めろっ！ 何してんだっ！！」

現在、ジャワードは、初対面の女に襲われるという、人生初・何とも有り難くない体験の真っ最中であつた。ちなみに、ジャワードの上着は女に剥ぎ取られてしまったが、下肢の衣類は死守している。最後の砦を失つたら、いろいろな意味で逃げられなくなりそうな予感をひしひしと感じているので。

ファイヤードレイクにより女に連れ去られて後、しばらくしてジャワードは地上に降りることができた。慣れない空の旅から解放され、清浄な森の匂いにほっとしたの束の間、ジャワードは女に再び押し倒されたのである。ジャワードとて男であるので、そういう欲が無いことはない。が、しかし、下着姿になったにもかかわらず、色気が欠片も感じられないどころか、獲物を前にした肉食獣の様な雰囲気纏まとっている女を相手にするのは、正直勘弁してほしかった。

圧倒的な力の差にも屈せず（火事場の馬鹿力のため）、頑固に抵抗するジャワードに、女は幾分悲しげに言う。

「なんで駄目なの？」

「こういうことは、好きな相手とするもんだらうが！」

今まで散々商売女と遊んでおきながら言う台詞せりふではないが、このとき、ジャワードは少しでも時間を稼とごうと必死だった。

「ならあたし等、伴侶だから問題ないでしょ」

「俺達初対面じゃないのか？！」

何時いつからそうなったんだと喚くジャワードを見て、女は不満気に頬を膨らませた。

「血を交かわしたでしょう」

その言葉にジャワードは、初めて出会った時の、女の奇妙な行動を

思い出した。あの行為の意味は？

「……血を、交わしたら、伴侶になるのか？」

「違う。伴侶だから血を交わすの」

恐る恐るしたジャワードの問いに、女は怒ったように答える。

女の言葉が理解できず、ジャワードは天を仰いだ。焦るな、相

互理解は、まずきちんと話を聞くことからだ。

そして女の話聞いたジャワードは、頭が痛くなったのだった。

女の話 요약すると、次のようになる。

一、女の名はハマラといい、彼女は竜の眷属である竜人の血を引いている。

二、ハマラは、多民族国家であるフェルメリアという国の軍人で、彼女が他国の奴隷市場にいたのは、人身売買を取り締まるための囚^{さむらい}になつていたからである。（あの奴隷市場では、フェルメリアから攫^{さら}われてきた者達も、取引されようとしていたらしい。）

三、力ある真竜、ひいては竜の眷属にとつての伴侶の定義は、唯一無二、絶対の、生涯共に在る異性、らしい。ちなみに伴侶は、同族であろうが他種族であろうが、全く関係ないようだ。

四、竜達がどうやって伴侶を定めるかというところ、会えば分かるこのこと。伴侶と巡り合つて、すぐにそれと分かる場合もあるし、出会った当初は気付かずとも、何れ^{いずれ}必ず知るらしい。

五、互いの血を飲み交わすことは、竜族が《血の誓約》と呼ぶ行為であり、己の伴侶以外とは決して行うことはない。従つて、伴侶以外の者が、竜族の血を口にした時、相手に殺されても文句は言えないのである。

六、（これが一番重要）ジャワードはハマラの伴侶なので、《血の誓約》を（ジャワードに無断で）行つたし、（ハマラの中では）ジャワードを押し倒すことも問題ないらしい。ところで、ハマラは一目見て、ジャワードが伴侶だと分かつたとのこと。（それは一目惚^{ひとめぼ}れというのではないだろうか？）

「だからやろう」

「ちよつと待てー!!」

迫るハマラを、ジャワードは何とか押し戻す。

「お前の一族はそうじゃないんだろ?が、人族だといろいろな段階があるんだぞ」

「面倒」

「面倒言うな!」

ハマラには、どうにも言葉が通じない。ジャワードは脱力したかったが、腰紐に伸びてくるハマラの手のせいで、うっかり気を抜くこともできないのだ。

「とにかく、ほとんど初対面の未婚の男女は、こんなことしないんだ」

我ながら何を言っているんだと、情けなく思いながらも、ハマラの魔手から逃れたい一心で、ジャワードはそう断言した。

ハマラは真面目に頷いた。

「分かった」

「そうか」

ジャワードがほつとしたのも束の間。

「結婚してれば問題ないのね」

「なんでそうなるっ!!」

ハマラとジャワードとの擦れ違いは、まだ続くようだった。

その後、結婚するためにフェルメリアに行こうと言い出したハマラから逃れようと、ジャワードは逃走を図った。が、必死の抵抗も空しく、ジャワードはあえなくハマラに捕獲されてしまった。『ジャワード』という名は、駿馬しゅまの意を有してるものだったが、如何いかな駿馬といえど、相手が竜では分が悪かったようである。

炎竜姫と傭兵の攻防 その4（前書き）

今回はちょっと短めです。

炎竜姫と傭兵の攻防 その4

「　　ったく、ハマラの奴何処どこに行つてんだよ」

そうばやきつつ、クライドロは、書類を片手に自分の頭をガシガシと掻かきむしった。フェルメリア屈指の実力者が行方不明になっているせいで、国内に跋扈はつこする魔物を討伐するための戦力の配置をいちいち考えなければなくなっていて、どうにも面倒臭い。ハマラがいれば、中位程度の魔物の群れの十や二十、単騎で殲滅せんめつできるので、あまり考えなくともよかったのだ。

「なれば、陛下えんゆっきが炎竜姫を探せばよいでしょうに」

呆れた様な秘書官の声。先王、先々王の治世では冷静沈着が信条であつたこの秘書官、王がクライドロに代替わりしてから、よく表情を浮かべるようになったと評判である。勿論もちろん、悪い意味で。

「いや、リーシャ、なんか今邪魔したら馬に蹴られそうな気がしてさ」

フェルメリア国王は、渋い顔をして頼杖をついた。黒と緑の互い違いの瞳は、何処どこか遠くを見ていた。リーシャと呼ばれた秘書官は、奴隷救出任務中に、ハマラが偶然その場に居合わせた男を連れて何処どこかへ去つた、という話を思い出し、小さく溜息をついた。

「見つけたのでしょうか？」

「見つけたんだろうな」

何も任務中に伴侶を見つけてそのまま行方不明にならなくても良いだろうに、というのが、二人の共通の意見だつた。

「とりあえず、相手には悪いけど早く戻つて来てくんないかな」

「炎竜姫も、陛下だけには言われたくないと思います」

一国の長にあるまじき、クライドロの酷ひどい放浪癖ほうろうへきのせいで、仕事を度々押し付けられる秘書官は、容赦ようじやなく自らの主を突っ込んだ。

「俺ちゃんと仕事してるもん。情報収集とかさ」

「それは密偵に任せておくものです」

「シャー」

「あ、うっちゃんありがと。リーシャ固い。自分の目で見て初めて分かることもあるんだって」

「陛下の場合、八割は遊びでしょうに」

主従の会話の間の鳴き声は、クライドロのペットの魔物である、うっちゃんのものである。ちなみに、うっちゃんは、牙が鋭く発達した、二足歩行の兎うさぎの様な魔物だ。知性が発達した種の魔物なので、クライドロは、うっちゃんに色々と芸を仕込んでいるらしい。うっちゃんからお茶を注いでもらい、呑の氣きに啜すすっている国王を見て、秘書官は眉間みけんに皺しわを寄せた。クライドロが有能であることは認めているが、たまには真面目に仕事をしてほしいものだ。クライドロは何い時つでも脳天気過ぎなのだ。

ふと、クライドロが顔をあげ、うっちゃんが怯えたように身を震わせた。

「噂をすれば、影ってやつか」

窓から見えた、煉瓦色の翼。精兵揃そろいと言われるフェルメリアにおいてなお、低位の竜の眷属であるワイバーンに騎乗する者は数あれど、彼かの眷属の中でも高位であるファイヤードレイクに騎乗する者は、ただ一人。

「炎竜姫がようやく戻りましたか」

青い空を見上げながら、リーシャはそう呟いた。

炎竜姫と傭兵の攻防 その4（後書き）

「うっちゃん」はウサギっぽいから「うっちゃん」です。
はつきり言つて、クーさんはネーミングセンスがありません。

炎竜姫と傭兵の攻防 その5

久々に会った部下は、煩い荷物を抱えていた。

「結婚することにしたから、戸籍作って」

ハマラは実に良い笑顔だった。

「元のところに戻してこいよ」

クライドロは面倒臭そうに言う。実際に他国の人間を拉致してこられるというのと面倒ではあるのだが、人を捨てられた子犬か子猫のように扱うのは如何なものか。

「他に言うことはないのかっ!!」

ハマラとクライドロの、しょうもないやり取りに痺れを切らしたのだろうか。縄でぐるぐる巻きにされたうえに、隣のハマラにがつちりと抱きしめられているジャワードは、そう叫んだ。

「えゝ、なんか言ってハマラの気が変わるのかよ」

国王とは思えないクライドロの言葉に、うっちゃんとリーシャは思わず頷く。

「おい、あんた偉いんじゃないのか」

話を聞いた限りでは、クライドロはハマラの上官の筈であるのだが、顔を引き攣らせたジャワードの言葉に、クライドロは目を眇めた。微かに浮かべた笑みには、何とも言えない凄味が漂う。

「一つ言っとく」

人に在らざる硬質な光を宿した瞳に、ジャワードは居竦められた。

「ここは、神に見捨てられた土地なんだ。何も考えずに人の言うことにホイホイ従う様な奴が、生き抜ける場所じゃない」

ハマラとは比べ物にならぬ、威圧感。口の中が、カラカラに乾いた。

ジャワードの目の前に、ヒトの形をした『竜』がいた。

「ジャワードを虐めるな!!」

甲高い金属音。

「ちよっ、殺す気かよっ!」

部屋に響いた音は、ハマラの剣を、クライドロが己の獲物で受け止めた音だった。

「あー、俺が悪かったから、落ち着けて、ハマラ」

困った様なクライドロの言葉に、ハマラは彼を睨みつけながらも剣を収めた。悔しいが、竜人でしかないハマラは、真竜の血を色濃く受け継ぐクライドロには勝てないのだ。

そして、ハマラは、大きく息を吐いたジャワードを抱きしめる。今やハマラの世界の全てと言っても過言ではない男。ジャワードが誰かに害されようとするのは、ハマラには我慢できない。随分と制約が掛かった思考。その不自由さを自覚するも、ハマラは伴侶を知らないままにいる頃に戻りたいとは思わなかった。

そんなハマラの様子を、クライドロ達は生温かい目で見ているものの、それにハマラが気付くことはない。

「ま、置いといて」

恨みがましげなハマラの視線を誤魔化すように、クライドロは話を逸らす。

「お前の伴侶の戸籍は簡単に作れるけど、入籍は無理」

「何で？」

「怖い顔しない。結婚にはお互いの同意が必要なんだ。ハマラの場合、無理矢理なのが一目瞭然だから」

「……」

「今にも喰いそうに伴侶を見ても、意味無いだろ」

呆れた様なクライドロの言葉に、ハマラは困った顔をし、捕食者の様な目でハマラに見つめられていたジャワードは、彼女の視線が逸れて安堵した。

「ハマラ、結婚したいなら、ちゃんとそいつを口説き落とせ。今のままじゃ、本当に伴侶を手に入れたことにはならないぞ」

クライドロにしては珍しい、年経た者としての忠言。伊達に、一応数十年にも渡り、一国の王をやっていた訳ではないようだ。虚を突かれたハマラとジャワードに、クライドロはさらに続ける。

「とりあえず、一緒に住んでみたらどうだ？　ああ、他国と違ってフェルメリアの法律じゃ、男が被害者でも強姦罪が適応されるから、安心していいよ」

「できるか馬鹿！！」

ジャワードがそう叫んだのも仕方が無い。実際に襲われたのだし。

クライドロの提案が、竜族の性質を考慮した上でのぎりぎりの妥協案であったことを、後に諸々の誤解の末ハマラが大暴れした折に、ジャワードは思い知ることになった。

「じゃあ、これからよろしく」

ジャワードを抱きしめたまま、ハマラが華の様に笑う。どうやらクライドロの提案に乗り気の様だ。断れそうにない。ジャワードはげんなりと重い溜息を吐きだした。

「……こちらこそ……」

それでも、ジャワードがそう答えたのは、不思議とハマラに嫌悪感が湧いていなかったせいだろう。下手な人間よりもハマラの方が、良くも悪くもずっと真っ直ぐだ。

嬉しそうなハマラに頬擦りされながら、一体何時まで自分は縛られたままなのだろうかと、ジャワードは心の中でぼやくのだった。

伴侶にぞっこんの炎竜姫と、諦めの悪い傭兵の攻防は、この後もしばらく続いたという。

炎竜姫と傭兵の攻防 その5（後書き）

これで「炎竜姫と傭兵の攻防」は終わりです。
ちなみに、ジャワードに縛られる趣味はありません。

フェルメリア雑記の世界観について（前書き）

一度設定集というものをやってみたかったです。
作者の力不足などで、雑記内で書ききれなかった部分の補完的なもの。

あと、作者に無断で使用するのはやめてくださいね。

フェルメリア雑記の世界観について

魔法あり、魔物あり、精霊あり、異種族ありの、バリバリファンタジーな世界。あと、異世界人もたまに來ます。

魔法があるので、あんまし科学技術というのは発達していません。でも、錬金術というものは存在しているため、科学技術が発達する要素は十分にあります。ここで言う錬金術というのは、賢者の石、ホムンクルス人造人間といったファンタジーな技術と、薬品、機械人形といった科学技術に連なる技術が融合した学問です。

この世界に存在する大陸は5つ。それぞれ、ソリニア、シエルバ、オスニア、イタカ、ラテカと呼ばれています。

言語の方は、国や種族ごとに異なっていましたが、広く交易が活発になった現在は、共通言語なるものが使用されることが多いです。ちなみにフェルメリアでは、共通言語が使用されています。フェルメリアは、昔から種族や移民が多かったというのが、その理由。

また、この世界はある意味次元間の狭間に近く、偶発的に開いた次元の穴から、違う次元の生物が落ちてくることがままあります。特に、違う世界から來た人間は『異界の民』と呼ばれます。

『異界の民』はこの世界においては『異物』なので、この世界の反発・同化作用により、いろいろ補正が掛かります。ちなみに、その

点に着目して、『異界の民』を召喚しようとした人間がおり、そのための召喚呪式が存在しています。ただし、召喚された『異界の民』の補正は、次元の穴から堕ちて来た『異界の民』よりもずっと小さいです。

召喚と次元の穴とで『異界の民』の補正にどれぐらいの差があるかというと、分かりやすく戦闘能力を見た時、召喚は、ちよつとぐらの修行では、フェルメリアの中ボスに遭うと危ないぞというぐらい（上位ボスは即死です）。そして、次元の穴の場合、条件（めちやくちや修行した、不意打ちしたぜ等）次第では一なるモノと呼ばれる最高位の魔物を倒せるぐらいです。養殖モノより天然モノがすごいよ、という話。（＊「第一回魔王決定抽選会」の説明）

うつかり、もしくは、故意に召喚された『異界の民』はともかく、偶発的に来てしまった『異界の民』は元の世界に還れません。召喚されたなら元の世界の目印があるのですが、次元の穴で来てしまった場合、元の世界の目印なんかないので、どうしようもありません。（＊これも、「第一回魔王決定抽選会」の説明）

『異界の民』は、異界の技術や考え、言葉などを伝えてくれますが、『異界の民』についての扱いは、国や宗教によって様々です。フェルメリアの場合、『異界の民』は基本普通の移民と同じように扱われます。無駄に優遇して、ただ飯喰らいにはさせません。働かざる者食うべからずが、常識です。フェルメリアはそこそこ『異界の民』が来る方なので、『ハートマーク』、『テンパる』等の『異界言葉』が通じる場所です。

フェルメリア雑記の世界観について（後書き）

設定集はまた書きます。

フェルメリアについて その1（前書き）

フェルメリアについての説明です。
ちよつと、ゲーム的な用語あります。

フェルメリアについて その1

雑記の主な舞台の予定の国。

『異端なる王国』、『神に見捨てられた地』、『混血どもの国』等、様々な異名を有する。

まず、RPGで言う隠しダンジョン的な場所。国全体が、世界の力が集まりやすい・貯まりやすい、竜穴 みたいなもので、魔物が異常に強いです。

雑魚の魔物さえ、RPG初期のボス並み。普通の村人がうろついてたら即食われます。局地的な災害レベルの『災獣』と呼ばれる魔物が出没することも、珍しくありません。『災獣』は単体で軍隊一つを滅ばせますが、フェルメリアの精鋭は独り、または数人で、その『災獣』を倒せます。他国からすれば、どっちも怪物だという話。

また、フェルメリアでは世界最高位の魔物である 一なるモノ も二体生息が確認されています。

それが、陸の巨大獣^{ベヒモス}（超超超巨大な毛力バ）と 海の巨竜神^{リヴァイアサン}

（古き良き超超超巨大な海竜）。どっちも強すぎ&でか過ぎて（例：

陸の巨大獣^{ベヒモス} は町一つを余裕で踏み潰^{つぶ}せます）、倒す労力が半端ないので、基本放置です。ある意味共存してます。

もつとも、一なるモノ は倒したとしてもまた復活する存在なので、倒すリスクの割にリターンが微妙なのですが。 一なるモノ

の生体素材は、至高金属^{オリハルコン}の材料になりますが、温厚な 陸の巨大獣^{ベヒモス}

とかは寝ている間にこっそり毛を抜^{むし}ればいい訳で（ただし、陸の巨大獣^{ベヒモス} が寝返りを打ったり、身動きをしたりすれば、潰^{つぶ}されてジ・エンドとなります）。

地形は、草原、森林、山脈、池、湖、海、砂漠、湿地、火山と何でもござれ。どこにでも魔物がいる訳ですが、特にフェルメリア北部のロマリア山脈は高位の魔物の巣窟^{そうくつ}。隠しダンジョンの中の隠しダンジョンです。下手すれば、百人行って、百人が全滅するような場所。

竜穴 のせいで魔物が異常に強いですが、同時に魔力の塊である魔石・精霊の力の結晶である精霊晶がザクザクとれます。でも、良質の魔石・精霊晶がとれる所ほど、魔物が強いという……。

そんな、人が生きるのにあまりにも不適な場所であつたため、『神に見捨てられた地』と呼ばれるようになりました。

『神に見捨てられた地』であるが故に、フェルメリアは大昔から流刑地、迫害された人々の最後の安住の地の様な扱いを受けていました。そのため、多種多様な種族が集まり、共存、そして混血化が進み、その結果、『異端なる王国』、『混血どもの国』との呼び名を頂戴^{たてがみ}することとなりました。

フェルメリアについて その2（前書き）

フェルメリアにおける、「竜穴」（「フェルメリアについて その1」参照）と魔物の功罪のようなもの。

フェルメリアについて その2

フェルメリアでは、魔物に対する技術が発達しまくっています。

だって、うかうかしていると魔物に喰われますから。『神に見捨てられた地』という異名は、伊達ではないのです。

特に、魔法具と魔術、対魔物用の武器・防具（魔道器）は、他の追随を許しません。

これらが発達したのは、魔物の脅威が絶えず存在することの他に、フェルメリアの資源が豊富なこともあげられます。その1の方で紹介した魔石・精霊晶は、魔法具・魔道器の材料になるだけではなく、魔術を補助するための道具にもなります。例えば、魔力量の少ない人間でも、魔石があれば、自己が保有する魔力量以上の魔力を消費する魔法が打てます。実際、フェルメリアの魔道士（職業的魔法使い）には、少ない魔力の量を魔石で補っている人は珍しくありません。

フェルメリアでは、魔物のせいで戦闘に役立つ技術が発達しているのです。

ちなみに、フェルメリアではあり余る情熱を一点に全力投球する人が多いので、魔法具も魔術も、偏った性能を持つものがものすごい数存在します。

とにかく魔物を倒すことに重きを置くので、威力がやたらと高いです。オーバークイル上等なのです。

魔物と一緒に燃やしたり、吹きとばしたりして、地形が変わることもあるので、他国ではフェルメリア製の魔法具は使い勝手が悪かつ

たりします。けど、無駄なくらいに高性能なのは確かなので、フェルメリア製の魔法具は、他国からは引く手数多あまたです。

ちなみに、魔物もフェルメリアにとっては資源の一つです。

魔物の爪、骨、皮などは魔法具や魔道器の素材となりますし、肉や内臓は魔法薬の原料になったりします。魔物から採取される素材は、生体素材として扱われ、より高位の魔物のそれは希少性と性能の面からより珍重されることとなります。

魔物を専門に狩り、生体素材を採取することを生業にしている者の事を、魔狩人、と呼びます。（*「妖精を捕獲せよ！！」の説明）

多大なる犠牲を出すとしても、魔物がいるから、フェルメリアはフェルメリアであるのです。

魔物について

魔物魔物と言っておりますが、魔物と普通の犬猫と言った動物はどんな違いがあるのかと言うと、ズバリ、魔力の有無なのです。

それが最も大きな違いで、これによって、でかい・魔法が仕えたりする等のその他の違いが生まれます。

魔物も普通の動物も、一部例外を除き、生殖活動で増殖するのは変わりません。基本的に魔物は、どっかのゲームなどの様に勝手に湧いてくるものではないのです。

*後述の 一なるモノ と、アンデット系の魔物は例外ですので、あしからず。

魔力と言うやつは、広義的には、この世界で生きているもの全てが有しています。所謂、いわゆる生命エネルギーの一種だから。

しかしながら、狭義の、魔法に使うための魔力と言うものは、持っている、持っていない、果てはその量に至るまで、はっきりと差異が出るものなのです。

狭義の方の魔力は、その操作が出来なくても、持っていれば身体能力の上昇等の副産物があります。例えば、種族的に魔力の保有量が高い魔族（魔物よりの身体的特徴を持つ種族）と、例外はあれど他の種族より低い傾向にある人族（普通の人間の事）では、運動性能にも結構な差が出てきます。

先に述べたことは、人間でも魔物でも、あくまでも傾向なのですが、普通の動物よりも魔物の方が、保有している魔力の絶対量が高いのは事実です。

魔物の中でも、比較的人と友好的・人の役に立つものを魔獣と呼んでいます。魔獣は主に、乗り物・戦闘のお供として、人間達に利用

されているのです。

魔物自体も、生体素材が採取できたり、一部食用になったりと、人々の生活の役に立ってはいるのです。

魔物に襲われた・喰われた人の被害は、各国で問題になっていますけれども。

あと、魔物の強さもピンキリで、ほんとに弱いやつはただの村人に撲殺ぼくさつされますが、最上位の魔物ともなると、一国を簡単に滅ぼせます。（「フェルメリアについて」で出て来た、陸の巨大獣ベヒモス・海の巨竜神リウアイアサン は一国滅ぼせる方。こっちが手を出さなければ何もしませんが）

「フェルメリアについて」でも先に触れましたが、局所的災害に匹敵する魔物を『災獣』、最高位の魔物を 一なるモノ と呼んでいます。フェルメリアならともかく、『災獣』も 一なるモノ も、他国で出現したなら、被害の大きさや打倒うちたおした人物が伝説になります。

最高位の魔物である 一なるモノ は、謎が多い存在ですが、その圧倒的な魔力量と強さ、そして何度倒したとしても、数十年から数百年の空白期間を置いて、同じ姿・能力を有する個体が現れると言うことが知られています。ちなみに、倒した個体の記憶や経験が受け継がれているかは不明。倒してからの空白期間が長いため、次に現れた時に倒した人がだいたい死んで、確認しようがないのです。一なるモノ は誰かに倒されるまでずっと同じ個体のままなのかと問われれば、そうでもありません。陸の巨大獣ベヒモス に関しては、代替わりが確認され、代替わりの折にはちっこい（親に比べれば豆粒です）子ベヒモスが目撃されています。多分単為生殖なのでしょうね。

登場人物紹介：アル君の場合（前書き）

一度やってみたかった登場人物紹介。
ネタバレ含みます。

登場人物紹介：アル君の場合

*ネタバレ含むので、知りたくないよという方は、
回れ右お願いします。

本名：アルデイルト・E・シアリオス

年齢：17歳（『少年の旅立ち』時点）

容姿：黒髪にエメラルドと翡翠ひすいを合わせた様な緑色の瞳。中背、少し細めな体格。顔は普通。髪は癖があるのでいつもはね気味。

『アルくんのおはなし』の主人公。

いろいろなものに巻き込まれ気味な少年。

性格は、素直で心を許した人に対する情が厚いです。あと変だったり微妙だったりする知識は無駄にありますが、基本世間知らず。

父親が生粋の人族、母親が生粋の竜（真竜）なので、アル君は半竜ということになります。物理的耐久性や魔法耐性はめっさあるのに、中身がよわでよく吐血をするのはそのせい。真竜の血は強力ですが、アル君の人間の部分にとって毒なのです。彼の母親譲りの膨大な魔力に、人の影響が濃い器が耐えきれなくなるため、こっそり魔力を抑えるための薬を飲んでいます。

諸々の事情により、両親ともに亡くなっていますが、母方の祖父（真竜）と腹違いのお姉さん（人族）がいます。

名前は、お婆ちゃんのアルディラという名を男の子風にしたもの。ミドルネームの「E」は、竜としての真名の頭文字。竜の真名は、その名を口にすることが許されない者が、みだりに口にすると殺されかねない代物なので、アル君は頭文字しか公表してないです。

幼少時の諸々のトラウマのため、恐怖の象徴がお婆ちゃん（アルデイラ様）になってます。

フェルメリア北部の山脈に住んでいましたが、『少年の旅立ち』にて、アルデイラさんの教育方針により、川に放り込まれて王都に直行
王都内の水路に浮かんでいるところを【銀鱗亭】のティナちゃんに発見・保護される

そのまま【銀鱗亭】の雑用係に

そして『Happy Birthday』以降の話に至っていません。

* いろいろな注釈*

作者はハーレム願望がある方ではありませんので、当方の作品に美形は出たりしますが、超絶美形がてんこ盛りでもないはずです。

ちなみに、「フェルメリア雑記」に出てくるフェルメリアの人達は、そもそも人の美醜には疎いです。だって、種族によって美しさの基準は異なるので、混血ばかりのフェルメリアでは基準を決めようがないですから。髪や瞳の色を強調しているのは作者の趣味なので、あんまり身体の色彩が容姿の美醜に直結しておりません。

竜について その巻（前書き）

作者の竜に対する思いがつづつてありますが、うざいと思った読み飛ばして結構です。

竜について その巻

『フェルメリア雑記』では、『竜』という種族がぼこ登場しておりますが、それは、作者が「竜が出てくる話を書きたい!」と思った結果です。

読者の方には割とどうでもよい話ですが、作者は竜が大好きです。作者の竜好きは、FF7の召喚獣・バハムート（ドラゴンっ!!）を見て「かっけー!!!」と思ったのがきっかけ。前に読んだ本で、現実の伝承ではバハムートが実は魚だと知った時はショックでした。そんなわけで、作者の竜への憧れがまった「フェルメリア雑記」の中では、竜というのは話の中でとっても重要な種族です。

何せ、竜がいなければ存在しなかったもの・人物が多々登場しますから。今までの話を読めば分かりますが、フェルメリアという国自体、建国には竜が関わっています。

さて、『竜』と一言にいつても、この世界には本物の『竜』である真竜と、ある意味『竜』と紛いものと言ってよい亜竜が存在しています。真竜も亜竜もひっくり返して『竜』と呼ばれますが、厳密に言えば、『竜』は真竜だけなのです。ちなみに、亜竜の方は竜の眷属とも呼ばれます。

真竜はその巨大な力と優れた知性故に、世界最強の種族と名高いです。

ちなみに、『魔物について』などで触れた「なるモノ」はどうなのよ、と思われる方がおられるかもしれませんが、あれは個体で完結している存在なので、種族ではないのです。

さらに言えば、真竜も二つの種族に分かれており、一つの属性に特化したものと、あらゆる属性に通じたものが存在しておりました。前者は属性竜、後者は魔法竜と呼ばれます。

属性竜は火なら火、水なら水と、一つの属性を扱うことに長けた竜です。精霊と親しみ、また、その巨大な魔力で精霊を呼び集めるため、『妖精を捕獲せよ！』で登場した、精霊術と精霊魔法をミックスしたような能力を持っています。アル君のお婆ちゃんや、『つがいの双竜』で登場した皇帝竜、竜公はこっちの竜です。また、アル君やクーさんが継いだのも、属性竜の血です。

一方、魔法竜は、文字通り魔法に長けた竜です。特に魔力の操作に秀でており、属性竜とは比べ物になりません。最先端のロボット（魔法竜）とマジックハンド（属性竜）とで、玉入れ競争をするぐらいの差があると思います。もっと具体的に言えば、属性竜は仮初の姿をとれるようになるのは、成竜になってからさらに数千年の時を経た古竜になってからですが、魔法竜は幼竜のうちから仮初の姿をとれるようになります。

が、しかし、この世界において、繁栄しているのは属性竜の方で、魔法竜は衰退を迎えております。それはなぜか。

『届くことのない指先』でも述べられていた通り、母親より父親の魔力の方が高いとき、母体が胎児の魔力に耐えられず、母子共々死亡することが多いのがこの世界の常識です。胎児の魔力が母親より大きいと分かった時は、墮胎するか、胎児の魔力を強制的に抑える薬を投与するしかありません。

また、竜は卵で繁殖しますが、竜が仮初の姿をとっているとき、仮初の姿のモデルになっている、他の種族と交配可能になるというフアンタジールールがごさいます。

ということ、魔法竜は属性竜より他の種族と交配しやすかったのですよ。魔法竜は魔力の操作が優れているので、胎児の時期でも母体、ひいては自分自身を守るために、本能的に魔力を抑えることが可能なので、出生率もビクリするほど高かったのです。

そして、他種族との交配の結果、魔法竜の血は薄まり、生粋の魔法竜自体が少なくなってしまった訳です。ちなみに、竜の眷属は、魔法竜と他種族の交配のなれの果て、というやつです。

真竜は年経るごとに魔力が増大する種族ですが、魔力の増加率は魔法竜より属性竜の方が高いです。古竜になると、ほんとに同じ真竜かと思う様な差が付きます。それでも、魔法竜自体魔力がかなり高いのですが、属性竜の方が繁栄しているのは魔力量の差も一因ではあるのです。

竜について その弐（前書き）

今回は「真名」についての解説です。

竜について その貳

今までもちまちま出てきましたが、竜には「真名」というものがあります。

ただし、「真名」は真竜特有の慣習で、竜の眷属には「真名」の習慣がありません。アル君とクーさんの場合が例外で、彼等は真竜の血を色濃く受け継ぐために、人間としての名と共に、竜としての名を有しているのです。

「真名」というのは、文字通り竜にとってのまことの名前のことです。

「真名」は親兄弟といった近親者や、信頼できると判断した相手にしか明かされませんし、呼ぶことが許されません。それ以外の人間がうつかり呼んだら、それだけで殺される理由になります。

生理的な嫌悪の様なもので、頭で抑える抑えないの問題ではないのです。

『クライドロの話』で、シファナさんしかクーさんの真名を呼んでいないのはそんな理由。ちなみに、クーさんの親友のアーサーさんも、クーさんの真名を知っておりますが、立場上の問題で彼はクーさんを真名で呼びません。

「真名」とは言いますが、本来は竜に二つの名前がある訳ではありません。

親から貰った唯一つの名を、「真名」としています。

ちょっと分かりにくいと思うので、具体的な例として、アル君のお婆ちゃんを挙げます。

アル君のお婆ちゃんは真竜であり、名前は『アルディラ』と言いま

す。彼女にとつての真名は、この『アルディラ』です。

アル君はアルディラさんの事を『ばば様』としか呼んでいませんが、『Happy Birthday』でメイティアさんは彼女を『アデー』と呼んでいる一方、『妖精を捕獲せよ!!』・『初戀の味』においてウィンさんは『碧風の君』と呼んでいます。

『アデー』も『碧風の君』も、アルディラさんの呼び名ですが、この呼び名の違いは「真名」を呼ぶことを許されているか否かの違いです。

メイティアは「真名」を呼ぶことを許されているので『アデー』、ウィンは許されていないので『碧風の君』と呼んでいるのです。

ちなみにメイティアが『アデー』という愛称を使っているのは、他の人間にアルディラさんの「真名」を知らせないため。

真竜は基本引きこもりが多く、自分から言わない限り「真名」が広まるような事態は起こらないのですが、メイティアの様にあちこちぶらついている人に「真名」を呼ぶことを許したときは別です。「真名」を知る者がうっかり人前で「真名」を口にしたら、呼ぶことを許されないにも拘らず「真名」を知ってしまった人達が大変なことになります。だから、メイティアはアルディラさんのことを人前で呼ぶときは『アデー』という愛称を使っています。

他の真竜でも、「真名」を省略して呼び名にすることが多いようです。

フェルメリアについて その3（前書き）

今回は、フェルメリアの制度についてです。

フェルメリアについて その3

『つがいの双竜』であつたように、フェルメリアは王制ですが、他国と比べてかなり特殊な制度を採用しています。

特殊なところを挙げると、『王制にも関わらず王家が存在しない』・『王の選定がある物によって行われる』・『王の伴侶が王と同等の権限を有する』などです。

これらの事は、王都の結界と密接に関係していることです。

フェルメリアの結界は皇帝竜を礎に、歴代の王達を柱として作られたもの。その核となる物の一つが、『双竜の指輪』と呼ばれる魔法具です。これは皇帝竜の牙と鱗から作られた指輪で、王を選定するものです。

『つがいの双竜』でも述べられていた通り、初代王の血を引くことと、『双竜の指輪』という王の証の所有者であることがフェルメリアの王になるための資格です。

初代王の血筋から歴代の王が選ばれるのは、王都の結界の最初の柱が初代王であつたため。結界の呪式も彼に合わせて設計されたため、必然的に次代以降の結界の柱に必要な要素が初代の血筋になつてしまいました。【双竜の指輪】はより結界の柱に相応しい人物を選定する代物で、選定基準は王の精神に置かれます。精神が脆弱な奴は結界の柱に不適なのです。

フェルメリアに王家が存在しないのは、初代（男）が己の血を絶やさぬよう、手当たりしだいに女に手を付けてばんばん子供を作つたので、その血が広く拡散して一つの家系に収斂しなかつたから。フェルメリアには、王を輩出し得る血統は数多く存在しても、王の家系は存在しないのです。

初代は大分思い切つた性格だつたようで、誰かれ構わず子作りをし

たせいで、周りから冷たい目で見られても気にしませんでした。最終的に子供の数が数百にもなった、という逸話まであるので、ただけ種付けしたんだよ、という話になります。一応、子供は全員面倒見たらしいですよ。過酷な環境にあるフェルメリアでは、血を絶やさないことがとても困難だったので、初代は質より量でいく作戦に出たらしいです。でも、当時からフェルメリアでは真竜や竜の眷属に倣って一夫一妻制が主流だったので、やっぱり冷たい目で見られてました。初代を見習った、その数代先までの王たち（全員男）もまた同様。皆さん、目的のためにはどんな手段も厭わない性格だったようです。

王の伴侶とは二つで一つの【双竜の指輪】の片割れを、王以外に有する唯一人の事。王の伴侶は、王都の結界の柱たる王の代替品であるので、その対価として王と同等の権力が得られます。

ちなみに結界の副作用的なものとして、クーさんが気合と根性で結界の呪式を書きかえるまで、フェルメリアの王となった者は、死ぬまで王都から出られませんでした。出ようとしたら死ぬので。

蛇足ですが、王都の結界の呪式は複雑かつ緻密かつ膨大なものだったので、書き換えのためには、真竜並みの魔力と数十以上の異なった呪式を同時に起動できる技術、そして呪式を破綻させることなく書きかえるための知識が必要でした。

クーさん以前に王都の呪式が書きかえられることが無かったのは、真竜並みの魔力と数十以上の異なった呪式を同時に起動できる技術を持つ人がいなかったから。

魔石によって補充がきく魔力はともかくとして、異なった呪式を同時に起動するのはすごい難しいです。右手と左手で別々の文章を書くようなもんです。魔法具の補助を得たとして、どんなに優れた魔道士であっても、呪式の並列起動は5つぐらいが限度。奇跡の人で7つぐらい。ただしこの場合、単発で呪式を起動させた時より威力

が大分落ちていたらしいです。魔力操作に秀でた魔法竜でも10がやっと。クーさんは魔力操作がぶっちゃけ下手くそでしたが、広範囲の知覚・探査、ひいては並行演算処理能力では並ぶ者がいない風の属性竜の血を継いでいたため、結構な数の呪式の同時起動が出来ました。

竜について その参

今回は竜の『伴侶』についての話。

真竜や竜の眷属は基本一夫一妻制です。でも、何事にもある例外ありです。属性竜は兎も角、魔法竜の中には奔放な奴ほんぼつがいるらしいです。

真竜や竜の眷属の『伴侶』とは、唯一無二、絶対の、生涯共に在る異性、というやつ。

浮気しません。許しません。相手の浮気があつたら、いろんな意味で大変なことになります。

真竜はその巨大な魔力故に、特に雄で相手が限られてきます。何せ、雄は相手に己と同等以上の魔力が無いと子作りに支障が出ますので雌は割と相手の範囲広いです。逆に自分の魔力と同等かそれ以下でもオツケーになりますから。

なので。

本能なのか何なのか、竜は雄でも雌でも、己が伴侶と定めた唯一をすぐく大事にするし、執着するし、尽くしまくるのです。

カテゴリーとしては、純愛・溺愛・狂愛の何れいっかになるかと。

狂愛のカテゴリーになつちゃったら、特に他種族の場合、相手が大変。ヤンデレですよ。相手の浮気があつたら、相手を殺して自分も死ぬ勢いになつちゃう感じです。ついでに、周囲に甚大な被害が発生する可能性特大。

竜が何を以て伴侶を選ぶかといえば、『本能』或いは『魂』と形容されるモノによって。

同族はこれで上手いきます。寧ろ上手いかなかったら、なんか悪いこと起きるっつっ！！！と、皆パニック起こすでしょう。

一方、他種族の場合、上手くいったら儲けもん。

竜と人との恋の後には、悲劇しか残らない。（by『届くことのない指先』）

この言葉の通り、他種族、特に人族を伴侶にした場合、竜とその伴侶の末路が悲劇的なものになることが多いです。超長寿命な竜と短命な種族とは思考回路にも違いが出てくるので、見解の相違が重大な亀裂きれつをもたらすことが間々あるのです。これは竜に限らず、異種族婚には付いて回る問題でしょうが。

竜は伴侶を慈しみ、誠意を尽くすので、基本夫婦喧嘩ないです。

夫婦のどちらかが欠けたら、残った方はどうなるのか。

それは、夫婦による、としか言えません。

我が子がいれば、その子の成長を見守る個体もありますし、一方、子供を設けていたとしても伴侶の後を追う個体もあります。

ただ確実に言えるのは、竜が選ぶ伴侶はその生涯において唯一、という事です。

いまさらですが、『フェルメリア雑記』に出てくる竜は、空にも陸にも海にもいますよ！

こちらで言う西洋の翼竜や伝説的な海竜、恐竜っぽい地竜や東洋的な竜も何でもござれって感じですよ。種類いっぱいです。作者のいろんな竜を出したいな〜という願望の表れです。まだ果たされておりませんが。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7241w/>

フェルメリア雑記

2011年12月27日22時56分発行